2015 年度　修士論文

健康の殿堂

―19 世紀後半のアメリカにおける YMCA と「筋骨たくましいキリスト教」―

早稲田大学　大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻　スポーツ文化研究領域

5014A034-3

松下 大樹

研究指導教員：　石井 昌幸　准教授

目次

0. 序論 1
0-1. 問題の所在 1
0-2. 先行研究の検討 2
YMCA とスポーツ 2
筋骨たくましいキリスト教 4
中産階級とスポーツ 5
日本におけるアメリカスポーツ史研究 5
0-3. 課題設定および方法と構成 7
課題設定 7
方法 8
構成 8

1. YMCA と中産階級、中産階級とスポーツ 10
1-1. YMCA と中産階級 10
YMCA の誕生 10
中産階級の台頭 13
1-2. 中産階級とスポーツ 16
スポーツ信条 16
筋骨たくましいキリスト教 18

2. 体操指導者たちの群像 23
2-1. 大学体育 23
ヒッチコックとアマースト大学 23
サージェントとハーバード大学 26
2-2. 体育館競合 30
ルイスと「新体操」 30
ウィンドシップと「筋力探究者」たち 33

2-3. 方式論争 35
海を渡ったトゥルナー 35
スウェーデン体操の導入 39
アメリカ体育振興協会とボストン会議 40

3. YMCA と体育館 46
3-1. 体育館の導入とサーカスの時代 46
「身体事業」の萌芽 46
ニューヨーク YMCA と「四面計画」 48
ボストン YMCA と「サーカスの時代」 51
3-2. ロバーツと健康の殿堂 54
ロバーツとトレモント体育館 54
健康の殿堂 58

4. 体操からスポーツへ 64
4-1. ギューリックの時代 64
ギューリックと科学的な体育 64
ギューリックの時代 65
4-2. トレーニング・スクール 68
トレーニング・スクール構想 68
トレーニング・スクールのプログラム 71
4-3. 競技スポーツ主義 75
ロバーツの辞任 75
競技スポーツ主義 77

5. 終章 86

参考文献一覧 91
謝辞 97

0. 序論

0-1. 問題の所在

普通の人びとがなぜわざわざスポーツをするのか。例えば、健康のため。では、こうした発想はいつ頃いかにして生まれたのだろうか。本論文の根本的な関心はここにある。「適度な運動は健康に良い」のは誰もが知るところだとしても、「健康のために運動しなければならない」というのはどうも酷である。しかし、現実には腹周りに肉がつくと医師によって「指導」され、すらっとした容姿は「できる感じ」を醸し出す。よくいわれるように「健康ブーム」の先駆けが 1970 年代とするなら、「ブーム」にしては随分と持続的であるし、じっさいには「1970 年代半ば以降に日本社会に健康ブームが登場した」ことを裏付けるデータは存在しないともいわれる[1]。それでも、やはり「健康は良いもの」、「運動することは良いこと」というイメージは拭いきれない。ならば、この「健康主義的思考」は一体どこからやってきたのだろうか[2]。

健康のために運動したいと考えたとき、フィットネスクラブに通うという選択肢がある。人びとはわざわざお金を払って運動するのである。そこには、黙々とウェイトに励むサラリーマンもいれば、おしゃべりに花を咲かせる婦女もいる。普通の生活を営む、普通の人びとが運動をする。日本におけるフィットネスクラブ産業は、2014 年度に売上高 3117 億円、会員数 296 万 7079 名の市場規模を持つようになった[3]。また、近年では「ライザップ」（2012 年設立）のような成果志向型ジムも参入し、ますます成長が期待される産業でもある。フィットネスとは、「健康[fitness]」のために運動することであり、運動することで自らをある理想の状態に「適合させる[fit]」ことでもあるといえる（「ライザップ」の謳い文句「結果にコミットする」がそれをよく示している）。運動することでフィットな身体を実現することは、多くの人びとにとってはわざわざしなければならないことであり、ときに「強迫観念[obsession]」として彼らに覆い被さるのである[4]。

そもそも、「健康」とは何なのだろうか。何をもって「健康」とみなし、みなされるのだろうか。憲法では「健康で文化的な最低限度の生活」が保証され、WHO（世界保健機関）はそれを

---

[1] 高尾、44 頁。
[2] 野村一夫「メディア仕掛けの『健康』」、野村一夫ほか『健康ブーム読み解く』、青弓社、2003 年、22 頁。
[3] 経済産業省「特定サービス産業動態特定統計月報―平成 27 年 10 月分」、2015 年 12 月 16 日、43-44 頁。http://www.meti.go.jp/statistics/tyo/tokusabido/result/pdf/hv201510kj.pdf、2015 年 12 月 23 日閲覧。
[4] Green, p.182. もちろん、「健康」のためのスポーツとは、それほどストイックな実践でない場合もある。高尾は、「健康」を目的に体操教室に通う人びとがトレーニング後に「お茶会」と称して間食をする事例を挙げている。高尾、5-9 頁。しかし、本論文では「健康」のストイックな側面（健康は獲得されるべきもので、だからスポーツをした方が良いという前提）に着目したい。

「病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態」と定義する[5]。近年の日本における政策を見ても、2000 年に健康日本 21（21 世紀における国民健康づくり運動）が策定され、2002 年には健康増進法が制定されている。しかし、これらは「普通の人びとがなぜ運動するのか」という疑問に答えるものではない。なぜなら、それらが示す「健康」とは多様な意味を持つからである[6]。「健康」という言葉が指す意味も、それを獲得する方法も、時代によって変化する。そうした前提に立ったうえで、「普通の人びとがいかにして運動してきたのか」を考えてみたい。

そこで、本論文ではキリスト教青年会[Young Men's Christian Association]（以下、YMCA）におけるスポーツ関連事業の歴史的展開に着目する。YMCA といえば、今でこそ「スポーツクラブ」という印象が強いが、ひとかどの信仰団体がいつ頃いかにしてスポーツとの接点を持ったのだろうか。また、この団体の活動が中産階級のあいだで隆盛を極めたことにも注目したい。彼らが求めていたのは、まさしく「健康」だった。しかし、彼らにとっての「健康」とは、現代における「健康」といくぶん異なるものだった。いわば YMCA スポーツ史を描くことで、「普通の人びとがなぜわざわざスポーツをするのか」という問いに対する解答を提示することができるだろう。これは「健康」に焦点を当てたアメリカスポーツ史である。

0-2. 先行研究の検討

先行研究として、3 つの流れを確認しておく。すなわち、YMCA とスポーツ、筋骨たくましいキリスト教、中産階級とスポーツである。これらについては、第一章でも個別研究を扱いながら論じるので、ここではその概観にとどめることにしたい（とくに中産階級とスポーツについて）。加えて、日本におけるアメリカスポーツ史研究の現状にも目を向けることにする。

YMCA とスポーツ

1951 年、YMCA 史家ホプキンスが『北米 YMCA 史』と題した 818 頁に及ぶ大作を発表した。この研究は YMCA 史研究のバイブルであるといえるものの、あくまで「YMCA（という一団体）の歴史」であり、社会史的な配慮はほとんどなされず、「YMCA 身体事業の発足」と題する章をその団体史のなかで展開するにとどまった[7]。また、ジョンソンの『YMCA 体育の歴史』（1979

[5] 日本 WHO 協会による日本語訳を参照。http://www.japan-who.or.jp/commodity/kensyo.html、2015 年 12 月 23 日閲覧。
[6] 高尾は、こうした「健康」という言葉をめぐる運用上の性格を「だらしなさ」と呼んでいる。高尾、ii。
[7] Hopkins, *History of the YMCA in North America*, chap.6.

年）では、YMCA の体育・スポーツ活動が 7 つの時代に区分されつつも、その活動をより広い文脈において理解することにはあまり関心が払われなかった[8]。そうしたなかで、Mjagkij らは『漂流する男女』（1999 年）において、プロテスタントかつ中産階級の人びとによって支持された YMCA（及び YWCA）の活動がアメリカの都市において演じてきた役割を強調した[9]。なかでも、ラプキンは建築史の視座から YMCA とビジネス界の結びつきを指摘することで、YMCA が「男らしさの工場[manhood factories]」として機能していたことを明らかにした[10]。しかし、この研究でさえ、YMCA のなかで体育館という建築物が成立した経緯に触れられることはなかった。

ところで、YMCA とスポーツの結びつきは、1891 年にネイスミス（James Naismith, 1861-1918）がバスケットボールを考案したことに象徴されるように、19 世紀転換期における現象と理解されてきた。例えば、小田切はこの時期に YMCA に関わったギューリック（Luther H. Gulick, 1865-1918）を「YMCA の体育の確立者」とみなし、彼が「体操方式に代るスポーツ方式を強調した」ことを「YMCA の体育改革」として強調した[11]。同様にレイダーやリースは、その活動の中心が体操からスポーツへ移行したことを指摘した[12]。また、ホプキンスは 1890 年代を「ギューリックの時代」と呼び、パトニーはこの時代にギューリックが先導した「筋骨たくましいキリスト教」ムーブメントが YMCA を「神学的に変化させた」と主張した[13]。一方で、ベイカーは「ギューリックの時代」以前に、すでにボストン YMCA のロバーツ（Robert J. Roberts, 1849-1920）によって「ボディ・ビルディング」と呼ばれる軽体操が推奨されていたことに目を向けながら、ロバーツとギューリックのあいだの断絶を示唆した[14]。

しかし、これらの研究において、いつ頃いかにして YMCA がスポーツと結びついたのかを実証的に検討されたことはなかった。また、バスケットボールやバレーボール（1895 年に考案）などのスポーツが注目されるあまり、それ以前に体育館において体操が推奨されていたことにはほとんど関心が寄せられてこなかった。そこでおこなわれていたのは、必ずしもスポーツ（競技スポーツ）ではなかったのである。換言すれば、1880 年代にロバーツという人物が体育館を「健康の殿堂」と呼称し、「健康」の名のもとに軽体操を推奨していたという事実が、一次史料を通じて実証的に検討されたことはなかった。もちろん、そうした活動が同時代の体育館ムーブメン

---

[8] Johnson, *The History of YMCA Physical Education*. 7 つの時代区分は以下のとおり。①形成期（1851-1860）、②身体活動の萌芽（1860-1880）、③根本原理の確立（1880-1900）、④標準化と拡大（1900-1920）、⑤新体育の追求（1920-1940）、⑥身体の健康と豊かな暮らし（1940-1960）、⑦現代（1960-1976）。
[9] Mjaglij and Spratt , ed., *Men and Woman Adrift: The YMCA and the YWCA in the City*.
[10] Lupkin, “Manhood Factories;” —, *Manhood Factories*.
[11] 小田切『アメリカスポーツの文化史』、265 頁; —「ギューリック」、441 頁。
[12] Rader, pp.106-109; Riess, *Sport in Industrial America*, pp.21-22.
[13] Hopkins, p.251; Putney, “Luther Gulick,” p.164.
[14] Baker, *Playing with God*, pp.50-63.

トとの連続性において語られたこともなかった。本論文では、こうした体操やスポーツを含めた身体運動の総体を研究の対象とする。

ここで、日本における YMCA にも目を向けておきたい。日本の YMCA スポーツ史を扱った稀有な研究として、服部の『日本の都市 YMCA におけるスポーツの普及と展開』（2015 年）が挙げられる。そこでは、東京、大阪、横浜、神戸、京都の YMCA における「体育事業」に焦点を当てることで、YMCA が日本における近代スポーツの普及と展開に果たした役割についての考察がなされている。しかし、いかにしてアメリカの YMCA がスポーツと結びついたのか、さらにはそれがどの程度日本のスポーツ界に影響を与えたのかということに関して、服部はごく簡単な説明にとどまっている。また、アメリカの YMCA が“physical work”と呼んでいた一連のスポーツ関連事業に対して、服部は「体育事業」という訳を当てている[15]。しかし、あとで指摘するように、当時の YMCA はそれらを教育的というよりも娯楽的（あるいは逆説的に労働的）に捉えていたことを踏まえ、本論文では“physical work”を「身体事業」と訳すことにする。

筋骨たくましいキリスト教

YMCA と身体運動の関係を考察するうえで重要なのが、「筋骨たくましいキリスト教」という概念である。例えば、レイダーやリースは「筋骨たくましいキリスト教」を体系的に推し進めた組織として、YMCA を取り上げた[16]。この「筋骨たくましいキリスト教」は、アメリカスポーツ史を語るうえでのひとつの分析視点となってきた。近年になって、パトニーやラッドらによる研究も発表され、日本においても森本や川島などアメリカ史研究者から注目を集めている[17]。パトニーは「筋骨たくましいキリスト教」を 19 世紀転換期における「女性の宗教指導者に対する男性的反動」とみなし、森本はこの「男性的キリスト教」の台頭が「アメリカ社会全体にみられる諸現象の底流をなすものとなっている」と指摘した[18]。

この「筋骨たくましいキリスト教」とは、もともとイギリススポーツ史研究で用いられてきた概念だった。しかし、アメリカでも 1858 年に、ユニテリアン派の牧師ヒギンソン（Thomas W. Higginson, 1823-1911）が「聖者と身体」のなかでヒューズ（Thomas Hughes）の『トム・ブラウンの学校生活』（1857 年）に言及するなど、その思潮は早くからアメリカに伝わっていた。さら

---

15 服部、16 頁。
16 Rader, pp.106-109; Riess, *Sport in Industrial America*, pp.21-22.
17 Putney, *Muscular Christianity*; Ladd and Mathisen, *Muscular Christianity*; 川島「アメリカにおけるスポーツとキリスト教」; 森本『アメリカ的理念の身体』。
18 Putney, *Muscular Christianity*, p.3; 森本『アメリカ的理念の身体』、235-236 頁。

に、ヒギンソンはそこで「身体的な強健さ」と「霊的な神聖さ」が両立することを説いていた[19]。旧来のキリスト教会が身体運動の評価に消極的であったのにもかかわらず、である。川島は、この新しい潮流の誕生を、19 世紀に入って巻き起こった「第二次大覚醒」と呼ばれる改革運動によるものとみなしている[20]。じっさいに、この時代にはさまざまな改革運動が盛んになったが、そうしたムーブメントは 19 世紀半ばを過ぎても継承されていたのである。

こうした発想は、いうまでもなく「男らしさ」という概念と密接に結びついていた。これを男性史研究という視点から見ると、男性性のあり方が時代を通じて変容してきたことを明らかにしたロータンドや、そうしたジェンダーのあり方が歴史的かつイデオロギー的に形成されるとしたビーダーマンによる蓄積がある[21]。こうした研究との関連も議論されるべきだろう。

中産階級とスポーツ

YMCA と「筋骨たくましいキリスト教」という問題を扱う際に有効なのが、中産階級のスポーツ参加に関する分析である。このテーマは、第一章でも大きく取り上げている。もっとも参考にしたのは、リースの『工業社会アメリカのスポーツ』（1995 年）と「スポーツと中産階級の男性性の再定義」（1996 年）である。彼はそこで、スポーツを社会的に実用性のある活動とみなす「スポーツ信条[sport creed]」が、19 世紀半ばには中産階級の人びとに普及しつつあったことを指摘した。つまり、身体を動かすことが健康増進や道徳改善、性格形成に役立つと信じられるようになったのである[22]。また、リースはこの新しい思想が、「あらゆる気晴らし[pastime]が、道徳的で活力を取り戻す娯楽[recreation]であることを求める」ピューリタンの価値観に基づくものであると強調した[23]。第一章では、こうした分析視点に中産階級に関するさまざまな研究成果を反映させながら、本論文の土台を築いていく[24]。

日本におけるアメリカスポーツ史研究

日本ではまず、戦前にはレナードの『欧米体育史』、戦後にはライスらの『世界体育史』、ヴァンダーレンらの『体育の世界史』が翻訳され、1948 年には今村の『西洋体育史』が発表された。こうした研究の一部としてアメリカ体育史が紹介されたが、その関心は（学校の内外を問わず）

---

[19] Higginson, “Saints, and Their Bodies,” p.583.
[20] 川島、448 頁。
[21] Rotundo, *American Manhood*; Bederman, *Manliness and Civilization*.
[22] Riess, S*port in Industrial America*, p.5; ―, “Sport and Middle-Class Masculinity,” p.174.
[23] Riess, *Sport in Industrial America*, p.16.
[24] 例えば、以下の研究を参照。常松『ヴィクトリアン・アメリカの社会と政治』; 野村『アメリカ労働民衆の歴史』; Blumin, *The Emergence of the Middle Class*; Chudacoff, *The Age of the Bachelor* など。

体操に向けられていた[25]。とはいえ、スポーツへの視点がまったく欠けていたわけではなかった。今村は、1850 年代以降に登場した大学対抗競技（漕艇、野球、陸上競技、アメリカン・フットボールなど）が、1880 年代に入って本格化したことを指摘した[26]。さらに 1960 年には、山中が「どのようなスポーツを、どのような理由や態度をもって、どのようにその生活の中にとりいれてきたのであろうか」という問題意識のもと、植民地時代から 20 世紀前半までのアメリカスポーツ史の通史を描いた[27]。1982 年には、小田切が「“教育＝体育”という『島』以前に、むしろ文化という『海』の広がりとかかわるものに他ならない」スポーツ諸現象の展開を、「社会や文化や教育といった諸領域にかかわるその固有な歴史的経過の中で跡づけよう」と試みた[28]。

日本におけるアメリカスポーツ史研究とは、基本的に種目史研究の体をなしていた。とりわけ野球史研究に関しては、主に野球による日米関係史を扱った佐山による多作から、野球の成立に焦点を当てた内田による労作まで蓄積がなされてきた[29]。また、他の種目に目を向けると、水谷による一連のバスケットボール史研究や、川口や米田によるアメリカン・フットボール史研究が挙げられる[30]。こうして見ると、これまでの日本におけるアメリカ体育史研究とは体操の種目史であったといえるかもしれない[31]。こうした意味で、体操史をスポーツ史研究の一部とみなすこともできるが、日本では学校体育における体操について多く論じられ、学外の体操にはほとんど注意が向けられることがなかった。

さらに、その学校体操史が注目する 19 世紀後半という時代に、まさに近代スポーツが勃興したという事実が、体育史とスポーツ史のあいだに隔絶を生んできたと考えられる。アメリカ体育史はアマースト大学の体育や体操伝習所のリーランドに紙幅を割き、アメリカスポーツ史はプロスポーツやスペクテイタースポーツに健筆を奮う。後者については、ルーカスらやレイダーの著作が、20 世紀以降を扱った章のみ翻訳されている点からも明らかである[32]。ともすれば、スポー

---

[25] レナード、226-364 頁; ライス、157-304 頁; ヴァンダーレンら、327-474 頁; 今村『西洋体育史』下、443-550 頁。
[26] 今村『西洋体育史』下、513-520 頁。
[27] 山中、1 頁。
[28] 小田切『アメリカスポーツの文化史』、3, 9 頁。
[29] 佐山和夫『明治五年のプレーボール―初めて日本に野球を伝えた男ウィルソン』、NHK 出版、2002 年; ―『日米野球裏面史―美少女投手から大ベーブルースまで』、NHK 出版、2005 年; 内田隆三『ベースボールの夢―アメリカ人は何をはじめたのか』、岩波新書、2007 年など。
[30] 水谷豊『バスケットボール物語―誕生と発展の系譜』、大修館書店、2011 年; 川口智久「ラグビーからアメリカン・フットボールへの発展―スクラムをめぐる問題」、『一橋論叢』第 77 巻第 1 号、1977 年、108-114 頁; 米田満「アメリカン・フットボール発展史の一こま（一）」、関西学院大学『論攷』第 9 号、1962 年、123-134 頁など。
[31] 今村『学校体育の父リーランド博士』; 大橿『日米体育交流に関する実証的研究』など。
[32] J・ルーカス, R・スミス共著、片岡暁夫編訳『現代アメリカスポーツ史』、不昧堂出版、1980 年; ベンジャミン・G・レイダー著、川口智久監訳『スペクテイタースポーツ』、大修館書店、1987 年。

ツ史研究の対象としてのアメリカの事例が、時代的にパブリック・スクールとオリンピックのあいだで存在感を発揮できていないようにも思われる。

こうしたなかで、アメリカ史研究者の側からスポーツへのアプローチが見られることは注目に値するだろう。2014 年に沖縄で開催されたアメリカ学会第 48 回年次大会では、「スポーツをとおして見るアメリカ」という部会が設けられ、司会の川島はこの企画の目的を「スポーツの盛んなアメリカにおいて、それがアメリカ地域社会の形成、人種意識の変遷や、日米関係の構築において、どのように作用しいかなる意義を持ったのかに光を当てる」ことに据えた[33]。人種問題に主たる関心を持つ川島は宗教問題にも通じていて、『21 世紀スポーツ大事典』のなかでアメリカにおける「筋骨たくましいキリスト教」の事例として YMCA の活動を紹介した[34]。アメリカ史研究において、スポーツとは「アメリカ社会の人種・階級・ジェンダー・経済イデオロギーなど、アメリカ史の中核を占める諸問題を考察」するうえで恰好の対象であるということを[35]、アメリカスポーツ史研究者として再認識しておく必要があるだろう。

0-3. 課題設定および方法と構成

課題設定

こうした先行研究を踏まえて、本論文ではアメリカにおける研究成果を採り入れながら、種目史に捉われないアメリカスポーツ史を目指す。とりわけ、リースが「スポーツ信条」という言葉を使って説明を試みたように、スポーツに対する人びとの意識がさまざまな要因によって変容し、スポーツをすることがある社会のなかで正当化される過程を実証的に検討してみたい。

そこで本論文では、近代国家へと邁進する 19 世紀後半のアメリカにおいて、YMCA がいかにして「筋骨たくましいキリスト教」と結びつき、身体運動を受容したのかを明らかにすることを目的とする。そのため、ギューリックやネイスミスなどによってスポーツが推奨されるより以前に、すでにロバーツが「健康」の名のもとに体操を推奨していたことに着目して、同時代の体育館ムーブメントとの連続性において「健康の殿堂」の様相を実証的に解明していく。そのうえで、「普通の人びとがなぜわざわざスポーツをするようになったのか」ということについて考察する。

---

[33] 「アメリカ学会第 48 回年次大会要項・報告要旨」、2014 年、27-28 頁。部会 F「スポーツをとおして見るアメリカ」は司会の川島浩平のもとで、清水さゆり、南修平、永田洋一の三名が報告をした。
[34] 川島、447-451 頁。
[35] 「アメリカ学会第 48 回年次大会要項・報告要旨」、28 頁。引用部は清水の抄録による。

方法

上記の課題に応えるため、本論文ではスポーツを「目的にかなった運動[purposive exercise]」として捉えることから始める。これはトッドによって提唱された概念で、「特定の生理学的および哲学的目的をかなえるため」に実践される「合理的な」運動を指す[36]。こうした視角においては、体操であれ、スポーツであれ、運動の形態による区別はほとんど意味をなさないことになる。つまり、YMCA においてスポーツが体操に取って代わったのだとしても、そのことはそれ以前に体操が YMCA に根づいていたことを説明しないのであって、ここで問題となるのは、YMCA に「目的にかなった運動」がいかにして根づいたのかということなのである。

この視角を踏まえて、本論文では体育館におけるさまざまな運動に焦点を当てる。そのため、YMCA 以外の体育館ムーブメントに関しては、必要に応じて体育史（とくに体操史）の研究成果を参照しながら整理した。本論文の肝となる YMCA の体育館については、ニューヨーク YMCA やボストン YMCA の『年報』、北米 YMCA 同盟の『議事録』、YMCA が発行していた『ウォッチマン[*Watchman*]』、YMCA トレーニング・スクール（現スプリングフィールド大学）の『要覧』などの史料を用いた。史料の収集にあたって、スプリングフィールド大学のバブソン図書館アーカイブの協力を得た[37]。

構成

第 1 章では、YMCA と中産階級、スポーツの関係について整理する。すなわち、YMCA がいかに中産階級的であり、中産階級がいかにスポーツを受容したのかということについて概観しておく。本論文のキーワードとなる「筋骨たくましいキリスト教」についても、イギリスの事例を踏まえながら、アメリカにおける展開に目を向けていく。

第 2 章では、YMCA から少し離れて、同時代のアメリカにおける体育館指導者たちの群像に焦点を当てる。ここでは、大学体育、「体育館競合」、「方式論争」といった、19 世紀半ばから盛り上がりを見せた 3 つの流れに注目する。YMCA が体育館を導入した時代背景を探ることで、第 3 章以降の理解も深まるだろう。

第 3 章では、いよいよ YMCA の「身体事業」を扱う。YMCA は 1869 年に初めて体育館を建設したが、その新事業は最初から軌道に乗ったわけではなかった。とりわけ、ボストン YMCA では、曲芸師による無責任な指導がまかり通る「サーカスの時代」が訪れた。しかし、ボストン

---

[36] Todd, pp.2-3.
[37] また、以下のデジタルアーカイブも利用した。Kautz Family YMCA Archives: https://www.lib.umn.edu/ymca; Springfield College Digital Collections: http://cdm16122.contentdm.oclc.org/cdm/.

YMCA のロバーツによって、プログラムの中心が重体操から軽体操へシフトし、「健康の殿堂」において体操が正当化されることになった。

第 4 章では、「身体事業」の中心が体操からスポーツへ移行する過程を示す。ロバーツとは異なり、スポーツをたしなみ、「科学的な体育」を修めたギューリックは、YMCA の指導者を養成するトレーニング・スクールにおいて「競技スポーツ主義」の旗振り役となった。彼のもとで、1891 年にネイスミスがバスケットボールを考案し、1895 年には YMCA 内の競技スポーツ統括団体「アスレティック・リーグ」が設立された。

以上のような構成のもと、19 世紀後半のアメリカにおいて、YMCA と「筋骨たくましいキリスト教」がいつ頃いかにして結びつけられていたのかを明らかにする。

1. YMCA と中産階級、中産階級とスポーツ

YMCA ムーブメントが展開された 19 世紀後半とは、都市化や工業化のもとで中産階級が台頭し、スポーツが社会に浸透していく時代でもあった。ここではまず、YMCA がいかに中産階級的だったか、中産階級がいかにしてスポーツを受容したかということに注目したい。なぜなら、のちに見るような YMCA とスポーツの関係とは、こうした時代背景と不可分なものだったからである。

1-1. YMCA と中産階級

YMCA の誕生

YMCA とは、どのような時代に生まれたのだろうか。産業革命の最中にあったイギリスでは、「水呑百姓で一生を土に埋めるよりも、都会へ乗り出して、一旗挙げたいと、都会を目指す」無数の若者がロンドンなどの大都市に移り住むようになっていた[1]。その一人が、服地屋の見習い従業員ウィリアムズ（George Williams, 1821-1905）だった。敬虔なキリスト教徒であった彼は、同僚と聖書研究[Bible class]を始め、これが 1844 年 6 月 6 日の YMCA 設立へとつながった。その目的とは、「室内労働に従事する若者の霊的[spiritual]かつ知的[mental]状態を改善する」ことだった[2]。

この新しい運動は、直ちに北米に広がった。そのきっかけとなったのは、バンダリップ（George M. Van Derlip）という大学生がイギリス滞在中に YMCA と出会い、ボストンのとある雑誌に旅行記を投稿したことだった。そこには、ロンドン YMCA の様子が克明に描かれていた。

> 中央郵便局より英蘭銀行へ真直な道を進めば、グレシヤム街の右側にその戸に「基督教青年会」と記せる漆喰造りの大きな会館を見申べく候。同会館の階段を登れば六十尺に三十尺の広き部屋が有之、此室はマホガニーのテーブ、安楽椅子、長椅子等にて美しく飾られ、尚又英国の重なる新聞紙及び各国の新聞紙など置かれ居候。

---

[1] 奈良伝、15 頁。

[2] *First Annual Report of the London YMCA* (November 6, 1845), quoted in Doggett, *A History of the Young Men's Christian Association*, p.49. 霊[spirit]とは、ある一定の個性的で生命的な宗教的精神性で、それを体現する人びとを生かし未来をひらくもの。生命を与えるヤハウェの息が根源的意味としてある。聖書では、人間は霊魂と身体とに二分されず、神から与えられる命の霊によって生かされる具体的存在と考えられている。『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002 年、1212 頁。

更に階段を登ればあらゆる評論雑誌、其他の雑誌を備へたる一室に参るべく候。これに隣りて図書室が有之、同室にては時々講演があるとのことに候。図書室の有する書籍は八千内外にして或いは小規模なりとの評も可有之候へども、量より質の問題と存じ候。図書室にても毎日曜午後多くの青年が相会して、聖書研究会を致し居り候。同種の会は市の各所に青年会指導のもの(ママ)とに催され居り候。

この会を卒へたるものは立派な日曜学校の教師と成るべく候。図書室の次の階上には浴室、教室等有之候。又仏語、独語、ラテン語、グリーキ語、ヘブライ語のクラスの為にも室を備へあり候。各週英文学の研究もなされ居る由。

特に面白き設備は食堂にて候。糧は知識のためのみでなく、肉体のためにも備へられ居り候。午後の五時から八時で給仕が居り、会員に茶、コーヒー、チヨコレート其他の茶菓子を供し、その値は原価にてレストラント等の半値にて候。会員は執務時間を終へて夫々家庭に帰る前二、三時間を読書室に過し得べく候。[3]

バンダリップの旅行記は、さらに次のように続く。

今はロンドン市には、神の道を伝へる番頭が一人も居らぬと云う商店は無之く候。田舎よりロンドンに出た多くの青年は、直ちに魔の手より救はれ申すべく、彼等は無頼漢に誘はるる代りに歓びの場所に導かれ、余暇を楽しく有益に送る方法を教へられ居り候。

田舎出の青年も最早『私の霊を護つて呉れる人はない』と愚痴をこぼすことは出来ざるべく候。かくの如く護る人なき青年の霊をキリストに導くは青年会の第一の使命にて候。[4]

そこでは、YMCA がすでに「余暇を楽しく有益に送る」ための場所とみなされていた。これを読んだサリバン（Thomas V. Sullivan）のはたらきかけのもと、1851 年 12 月 15 日、ボストンにアメリカ初の YMCA が誕生した[5]。

アメリカの YMCA は、「敬虔なイギリスの種から育った果実だった」[6]。というのも、当初の目的は「若者の霊的かつ知的状態の改善」であり、より直接的に「福音主義信仰の推進」が意識

[3] *Christian Watchman and Reflector* (October 30, 1851), 鈴木、100-101 頁。原典に当たることができなかったため、鈴木による邦訳を引用した。なお、その際に旧字体を新字体に改めた。
[4] 鈴木、102-103 頁。
[5] カナダでは、同年 11 月 19 日にモントリオール YMCA が設立されていた（北米初の YMCA）。翌年には、ボルチモア、バッファロー、デトロイト、ハートフォード、ニューロンドン、コネチカット、ニューヨーク、ニューオーリンズ、ポーツマス、ワシントン DC、スプリングフィールドに設立された。
[6] Hopkins, p.15.

されていたからである[7]。活動の中心は聖書研究や宗教書の配布だったが、しだいに図書室や講義室、読書室、職業案内所、カフェテリア、寄宿舎、さらには体育館、ボウリング場、スイミングプールなどの施設が加えられることになった。主な会員は事務職員や学生、熟練工で、ニューイングランドの都市を中心に広がり、商人の家や若者の働く店が並ぶ商業区域に位置していた[8]。大都市とは、若者にとってこのうえない魅力の場である同時に、飲酒や賭博、売春など、諸悪の温床でもあった。YMCA はそうした都市の悪習に対する「向こうを張った呼び物[counter attraction]」となる事業を展開し、都市に出てきたばかりの若者にとって「第二の故郷[home away from home]」となった（**Figure 1**）[9]。その状況は、YMCA の設立から 1 世紀を経てもあまり変わらなかったようである。奈良は 1950 年に、日本 YMCA の機関紙『開拓者』のなかで次のように述べている。

> アメリカの両親たちはその子弟を都会へ送り出すとき、『駅へ着いたら何処へも寄り途をせず真すぐに Y へゆきなさい。』という忠告を繰りかへして来た。YMCA は青年たちにとつて最も安全な休息の場所であり、又青年でも支払い易い安価な料金で最も有効に、そして最も健全に時を過し得る『保証された』場所なのである。[10]

YMCA はまたたく間に都市のシンボルと化した[11]。1856 年までに北米で 56 の団体が誕生し、1860 年には 205 団体まで伸ばし、会員数は 25000 名に及んだ。南北戦争を経て、一時は 20 団体まで減ったとされるが、1869 年には 695 団体と盛り返した。そして、1895 年には 1448 団体、263000 名、さらに 1915 年には 2111 団体、720468 名と成長を遂げた[12]。この成長を支えたのが、1855 年 2 月にランドン（William C. Langdon）の呼びかけで設立された北米同盟だった。同盟設立に先駆けて 1854 年 6 月に中央委員会が組織され（1879 年に国際委員会[international committee]へ改称）、全米各地の YMCA を集めて毎年大会を開催する役割を担った。1855 年 8 月には、デュナン（Henri Dunant, 1828-1910）のもとで世界同盟が結成された。

初期の YMCA の活動を理解するうえで重要なのが、主事[secretary]と会館[building]である。事

---

[7] Hopkins, pp.17-18.
[8] Boyer, p.115; Lupkin, pp.3-5. 1900 年には事務職員が会員の過半数を占める都市もあった。例えば、シカゴで 50%、ブルックリンでは 57%に達した。Hopkins, p.239.
[9] Hopkins, p.6; Putney, *Muscular Christianity*, p.65.
[10] 奈良常五郎、2 頁。
[11] その状況は現在でも変わらない。例えば、YMCA の会館が N ゲージ用のプラモデルとして商品化されている。Lupkins, *Manhood Factories*, xv-xvi.
[12] Johnson, p.29; 木本、22-25, 58 頁。

業を拡大するには、運営する人と運営される場所が必要だった。当初、職員は有志のボランティアであったが、1852 年にボストンとワシントンの YMCA が有給で司書[librarian]を雇い、1857 年にはフィラデルフィア YMCA がワナメーカー（John Wanamaker, 1838-1922）を年収 1000 ドルで採用した[13]。YMCA 初の常勤主事となった彼は、この仕事をステップに実業界へ進出し、のちに百貨店王となった。また、1860 年代以前の YMCA は独自の会館を持たず、間借りした部屋で活動していた。YMCA 初の会館は 1859 年のウェストボルチモアのもので、1867 年にはシカゴ YMCA が大講堂と寄宿舎を含む 5 階建ての会館を完成させた。「YMCA 建築」の実現は 1869 年とされ、この年の 9 月にサンフランシスコ、11 月にワシントン、12 月にニューヨークの YMCA で会館が建築された[14]。これらの会館には、YMCA 初となる体育館も含まれていた。

こうした会館建築には、言うまでもなく莫大な資金が必要だった。YMCA の建築史を研究するラプキンによれば、1870 年代以降の会館建築ムーブメントは実業界との結びつきによるものだった（**Figure 2**）。例えばニューヨーク YMCA では、1865 年に著名な財界首脳陣を理事会メンバーとして引き込むことで会館建築の礎を築いていた[15]。YMCA は、ビジネスに不可欠な資質を提供する「男らしさの工場[manhood factories]」となった。「自己改善」を謳うこの組織は、実業界の期待に、そしてより多くの若者の関心に応えられるよう、時代とともに組織自体の改良を試みたといえるだろう。そのひとつが、本稿の主題である体育館の導入だった。

さて、ここで最後に注目しておきたいのが、会館が増加するにつれて YMCA があらゆる階層へ事業を展開するようになったことである。例えば、少年や陸海軍人、先住民族、黒人、移民、鉄道労働者向けのものなど、一見すると YMCA がかなり開かれた組織であったように思える。しかし、1869 年の北米同盟ポートランド大会で制定された「エヴァンジェリカル・テスト」は、正会員[active membership]を福音主義の教会員に限定するものであった。アメリカの YMCA は表面上あらゆる階層の若者に開かれていたが、実際には「中産階級やアングロサクソン、福音主義プロテスタントによって、彼らのために形づくられていた」[16]。

中産階級の台頭

19 世紀後半はアメリカにとって過渡期だった。とりわけ、南北戦争（1861-1865 年）後の経済

[13] Hopkins, pp.43-44. ワナメーカーは日本の YMCA ムーブメントにも貢献したことで知られる。1905 年、彼は京都 YMCA の会館建築費として 25000 ドルの寄付を申し出た。服部、72 頁。
[14]会館建築にかかった費用は以下の通り。ウェストボルチモア 7000 ドル、シカゴ 200000 ドル、サンフランシスコ 57000 ドル、ワシントン 200000 ドル、ニューヨーク 487000 ドル。Hopkins, pp.36, 149-151.
[15] Lupkin, “Manhood Factories,” p.44.
[16] Lupkin, *Manhood Factories*, p.3.

発展、大陸横断鉄道の敷衍、製造業の発展、急速な都市化、移民の大流入、領土の拡大など、これらすべてがアメリカを近代国家へと成長させた。1860 年から 1900 年のあいだに総人口は 2.4 倍（3100 万人→7600 万人）に脹れあがり、工業生産高の増加（19 億ドル→110 億ドル）に伴い、農業人口比率が低下（59%→36%）した。工業生産高では、1880 年代半ばにはイギリスを追い越して世界第一位となった。総人口に占める人口 2500 人以上の都市人口比率も増加（20%→40%）し、都市の中心部には摩天楼やスラムが形成されていった[17]。

こうしたなかで「普通のアメリカ人」として生活していたのが、中産階級[middle class]だった。彼らは「専門職や中規模の企業家・商人、俸給所得者など非肉体的労働従事者で、年収が 19 世紀半ばで 1000 ドル程度、世紀転換期で 2000 ドル程度の主として都市に移住する人びと」だった。そして、この中産階級こそが大量消費と革新主義の中心的な担い手となり、現代アメリカ社会を出現させる推進者となった[18]。一連の激しい変化の渦中で、中産階級そのものも変貌を遂げていた。19 世紀前半の中産階級は小規模で自営的な商人や職人、知的専門職、農民などから構成されていた（＝「旧中産階級」）。ところが、都市化・工業化にともない自営業比率が低下（19 世紀初頭 4/5→1870 年 1/2）すると、法人化が要請する職業集団、企業に勤めて事務的な仕事に従事するサラリーマンが加わった（＝「新中産階級」）[19]。

とりわけ、ホワイトカラーと呼ばれる事務職員の増加が目立った。ホワイトカラーは、早くも 18 世紀末には保険会社や銀行、株式取引所などに導入され、南北戦争までには運輸会社や新聞社、製造会社でも適用されるようになっていた。ホワイトカラー人口は 1870 年に 50 万 5000 人、1890 年には 75 万人まで増加したが、この増加の 3 分の 1 がタイピストをはじめとした女性の参入によるものだった[20]。19 世紀初頭において、事務職という仕事は上流階級の息子が実業家になるための「訓練期間」だった。しかし、企業の発展にともない仕事が細分化し、人員確保のために田舎から出てきた若者が採用されるようになると、事務職は以前のように「何でも屋[jacks-of-all-trades]」ではなく、写字生[copyist]や簿記係[bookkeeper]、小売販売員[retail sales personal]など、さまざまな特定業務を指すようになった。こうして、しだいに事務職は「将来性のない仕事」となっていった[21]。

中産階級とは、その中間性ゆえに「捉えどころのない[elusive]」不安定な階級だった[22]。「自分

[17] 野村、72-73 頁。
[18] 常松『ヴィクトリアン・アメリカ』、iii, 5 頁。
[19] 常松『ヴィクトリアン・アメリカ』、7 頁; ミルズ、52 頁。
[20] 野村、141, 147 頁。
[21] Rader, p.27.
[22] Blumin, chap.1.

たちは労働者なのか、中産階級的なサラリーマンなのか」[23]。彼らにとって、下層とのあいだに「一線を画す」ことは自らの存在証明にほかならなかった。そのため、家庭にカーペットやシャンデリアなどの「道具立て」を備えたり、さまざまな改革に積極的に関わったりした。「中産階級の身元証明は、内面的価値の外的表現であり、逆に外面化によって諸価値を内面化することだった」[24]。「道具立て」を備えることが大量消費に、改革に関わることが革新主義に繋がったとするなら、中産階級の「内面的価値」こそが現代アメリカ社会の原動力になったといえるだろう。その「内面的価値」というのがヴィクトリアニズムである。

「ヴィクトリアニズム」という言葉は、もともとイギリス近代史の概念であるが、アメリカにおいても 19 世紀後半から 20 世紀初頭までを表現する形容詞として定着している[25]。当時のアメリカに支配的だったヴィクトリアニズムに内包する多様な価値観として、自制的であること、時間厳守、規律正しさ、勤勉・禁欲・誠実、所有権の尊重、家族と家庭の重視、経験と篤信、名誉心、対面重視（リスペクタビリティ）などが挙げられる[26]。この「生活全般を統括する倫理」は、存在証明の手段を模索する中産階級によって受け入れられ、彼らのあいだに「家族革命」を引き起こした。すなわち、性別役割分担が生じ、家庭の意味が変化し、子供の数が減少したのである[27]。男性は外（生産）、女性は内（消費）という構造のもと、家庭はプライバシーを保証する施設として神聖化され、より少ない子供に教育や愛情が注がれるようになった。こうしたなかで、居間を飾り立てることが「社会的体面を表現し、職工の粗野な世界（下層階級）と流行の人工的な世界（上流階級）から、自らの家族を峻別できる振舞いの獲得」を示すようになった[28]。その空間は「家族の毎日の生活必需品とは無関係であって、ただ単に部屋を持つ余裕ができたということを見せびらかすための存在」だった（**Figure 3**）[29]。

それでは、家庭の外ではどうだったのだろうか。すでに述べたように、キーワードは「改革」である。つまり、改革に関わることがリスペクタビリティを重視するヴィクトリアニズムを強化することになったのである。また、ジャクソン期（1829-1837 年）には、「第二次大覚醒」が盛り上がりを見せていたことも、中産階級による改革運動の推進力となった。この信仰復興の時代には、禁酒運動や奴隷制廃止運動などが展開され、他人への奉仕や社会改革への参加によって救

[23] 常松『大衆消費社会』、48 頁。
[24] 常松『ヴィクトリアン・アメリカ』、5-6 頁。
[25] 常松『ヴィクトリアン・アメリカ』、1 頁。
[26] 常松『ヴィクトリアン・アメリカ』、16 頁。こうした価値体系は白人プロテスタントに限定されたものだった。
[27] 常松『ヴィクトリアン・アメリカ』、19-21 頁。
[28] 常松『ヴィクトリアン・アメリカ』、21 頁。
[29] レヴィット、52 頁。

済の可能性が高まると信じられていた[30]。例えば、妻たる女性は「家庭の保護」を大義名分に、禁酒運動に熱心だった[31]。さらに、キリスト教に基づく道徳改革も盛んだった。すなわち、聖書協会（1816 年）、日曜学校同盟（1824 年）、冊子協会（1825 年）、貧者の境遇改善協会（1843 年）、児童援助協会（1853 年）、YMCA 同盟（1855 年）、慈善組織化協会（1877 年）などが次々に設立された。「時期による強弱の相違こそあれ、19 世紀全体が改革の時代であり、いずれも中産階級によって推進されていた」[32]。

しかし、世紀転換期までに「独身の時代[age of bachelor]」が到来した。1890 年には、15 歳以上の全男性の約 4 割が独身だった[33]。それは離婚の増加や伝統的な結婚観・家族観の崩壊を伴うものだったが、「独身」が問題視されたのはこれが初めてではなかった。すでに 19 世紀半ばには、伝統的な「独身男性サブカルチャー」が中産階級の人びとから非難されるようになっていた。なぜなら、酒・賭け・女（売春）と密接に関わる「独身男性サブカルチャー」は、中産階級が信奉したヴィクトリアニズムとは、正反対のものだったからである[34]。とりわけ、プライズファイト、競馬、闘鶏などのスポーツに興じていたのは、労働者階級とスラム街に出入りする上流階級の人びとだった（**Figure 4**）。しかし、1830-1840 年代までには、こうした「スポーティング・カルチャー」が「家庭から締め出された」事務職員など中産階級の若者を魅了するようになっていた[35]。独身男性が創出した市場需要は、疑いなく都市商業施設の発展を駆り立てた[36]。家庭の福音は、独身男性を救うにいたらなかった。

1-2. 中産階級とスポーツ

スポーツ信条

中産階級はいかにしてスポーツを受容したのか。リースによれば、1840 年代から 1850 年代には、スポーツを社会的に実用性のある活動とみなす「スポーツ信条[sport creed]」が中産階級のあいだに普及しつつあった。すなわち、スポーツによって、健康が増進され、道徳が改善され、性格が形成されると信じられるようになったのである[37]。この理解に沿って、中産階級とスポー

[30] 常松『ヴィクトリアン・アメリカ』、232 頁。
[31] 岡本、34 頁。
[32] 常松『ヴィクトリアン・アメリカ』、6 頁。
[33] Chudacoff, p.48.
[34] Riess, “Sport and Middle Class,” p.174.
[35] Lupkin, *Manhood Factories*, p.9.
[36] Chudacoff, p.140.
[37] Riess, *Sport in Industrial America*, p.5; ―, “Sport and Middle-Class Masculinity,” p.174.

ツの関係を整理していきたい。

まずは、健康増進のためのスポーツについて。リースによれば、その起源は南北戦争前の中産階級の改革者たちに求められる。例えば、アメリカ統計学の父シャタック（Lemuel Shattuck, 1793-1859）は 1850 年に「知的文化に注目が集まり過ぎて、身体訓練[physical training]が軽視され過ぎてきた」と指摘し、自身も著名な漕ぎ手だった内科医のホームズ（Oliver W. Holmes, Sr., 1809-1894）は 1858 年に「朝の食卓の独裁者」という論考のなかで「アメリカ人の菜食生活」を非難した[38]。また、ニューヨークのセントラルパーク（1858 年オープン）など、市民に憩いの場を提供する市営公園ムーブメントも盛んになった[39]。

なるほど、ウォートンやグリーンは、フィットネスの起源を 1830 年代のジャクソン期の改革者たちに求めたが、それはあくまでスポーツ以外の手段によって健康を推奨するものだった。例えば、1829 年に刊行された『健康ジャーナル[*the Journal of Health*]』（1833 年廃刊）は、衛生問題の改善や禁酒運動の推進を重視していた[40]。スポーツがフィットネスの手段として注目されるようになるのは、リースのいうように 1850 年代以降であることを確認しておきたい。

次に、道徳改善のためのスポーツについて。これには、中産階級の生活環境と労働観の変容が関係している。例えば、事務職階級は 1830 年代あるいは 1840 年代まで、雇い主の家に住み込んで働いていた。しかし、事務職が一般化するにつれて、雇い主の家から離れた安アパートに住むようになった[41]。都市の誘惑にさらされた環境で、娯楽が生活の中心を占めるようになる。彼らにとって、もはや労働は神への「奉仕」ではなくなり、「日々の勤労生活から積極的な満足を味わうこと」もなくなっていった[42]。「労働の福音は、たちまち遊びの福音に道を譲った」[43]。野村が指摘するように、劇場やサーカス、スポーツなど、金銭を払って見る娯楽が出てきたのは、19 世紀後半の特徴といえる[44]。

同じ娯楽のなかでも、「健全な余暇[wholesome leisure]」あるいは「合理的娯楽[rational recreation]」とみなされるものがあった。それらは、酒場やミュージックホール、プライズファイトなどからなる「独身男性サブカルチャー」と対極に置かれていた。なぜなら、そうした「荒っぽい[rough]」男らしさを称賛することは、労働者階級（下層階級）の振る舞いとみなされたか

[38] Riess, *Sport in Industrial America*, pp.17-18; ―, "Sport and Middle-Class Masculinity," p.176. 他にも、以下の名前が挙げられている。William E. Channing（ユニテリアン派の牧師）、William C. Bryant（ジャーナリスト）、Bronson Alcott（内科医）、Sylvester Graham（菜食主義者）など。
[39] Riess, *Sport in Industrial America*, pp.24-25; ―, "Sport and Middle-Class Masculinity," pp.177-178.
[40] Whorton, p.38; Green, pp.20-21.
[41] Lupkin, *Manhood Factories*, p.8.
[42] ミルズ、203 頁。
[43] Somers, p.128.
[44] 野村、112 頁。

らだった[45]。そうではなくて、読書や演奏、居間での交際、そして身体運動などが推奨された。例えば、ソーヤー（Frederick W. Sawyer）は 1847 年の『娯楽のための嘆願』のなかで、演劇やサーカス、ダンスホール、酒場、売春宿、競技スポーツの代わりに「監督つきの体操[supervised gymnastics]」を提案した[46]。中産階級の人びとにとって、「独身男性サブカルチャー」と一線を画すことが、「健全」であり「合理的」とみなされたのである。

最後に、性格形成のためのスポーツについて。この主張を支えたのが、スポーツをすることで男らしさが推進されるという「思い込み」だった[47]。これは、男性性のあり方が変容したことに関わっている。ロータンドによれば、19 世紀という時代は「成り上がりの男らしさ[self-made manhood]」から「熱情的な男らしさ[passionate manhood]」への決定的な変化を経験した。つまり、「男らしさ」の依拠する基盤が、仕事での成功から仕事以外の楽しみや自己達成へと移行したのである[48]。そうしたなかで、野心や闘争心、競争心、攻撃性、強靭性、性欲、そして身体そのものが「男らしさ」にとって不可欠な要素となった。

この過剰なまでの反応は、「男らしさ」の危機に由来するものだった。それは、「巨大な機構の歯車にならざるをえず、目的意識も明確な方向感覚や達成感ももてずに、惰性的に働くホワイトカラーに特徴的な現象だった」[49]。とりわけ、女性比率が増加しつつあった事務職員は、激しい身体運動を「男らしさの喪失（あるいは創造の喪失）」への解決策とみなし、「男らしさという新興のカルト」を信奉した[50]。こうしたムーブメントは、すぐあとに見る「筋骨たくましいキリスト教」にも関連している。

以上のような「スポーツ信条」のもとで、スポーツは中産階級に積極的に受容され始めていた。彼らは娯楽のなかにも、ある種の「真面目さ」を求めていた。娯楽の場においては下層との境界が曖昧だったからこそ、彼らは「身元証明」のために娯楽に「合理性」を求めたのだろう。さらに、スポーツによって鍛錬された肉体が中産階級の「男らしさ」を示す「道具立て」となった。そのひとつの現われが、「筋骨たくましいキリスト教[muscular Christianity]」だった。

筋骨たくましいキリスト教

「筋骨たくましいキリスト教」とは、パブリック・スクールにおいて「アスレティシズム」と

---

[45] Bederman, p.17. 逆説的に、労働者階級にとって中産階級的な「弱くて女々しい」男らしさは嘲笑の的となっていた。
[46] Rader, p.24.
[47] Riess, “Sport and Middle-Class Masculinity,” p.179.
[48] Rotundo, pp.3-6.
[49] 常松『ヴィクトリアン・アメリカの社会と政治』、29 頁。
[50] Riess, *Sport in Industrial America*, p.62.

呼ばれた教育イデオロギーに関する分析視角として、とりわけイギリススポーツ史研究で用いられてきた概念である。例えば、阿部はキングズリ（Charles Kingsley, 1819-1875）やヒューズ（Thomas Hughes, 1822-1896）といった「筋骨たくましいキリスト教徒」が「19 世紀中葉のアスレティシズムを規定し、その興隆を正当化したことは間違いない」として、「筋骨たくましいキリスト教」の歴史的役割を「近代スポーツマンシップ」の理念形成という文脈から再措定しようと試みた[51]。また村岡によれば、「筋骨たくましいキリスト教」は 1850-60 年代において、パブリック・スクールの校長たちが学校の当局者として運動競技を正当化する根拠となっていた[52]。そもそも「筋肉的キリスト教」という言葉自体は、1857 年に出版されたキングズリの『二年前』とヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』に対して、それぞれサンダーズ（T. C. Sanders）とスティーヴン（Fitzjames Stephen）が書評のなかで用いたことに由来する[53]。この新しい思潮は、たちまち大西洋の対岸、アメリカに伝わった。

早くも 1858 年には、ユニテリアン派の牧師ヒギンソン（Thomas W. Higginson, 1823-1911）が「聖者と身体[Saints and Their Bodies]」のなかで、ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』に触れながら、信仰と身体運動の両立を説いた。のちに、彼は「アメリカ初の筋骨たくましいキリスト教徒」とみなされることになる[54]。

> 教会のなかに、身体的な強健さと霊的な神聖さは相容れないという考えがある。……身体的な健康は成功を続けるために不可欠な状態である。……我々はアメリカにおける身体的な健康の欠陥とその大いなる改善の必要性を認め、引き受けなければならない。[55]

ヒギンソンが指摘した身体と霊の「相容れない」状態とは、まさに伝統的なキリスト教会の態度を示していた。川島によれば、旧来、身体運動の評価に消極的かつ否定的だったキリスト教会は、「第二次大覚醒」（1800-30 年代）を契機に、それを積極的に奨励するようになっていった[56]。「第一次大覚醒」（1730-40 年代）には、身体運動に興じる人びとが「肉体的快楽におぼれる豚」とけなされたのにもかかわらず、である。前述したように、この信仰復興の時代には他人への奉仕や社会改革への参加がしきりに説かれていた。すなわち、そうした改革ムーブメントが、教会の

[51] 阿部、174, 176 頁。阿部は“muscular Christianity”を「筋肉的キリスト教」と訳しているが、本稿では「筋骨たくましいキリスト教」に統一した。
[52] 村岡、118-119 頁。
[53] 村岡、120 頁。
[54] Lucas, pp.30-33.
[55] Higginson, pp.583, 585-586, 587.
[56] 川島、448 頁。

タブーを破って身体そのものにまで及ぶことになったといえるだろう。

それでは、そのタブーはいかにして破られたのだろうか。ラッドらは、アメリカに「筋骨たくましいキリスト教」が普及した思想的な前提として、フィニー（Charles G. Finney, 1792-1875）、ビーチャー（Henry W. Beecher, 1813-1887）、ムーディ（Dwight L. Moody, 1837-1899）らの活動を取り上げている[57]。つまり、「神の主権的な恵みよりも人間の自発的な意志を重んじた」フィニーに感化されたウィリアムズが YMCA を設立し、「雄弁な説教で人々に進歩的なキリスト教を広めていた」ビーチャーがキリスト教会に身体運動を推奨し、のちに「YMCA の会長となって青年活動を指導した」ムーディがその支援ネットワークを形成した[58]。彼らによって、「筋骨たくましいキリスト教」が「離陸」するための準備が整えられていった。

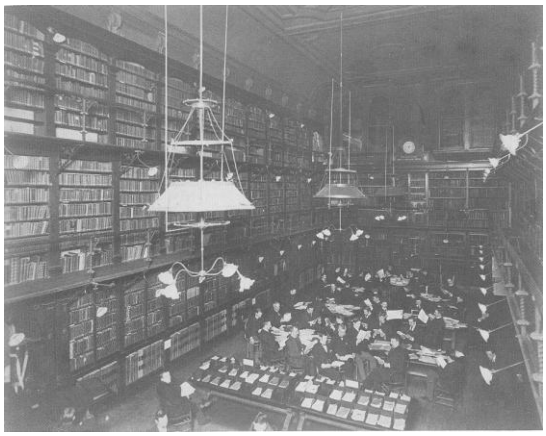
パトニーは、アメリカにおける「筋骨たくましいキリスト教」を「女性の宗教指導者に対する男性的反動」とみなし、19 世紀最後の 20 年にその「離陸」を位置づけた[59]。彼によれば、19 世紀後半のキリスト教の「女性化[feminization]」は次のように説明される。すなわち、南北戦争前におけるキャリア志向の男性たちがビジネスを選択したことで、教会のリーダーシップが女性の手に渡った。その結果、19 世紀のアメリカ文化は実質的に「女性化した」[60]。例えば、1870 年から 1900 年のあいだに、女性の聖職者は 67 名から 3373 名に増加していた[61]。こうした「男らしさ」の危機に瀕して、「男性的なキリスト教」が信奉されるようになったというのである。

このように、信仰の復興は「男らしさ」の復興とも結びついていた。そして、その「男らしさ」を求めた人びとがスポーツを始めたのである。「筋骨たくましいキリスト教徒」にとって、スポーツとは「男らしさの促進物」であり、「柔弱さの検査」であり、「精力の性的消費への代替物」だった。スポーツは「座りがちの中産階級の男性が『男らしい』身体特性を獲得することを可能にした」[62]。この「筋骨たくましいキリスト教」を体系的に推し進めたのが YMCA だった。

---

[57] Ladd and Mathisen, pp.28-35.
[58] 森本『アメリカ・キリスト教史』、84, 123-124 頁。
[59] Putney, pp.3-4.
[60] Ann Douglas, *The Feminization of American Culture* (New York: Doubleday, 1988); Putney, pp.24-25.
[61] 森本『アメリカ的理念の身体』、注 72 頁。
[62] Riess, *Sport in Industrial America*, p.21.

Figure 1.　YMCA の図書室（上）、読書室（中）、居間（下）

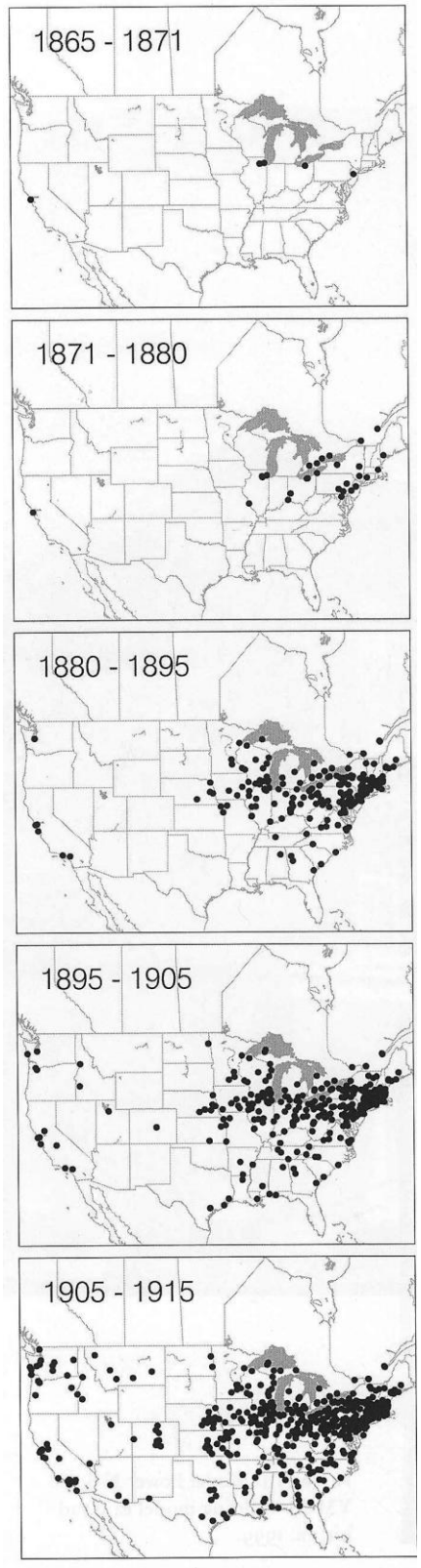


Lupkin, *Manhood Factories*, p.59.

Lupkin, *Manhood Factories*, p.56.

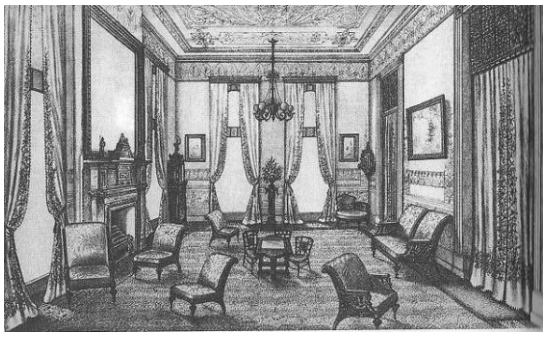
Lupkin, *Manhood Factories*, p.58.

Figure 2.　YMCA の会館建築ムーブメント



Lupkin, *Manhood Factories*, xvi.

Figure 3. 見せるための居間



レヴィット、53 頁。

Figure 4. 「独身男性サブカルチャー」としてのスポーツ

Lupkin, *Manhood Factories*, p.10.

2. 体操指導者たちの群像

この章では、YMCA からいったん離れて、同時代における体操指導者の群像に焦点を当てる。ここでは、19 世紀半ばから盛り上がりを見せた 3 つの流れに注目する。すなわち、大学体育、「体育館競合」、「方式論争」である。一見それぞれ異なった文脈を辿っているようにも思えるが、これ抜きに YMCA スポーツ史を語れないほど、のちの YMCA に影響を及ぼすことになった。

2-1. 大学体育

はじめに、アメリカの大学体育館に注目したい。それは同時に、大学体育の歴史をたどることにもなる。とはいえ、「1826 年から 1860 年までは、アメリカ中の大学当局は、体操の指導や競技スポーツの十分な設備を学生の為に準備することについては何らの考慮も払わなかったし、また、維持したこともなかった」[1]。それを示すように、体育が必修科目として合法化されたのは、ようやく 1866 年になってからのことだった[2]。一方で正課の体育とは、基本的に体育館における体操を意味していた。ここでは、二人の大学体操指導者を取りあげる。

ヒッチコックとアマースト大学

他大学に先立ったのは、明治日本の体育にも大きな影響を及ぼしたアマースト大学である。すでに 1850 年代から身体運動への関心の高まりを見せ、第 4 代学長のスターンズ（W. A. Stearns）は数度にわたって次のように述べていた。

> 私たちに最も求められているのは、『学生の健康を常に気遣う』ことである。……学生の健康状態が悪くなるというのは……、それを防ぐための適切な手段を講じるのであれば、全くあり得ない事だと思う。……このような（身体の）訓練を奨励するのは時期尚早だろうか。また、体育館建設のために十分な対策をいつ講じるべきであろうか。[3]

こうした要求もあって、1860 年にバレット体育館が誕生した。大学の評議員会は体育館の設立

---

[1] ヴァンダーレンら、340 頁。
[2] この年、カリフォルニア州が「健康習慣の手動は全学校課程を通じ、各学年に課すべきである……そして、生徒の精神と同様に身体をも健康かつ活発にする運動練習（physical exercise）に対し、しかるべき注意が払わねばならない」という法案を通過させた。ヴァンダーレンら、365 頁。
[3] 大橰、94 頁。こうした発言はおそらく、スターンズがハーバード大学でフォレンに教えを受けていたことに帰されるだろう。Doggett, *Man and a School*, p.41.

にあたって、「衛生学および体育学部[the Department of Hygiene and Physical Education]」の開設を取り決めていた。そして、新設学部の教授には体操の指導だけでなく、医師として教育を受けた経験が求められた[4]。こうして、1861 年 8 月に駆け出しの学部に採用されたのが、前学長の息子ヒッチコック（Edward Hitchcock, Jr., 1828-1911）だった[5]（**Figure 5**）。

ヒッチコックは、地質学者でアマースト大学の第 3 代学長（任期 1845-1854）だった、同じ名を持つ父と芸術家の母のあいだに生まれた。1849 年にアマースト大学を卒業すると、ハーバード大学医学大学院[medical school]で医学博士を取得した。1853 年からウィリストン・セミナリーで化学や自然史を指導し、1860 年には父とともに『解剖学と生理学の基礎』を著した[6]。1861 年にアマースト大学の教授になると、のちの半世紀をこの仕事に捧げ、学生から「老医師[Old Doc]」として親しまれた。

ヒッチコックの最大の功績は「体育[physical education]を大学レベルに導入した」点に認められる[7]。それは、彼が「人体計測学[anthropometrics]のパイオニア」として知られることに関わっている[8]。彼はあらゆる学生が身体運動に取り組むことができるよう、あとで取り上げるようにルイス式の軽体操を指導した。学生たちは 1 日 30 分、週 4 回の体操クラスへの参加を求められた[9]。1861 年の秋には、学生の身体的な発達と健康を推進する体育計画として、新入生を対象とした人体計測による評価が導入された。計測は各学生とも入学直後と毎学年末におこなわれ、その内容は年齢や体重、身長、胸囲、前腕囲、懸垂力、肺活量、垂直飛びなど多岐にわたった[10]。そして、その評価により各学生に適した運動を処方する「アマースト・プラン」は、その後のアメリカ大学体育界のモデルとなった。また、ヒッチコックはこうした体育計画を先導しただけでなく、生理学や衛生学、比較解剖学の講義を担当し、大学史の史料編纂にも当たっていた。かねてから自然史に傾倒していた彼にとって、科学とは「集めて比較する」ことであり、この「科学」的な体育もその一環であったといえるだろう。

ところで、ここでやはり注目しておきたいのが体育館である。1860 年に完成したバレット体

---

[4] ライス、222 頁。
[5] ヒッチコックの主な経歴に関しては以下を参照。Weston, p.107; Edward and Mary Judson Hitchcock Family Papers: Biographical note, Amherst College Archives & Special Collections, http://asteria.fivecolleges.edu/findaids/amherst/ma2_bioghist.html, accessed October 28, 2015.
[6] Edward Hitchcock and Edward Hitchcock, Jr., *Elementary anatomy and physiology: for colleges, academies, and other schools* (New York: American Book Co., 1860). 父ヒッチコック（Edward Hitchcock, 1793-1864）は 1830 年代の健康改革運動の主たる担い手となった。Green, *Fit for America*, chap.1-4; Whorton, *Crusaders for Fitness*, chap.1.
[7] Whorton, p.283.
[8] Weston. p.33.
[9] Swanson and Spears, p.130. 南北戦争前には、軍事教練を目的として行進[marching]や集団徒手体操[class calisthenics]が採用されていた。Weston, p.33.
[10] ライス、223-224 頁。

育館とは、その建設に最も多くの資金を寄付したノーザンプトンのバレット（Benjamin Barrett）に因んで命名されたものだった[11]（**Figure 6**）。それは高さ約 70 フィート、幅 50 フィートの 2 階建ての御影石造りで、1 階には事務室と更衣室、ボウリング場が含まれ、2 階は体操場に充てられた。1884 年にプラット体育館が新設されると、ビリヤードやボクシング、さらに野球の練習スペースが設けられるなど、体操のみならず競技スポーツへの関心が反映されるようになった。ただし、ヒッチコックは競技スポーツの人気の高まりを受け入れながらも、健康に不可欠な基盤として体操[gymnasium exercise]の必要性を強調し続けていた[12]。ちなみに、この新体育館も寄贈者プラット（Charles M. Pratt、ヒッチコックの元生徒）の名前を拝借したものだった。

また、アマースト大学への日本的関心として見逃せないのがリーランド（George A. Leland, 1850-1924）である[13]。1878 年の体操伝習所の開設にあたって、その「お雇い外国人」は日本に招聘されることになった。アマースト大学の卒業生で、ハーバード大学医学大学院を卒業したばかりのリーランドにとって、来日は「欧州留学の資金稼ぎに過ぎなかった」とみなされる[14]。1881 年に帰国すると、一年にわたるヨーロッパ滞在を経て、1883 年にボストン YMCA の体育館の医務担当者となった[15]。この経験を足がかりにして、1886 年にボストン市立病院の耳鼻咽喉科助医となり、のちにアメリカ咽頭学会会長となるなど、体操指導ではなく医学の道を極めることになった。アメリカでは著名な耳鼻咽喉学者として知られながら、「若い頃日本の学校体育に開拓者的な使命を果たし、その功績で日本の天皇から勲四等の勲章を贈られたことなどについては、体育界にも知っているものはほどんどない」という[16]。じっさい、彼が体育やスポーツに関する論文を残すことは生涯なく、母校であるアマースト大学の「体操にすぐれた学生に毎年賞金を出していた」ことくらいが、その分野への唯一の関わりであった[17]。ただし、リーランドのこうした経歴を差し引いたとしても、ヒッチコック式の身体計測学やルイス式の軽体操が日本に伝えられたことに対する評価は変わらないだろう。

---

[11] 大櫃、95 頁。
[12] Swanson and Spears, p.130.
[13] ほかにアマースト大学の卒業生として、札幌農学校の創設者クラーク（William S. Clerk, 1826-1886）や同志社の創始者新島襄（1845-1890）などがいる。
[14] 木下、50 頁。
[15] のちに見るように、この時期のボストン YMCA にはロバーツがいた。ここでは、両者の直接的な関わりを明らかにすることはできなかった。
[16] 今村『リーランド博士』、3 頁。
[17] 今村『リーランド博士』、58-59 頁。

サージェントとハーバード大学

次に、ハーバード大学のサージェント（Dudley A. Sargent, 1849-1924）に注目する（**Figure 7**）[18]。1879 年、サージェントはハーバード大学の身体訓練[Physical Training]の助教授となり、新設されたばかりのヘメンウェイ体育館の指導者となった。彼が体操指導者としての職を得たのは、これが初めてではなかった。体操に関心を示すきっかけとなったのが、1861 年にヒギンソンの著した「体操」だった[19]。ヒギンソンはそのなかで器具を用いた体操を推奨していたが、当時ベルファストという小さな町に住んでいたサージェントは、そうした記事を「フィットネスの勉強をするために」集めていたという[20]。そして、仲間と「サージェント連合[Sargent's Combination]」を立ちあげ、自分たちの離れ業を披露する巡業を始め、1867 年には本格的なサーカスで演技するようになった[21]。「サーカスが与えるロマンスや憧れは、鉄棒で車輪をすることがサーカスの出しものとして通用していた当時において、若き日の体操家にも少なからず影響を及ぼした」[22]。しかし、「必然的にのらくら者の一座[the inevitable company of loafers]」は彼にとって厭わしいものとなり、「職業的体操[professional gymnastics]の新たな使い道」を模索し始めることになった[23]。その第一歩が、ボウドイン大学の体育館での指導だった。

1869 年、サージェントはボウドイン大学で体操指導者の職を得ると、1871 年には新入生として入学し、体操指導と学生の二足の草鞋を穿くようになった。こうした指導によって、彼は週に 5 ドルを稼いでいた[24]。体育館に備えられていたのは、主に鉄棒や吊り輪、鞍馬で、これらは「上半身アスレティシズム[upper-body athleticism]」を強調するトゥルネンの産物だった[25]。サージェントは、腕で身体を吊りあげることは容易でないとして、そうした器具を「ある種の拷問」として非難した[26]。彼はのちに、この当時のことを次のように振り返っている。

> 雨後の筍のように、重量挙げの器械が居間や事務所、学校などに広がった。老いも若きも、運動することが広く称揚された。その改心によって、『最小の時間に最大の運動を』というスローガンがあらゆる来訪者に投げかけられた。[27]

---

[18] サージェントの主な経歴に関しては以下を参照。Weston, p.113; Swanson and Spears, p.132.
[19] Thomas W. Higginson, "Gymnastics," *The Atlantic Monthly* 7-41 (March, 1861), pp.283-302.
[20] Pena, p.4.
[21] サージェントと共演したゴルディ兄弟の長男 G. ゴルディは、のちにプリンストン大学の体操指導者となった（1869-1885 年）。小田切、125, 150 頁。
[22] 小田切『アメリカスポーツの文化史』、124 頁。
[23] L. W. Sargent, ed., p.4.
[24] Swanson and Spears, p.132.
[25] Pena, p.5.
[26] L. W. Sargent, ed., p.92.
[27] L. W. Sargent, ed., p.98.

この「雨後の筍」のような重運動ブームが、サージェントを改心させた。彼はまず、「筋肉を動かし発達させる方法を学んできたが、精力を保存する方法は学んでこなかった」ことを反省した[28]。また、自分がそれまで没頭してきた曲芸的な体操を批判し、一般の学生でも取り組むことができて、なおかつ精力を活性化させる運動を模索し始めた。そこで手始めに、インディアン・クラブと木製のダンベルを導入した。しかし、当時の学生たちが体育館に求めていたのは重運動であり、さらにいえば彼らは軽体操を「弱さの承認」とさえみなしていた[29]。これは、当時、木製のダンベルによる軽体操が「女性の体操」として広まっていたことに関係している[30]。そこで、サージェントは重りを調節できる器具を考案し、学生自身がそれぞれのレベルに合った体操を構成できるようにした。ここには、すでにのちの「機械的フィットネス[mechanized fitness]」の思想を垣間見ることができる[31]。ボウドイン大学は、サージェントに大学の学位と体操の哲学を与えることになった。

1875 年にボウドイン大学を卒業すると、サージェントはエール大学で体操を指導しながら医学を修め、1878 年には医学博士を取得した。彼にとって、医学の訓練とは「職業としての体操」の成功に不可欠なものだった[32]。その後、彼はニューヨークで「身体文化の衛生学校[Hygienic Institute and School of Physical Culture]」と呼ばれる私営体育館を開設した。そこでは、体操指導のみならず医学治療も受けられ、利用料は月間 10 ドル、年間 50 ドルだった。さらに、年間 100 ドルの「教員課程」もあった[33]。

そして、1879 年 9 月にハーバード大学に就任すると、ヘメンウェイ体育館で体操の指導を始めた（**Figure 8**）。この体育館もまた、寄贈者ヘメンウェイ（Augustus Hemenway）の名に因んだものだった[34]。サージェントは、何よりヘメンウェイ体育館の現状に失望した。重体操向けの旧式の器具が並んだ体育館は、ほとんど体操やボクシングの練習をするためだけの場所となっていたのであった[35]。そこは（重体操に耐えられるという意味で）許された者のみが利用できる場所であり、「概して、学生の身体は体育館の存在を無視していた」[36]。当時、ハーバード大学では漕艇部の活動が盛んだったことを考えると、体育館とは競技スポーツの補助装置にすぎなかった

[28] L. W. Sargent, ed., p.60.
[29] L. W. Sargent, ed., p.95.
[30] Pene, p.5.
[31] Pena, p.7.
[32] L. W. Sargent, ed., p.142.
[33] L. W. Sargent, ed., p.150.
[34] Gerber, p.309.
[35] Pena, p.7.
[36] L. W. Sargent, ed., p.167.

といえるかもしれない。1852 年には、アメリカスポーツ史上初となる大学対抗戦（ハーバード大学対エール大学）がおこなわれ、それ以降、いくつかの大学のあいだで対抗戦が盛んに行われるようになっていた[37]。体育館は、そうした大学スポーツの練習の場となっていたのである。

さらに、この体育館に関する興味ぶかいエピソードをもうひとつ紹介しておきたい。着任直後、サージェントがある卒業生に自己紹介をしたところ、「ああ、私がいたころは〔指導者が〕黒人だったよ」と聞いて、彼はますます興ざめしたというのである[38]。このことは、1850 年代のボストンで、黒人ボクサーが私営体育館で白人相手にスパーリングの指導をしていたことと、どれほどの差異があるのだろうか[39]。こうして、サージェントはハーバード大学の体育館でボウドイン大学時代から培ってきた「機械的フィットネス」の発展を目指すことになった。

まず試みたのが器具のさらなる改良で、そのひとつが滑車や重りを用いた「模倣運動[mimetic exercises]」だった[40]。これはまったく新しい運動を考案するというよりも、「刈る[chop]」や「挽く[saw]」といった日常生活における自然な動きを模倣することを意味していた。サージェントはこの運動によって、上位中産階級の学生を肉体労働に再接続し、彼らの身体に「一様な発達[even development]」を促そうとした[41]。それはまた、機械と身体的健康の共生関係を手ほどきすることであり、ホワイトカラー階級に参入していく人びとに「人間動力[human engine]のアナロジー」を実感させる役割を果たした[42]。

サージェントが目指していたのは、機械の使用による「あらゆる筋組織の全体的な発達」だった[43]。そのためには、鍛えあげるべき身体部位を的確に把握する必要があった。そこで、彼はヒッチコックのように「人体計測学」に注目した。さまざまな計測器具を用いることで学生ごとに「人体計測表」を作成し、それぞれに適した機械の使用を助言した。その際、巻尺や側径器[caliper]のみならず、肺活量計[spirometer]や圧力計[manometer]、動力計[dynamometer]など、体内の機能を数値化する器具もしばしば用いられた[44]。こうした体育プログラムは、のちに「サージェント・システム」と呼ばれるようになった。そして、この「サージェント・システム」のさらなる推進

---

[37] スミス、121-139 頁。
[38] Whorton, p.283.
[39] Moore, “Fine Specimens of Manhood .”
[40] Green, p.202.
[41] Pena, p.8.
[42] その極めつきが「イノモーター[inomotor]」だった。サージェントが考案したこの器具は、車台にシートとレバーを取りつけただけの簡素なつくりをしており、両端のレバーをボートのように漕ぐことで機械ごと前進することができた。これは人間がまさに機械の動力そのものになることを意味していた。サージェントはイノモーターに乗って「ドライブ」できる体育館を構想したが、大学関係者による猛反発によって計画をあえなく断念した。Pena, pp.11-13; Sargent, pp.312-323.
[43] Sargent, p.312.
[44] Pena, p.12.

を図るため、1881 年に「サージェント身体訓練学校[Sargent School of Physical Training]」がケンブリッジに設立され、1884 年にハーバード大学内に教員養成プログラムが、1887 年にはサマー・スクールが開講された。以上のように、サージェントは「機械」と「人体計測」と中心に、大学内に健康ムーブメントを展開した[45]。

サージェントがアメリカ体育の第一人者となりえたのは、ブレイキー（William Blaikie, 1843-1904）の影響によるところが大きい。ハーバード大学漕艇部の元主将であり、卒業後に弁護士となったブレイキーは、1879 年に出版した『いかにして強くなるか、そしてそれを維持するか』のなかで、サージェントの指導と器具を紹介しながら彼の「身体文化[physical culture]」を称賛した[46]。彼がサージェントの「機械的フィットネス」の哲学を強化したことは間違いない事実であり、サージェントがハーバード大学に就任する前に私営体育館をニューヨークに設立したのもブレイキーの推奨によるものだとされる[47]。また、ブレイキーは 1870 年前後に「同窓生出身のコーチ」としてハーバード大学の漕艇部に大きく貢献していた。例えば、彼はオックスフォード大学の漕艇部を訪問した際に学んだイギリス流の漕艇技術を母校に伝授したり、「冬の寒い時期には、室内で漕艇練習用の機器を利用して練習に励む」ように指導したりした[48]。無論、ブレイキーを漕艇部のコーチとみなすことができるだろう。

しかし、1881 年に学内組織として設置された運動競技問題委員会[Athletic Committee]は、プロコーチを排除する方向にはたらき、プロチームとの試合を禁止するものだった。3 名の教員からなるこの委員会には、他でもなくサージェントが含まれていた。委員会は、「〔競技〕スポーツが学生の健康に有益であることを認めつつも、それを完全な放任状態に置いておけば、学生の教育に悪い影響を与えることを恐れていた」[49]。こうしたなかで、学生や同窓生による委員会への不満も高まっていた。1888 年には、その折衷案として、学生 3 名、同窓生 3 名、教員 3 名からなる新委員会が結成された。しかし、その後も「競技スポーツに干渉しない」と明言した教員側が

---

[45] サージェントが目指していたのは、人間の限界を「越える」のではなく、それを「讃える」ことであり、「機械を通じて人間をより人間らしくしよう」としていた。「もし、こんにちのわれわれの機械的フィットネス方式が『人間的』というよりも、しばしば機械的である身体を生み出すことで『人間』の境界を越えているように思えるのなら、これはもとの考案者が意図していたことではなかった」。Pena, pp.3,16.

[46] William Blaikie, *How to Get Strong and How to Stay So* (New York: Harpers and Brothers, 1879); L. W. Sargent, ed., p.156.

[47] Pena, p.17, note.18.

[48] スミス、137-138 頁。一方のエール大学は、1864 年からウッド（William Wood）を指導者として招聘していた。ウッドのもとで部員は厳しい「特訓」と徹底的な「減量」を経て、その年のハーバード大学との対抗戦で 40 秒以上の大差で圧勝した。スミス、134-135 頁。のちにウッドがニューヨーク YMCA の体育館に関わることを考えると、この事実の重要性はいっそう増すことになる。

[49] スミス、190 頁。

フットボール廃止論を唱えるなど、大学スポーツの管理をめぐる権力闘争が繰り広げられた[50]。体育館の外には、サージェントの福音が行き届くことはなかった。

2-2. 体育館競合

19 世紀半ばには、健康の名のもとに体育館における体操が推進された。グリーンによれば、体育館は教会のような「都市の集会所」となり、そこでは「同じ考えを持った人びとの集団がお互いに知り合いになって、大都市における健康や道徳の危機に立ち向かうための方法を学ぶことができた」[51]。また、この時代の体育館とは、必ずしも教育的かつ公共的なものではなく、かなり私的で商業的な性格を持っていた。それは、今でいうところのフィットネスクラブに近い形態のものだった。

とりわけ、1860 年代、70 年代のボストンは、複数の体育館がひしめく「体育館競合[gymnasium rivalries]」の時代にあった[52]。ここでは、その代表的な体育館経営者として二人の人物を取り上げる。すなわち、軽体操のルイスと重体操のウィンドシップである。

ルイスと「新体操」

ルイス（Diocletian Lewis, 1823-1886）は、1845 年にハーバード大学医学大学院へ入学したが、生活苦のため中退すると、ホメオパシー医師のマッカーシー（Lewis McCarthy）に師事し、1848 年にバッファローで開業した[53]（**Figure 9**）。1851 年に妻ヘレンが肺病を患うと、ルイスは関連文献を渉猟するなかで運動療法に関心を寄せ、「バッファロー体育館の所有者」を訪ねた。この体育館はもともと「女性禁制」だったが、ルイスの説得により、ヘレンを含む女性患者が週に数時間だけ利用できるようになった[54]。「バッファロー体育館」の実態とは何か、そしてルイスがそ

---

[50] スミス、202-208 頁。
[51] Green, p.182.
[52] Paul, p.49. 1860 年の時点で、少なくとも 3 つの体育館が存在していた。すなわち、ドルト（John C. Doldt）のトレモント体育館、スチュアート（Paton Stewart、黒人ボクサー）の体育館、ルイスの体育館。*Lewis' New Gymnastics for Ladies, Gentlemen and Children and Boston Journal of Physical Culture* 1 (November, 1860), p.11. 南北戦争後には、ウィンドシップやバトラー、ポール、YMCA、YMCU などの体育館が加わった。
[53] マッカーシーは当時、ルイスの家庭医を務めていた。このとき、ルイスは医師免許を持っていなかったが、1851 年にクリーブランドのホメオパシー医学大学から「名誉学位」を取得した。Todd, p.231, n.19- 20. 1830 年代以降のアメリカでは、瀉血や下剤による伝統的な「正統」医療に対抗するかたちで、薬草を用いたトムソニアニズムやホメオパシー（同毒療法）のような「非正統」治療が支持を受けていた。フラー、27-71 頁。
[54] Todd, p.215. ルイスは 1864 年に、肺病とその治療法としての運動に関する著作を上梓した。Dio Lewis, *Weak Lungs and How to Make Them Strong or Diseases of the Organs of the Chest with Their Home Treatment by the Movement Cure* (Boston: Ticknor and Fields, 1864). 彼はそのなかで、フィラデルフィアの外科医ラッシュ（Benjamin Rush）を何度も引用した。Todd, p.215. ラッシュは、激しい運動によって身体の活力を呼び覚ますことで、肺病が回復に向かうと信じていた。高野泰「共和主義の精神、共和国の身体―ベンジャミン・

こでどのような指導をしていたのかは不明だが、このときすでに「男性のための体育館」が存在していたことは注目に値する。その後、ルイスは健康改良や禁酒、運動の効用を説く巡業講演家[itinerant lecturer]として生計を立てるようになった。この巡業は、西はアイオワシティ、東はプロビデンス、さらには南部の州やカナダにまで及び、新聞紙面はしばしば彼の「人間的魅力[personal magnetism]」について書き立てた[55]。こうして、彼は1850年代後半までに、自らの「一生の仕事[life-work]」とは何であるか確信し、「身体訓練[physical training]の体系」をアメリカの学校現場に導入する計画に着手したのだった[56]。

1856年、ルイスはパリに渡り、スウェーデン式の運動療法施設を訪ねた。彼はそこで、アメリカにはない医療体操を目の当たりにして、帰国後、それを応用することで新しい体操を考案しようとした[57]。ルイスが1860年にボストンに移り住んだのも、「身体訓練[physical training]のための学校を設立したいという願望」によるものであるとみなされる。「ボストンは明らかに、目的にかなった運動[purposive exercise]という新しい体系を試すのにもっともな場所だった。なぜなら、これほど身体訓練[physical training]に夢中であり続けた地区は、ほかになかったからである」[58]。この時期のボストンは「体育館競合」の様相に呈していたことからも、ルイスの野心はその潜在的な需要を求めていたのかもしれない。ともあれ、彼はその最初のステップとして、以前から親交のあったアレン（Nathaniel T. Allen, 1823-1903）の経営するウェストニュートンの英語古典学校[English and Classical School]で体操の指導を始め、マサチューセッツ州内の女学校や救護院でも独自の体操プログラムを展開した。

1860年は、ルイスにとって飛躍の年となった。この年8月にボストンで開催されたアメリカ教育協会[American Institute of Instruction]の総会において、彼は自身がウェストニュートンで教える「新体操[new gymnastic]」について雄弁に語り、さらにその翌日にはデモンストレーションを披露することで聴衆（観衆）をとりこにしたとされる。そして、ルイスの「新体操」は満場一致

ラッシュの『医学のアメリカン・システム』」、『東京成徳大学研究紀要』第10号、2003年、79頁。

[55] Todd, p.217. ルイスの講演巡業は1870年においてもなお健在で、女性たちが結束して酒場で祈ることでその店を閉店に追い込むことを推奨した。1873年12月24日、ルイスによる講演があったまさにその翌日に、オハイオ州ヒルスボロで、女性たちが酒場に押しかけ、讃美歌を歌って祈りを捧げた。Engs, p.123. ヒルスボロの女性たちによるこの「実力行使」すなわち「酒場訪問」は、1874年に「婦人キリスト教禁酒同盟」が誕生するきっかけとなった。岡本、33-37頁。

[56] Todd, p.218.

[57] のちにルイスを学校現場に導いたアレン（Nathaniel T. Allen）による書簡（1878年）を見ると、ルイスは「アメリカの学校にスウェーデン式の体操を導入した先駆者」とみなされている。Todd, pp.218-219. ただし、アメリカにおけるスウェーデン体操の導入は1883年のニッセン（Hartwig Nissen）によるものであるとされ、ルイス式の体操の「スウェーデン体操」としての影響力は確かではない。2-3も参照のこと。

[58] Todd, p.219.

で認められ、「全国的な教育組織の承認を受けた最初の運動体系」となった[59]。この「新体操」とは、ルイスが発明した亜鈴[dumb-bell]、木環[wooden ring]、球竿[wand]、棍棒[Indian club]、豆嚢[bean-bag]などの簡単な手具を用いた軽体操を指している（**Figure 10**）。他にも、ダンスや行進、音楽に合わせた体操などがおこなわれた[60]。それは「じゃまな器具[cumbrous apparatus]」の代わりに少量かつ簡素な「手具[implement]」を用いることで、「筋肉のたくましさ」ではなく「柔軟性[flexibleness]や敏捷性[agility]、優美さ[grace]」を身につけることを目指すものだった[61]。彼の目には、大がかりな器具によるドイツ式の重体操は「古い体操」と映ったのだろう。こうして協会の後ろ盾を得たルイスは、同年 10 月にボストンのエセックス通りに体育館をオープンした。この体育館が他の競合と異なっていたのは、男女ともに利用でき、いくつかのクラスが編成されていたことにあった。会費は年間 20 ドルで、のちにアマースト大学の教授となるヒッチコックも、この時期にルイスの教えを受けていた[62]。また、この体育館には診療所が併設され、妻のヘレンを含めた何人かの女性を雇うことで、「まさに 20 世紀後半のパーソナルトレーナーがそうするように」、女性患者向けに個別指導をおこなった[63]。ルイスの次なる課題は、「新体操」の専門家を養成する師範学校の設立だった。

少し先回りして言えば、ルイスは 1861 年 6 月から「体育師範学校[Normal Institute for Physical Education]」と呼ばれる事業をエセックス通りの体育館で展開した。これは「アメリカ初の体育師範学校」とみなしうるが、じつのところ彼はそれ以前から「生徒[pupil]」を育成していた。それは 1860 年 11 月にルイスが創刊した『淑女と紳士、子供のための新体操とボストン身体文化』誌の記述からも明らかである。例えば、創刊号では「有能な教師[competent teacher]」になろうとする「5 名のアシスタント」がいることが報告されているし、翌年 4 月の誌面では、ロイス（Charles S. Royce）という「生徒」について触れたくだりで、「卒業証書[certificate]」という言葉を確認することができる[64]。しかし、「学校」の正式な設立によって「生徒」の数は急増し、南北戦争を

---

[59] Todd, p.222.
[60] ルイスの新体操は、リーランドを介して日本にも伝えられた。ただし、ルイスが用いた“wand”の両端は丸みを帯びておらず、「球竿」というよりもたんなる「竿」であったと言える。したがって、「球竿」自体はルイスの発明品ではなく、“wand”が日本に導入される過程で改良された可能性もある。今村、74 頁。
[61] Lewis, p.1.
[62] Todd, pp.223-224.
[63] Todd, p.224.
[64] “Teachers for Gymnasia,” *Lewis' New Gymnastics for Ladies, Gentlemen and Children and Boston Journal of Physical Culture* 1-1 (November, 1860), p.9; “Teachers of Gymnastics,” *Lewis' New Gymnastics for Ladies, Gentlemen and Children and Boston Journal of Physical Culture* 1-6 (April 1861), p.87; Todd. p.225. トッドの記述から当該雑誌の存在を知り、『ハーティトラスト・デジタルライブラリー』を通じて原著にあたることができた。https://www.hathitrust.org/

はさんで運営された 7 年間に 421 名の卒業生を輩出した（1868 年閉校）[65]。この「師範学校」の年間受講料は男性 75 ドルに対して女性 50 ドルだった[66]。

1862 年、ルイスは自らの体操体系をまとめた『男性と女性、子供のための新体操』を著し、より幅広い層に「新体操」の魅力を訴えようとした[67]。同じころ、年に 2 回開催された卒業記念の体操公演もその一環だったといえるだろう[68]。この「新体操」熱は、「アメリカ初の筋骨たくましいキリスト教徒」ヒギンソンにまで伝わっていた。しかし、ルイスを称賛したはずのヒギンソンの記事を、ルイス自身は好ましく思わなかったようである。なぜならば、ルイスは新事業の成功が彼一人のみに帰せられるわけではなく、彼に学んだのちに各地で活躍する「生徒」たちの存在を、ヒギンソンが軽視していると考えたからだった[69]。なるほど、ルイスの師範学校が閉鎖されたあとも、ウェルチ（Folansbee G. Welch）やオーカット（Mary T. Orcutt）といった人びとが、彼の後継者として「新体操」の普及に尽力していた[70]。ルイスが一線を退いたあとも、彼の影響力は絶えることがなかったといえるだろう。

ウィンドシップと「筋力探究者」たち

ルイスが軽体操を推奨したのに対して、ウィンドシップ（George B. Windship, 1834-1876）は重体操を奨励した（**Figure 11**）。彼は、曽祖父の代からハーバード大学で医学博士を取得し続けるエリート階級の家庭に生まれた。16 歳のときにハーバード大学に入学したが、身長 5 フィート（約 152 センチ）、体重 100 ポンド（約 45 キロ）と比較的小柄だったこともあり、年上で身体の大きいクラスメートからいじめを受けていた。しかし、ドイツ式の体操と出会ったことでみるみる筋力をつけ、「ハーバード最強の少年」として知られるようになった。じっさい、彼は体操にのめり込むうちに健康状態が改善されたこともあって、「たくましさとは健康の本質的な要素である」ことを確信するようになったが、これはのちに「彼の主張の中心となり、普通の人びとや学校、YMCA、そして私営体育館の設立に哲学的影響を及ぼす核心となった」[71]。

卒業後、役者を志してニューヨークへ赴いたが、そこで出会ったのはウェイトリフティング・マシーンだった。結局、ウィンドシップは父の説得に折れるかたちで 1854 年の秋にハーバード

---

[65] このうちの約半数が女性であり、その多くが健康を損なった元学校教師だった。Todd, p.227.
[66] “Normal School for Gymnastics,” *Lewis' New Gymnastics for Ladies, Gentlemen and Children and Boston Journal of Physical Culture* 1-6 (April 1861), p.91; Todd. pp.225-226.
[67] Dio Lewis, *The New Gymnastics for Men, Women and Children* (Boston: Ticknor and Fields, 1862).
[68] 2000 名を動員する「体操狂想曲[gymnastic extravaganzas]」とも言うべき人気ぶりから、観客数を減らす方策として入場料を取るようになった。Todd, p.228.
[69] Todd, p.229.
[70] Todd, pp.267-268.
[71] Paul, p.44.

の医学大学院に入学したが、学業のかたわらウェイトリフティングに傾倒し、「怪力男」としての名声は街じゅうに拡散された。1857 年に医学博士を取得すると、故郷ロックスベリーに住む父のもとで医業に従事しながら、「めまぐるしい講演巡業[whirlwind lecture tour]」に着手した[72]。

最初の講演は 1859 年 5 月 30 日におこなわれたが、その約 2 週間前には新聞紙面で告知がなされるほどの注目ぶりだった[73]。巡業の呼び物となったのは、講演そのものというよりも、ウィンドシップによるウェイトリフティングの実演だった（**Figure 12**）。彼は、ルイスと同じように健康というテーマを扱う巡業講演家となったが、自ら肉体と離れ業を披露するという点では、明らかにルイスと異なっていた。ウィンドシップにとって、健康を獲得するためには肉体を鍛えあげることが不可欠で、それこそが彼のアイデンティティを形成しさえしていた。例えば、1862 年に発表された「筋力探究者の自画像」のなかで、「力こそ健康なり」という信念を打ちたて、肉体を日々鍛えあげることで病気や虚弱に打ち勝つことを強調していた[74]。

ウィンドシップが自分の体育館を持ったのは、南北戦争後の 1866 年後半か 1867 年前半であるとされるが[75]、じっさいのところ、すでに 1863 年にはそれに近いことをしていた。この年、彼はロックスベリーを離れて、ボストンのパークストリート教会の地下で診療所を開設した。そこではリフティング器機が用いられ、ウィンドシップによる指導もなされていた。その後、彼は 1867 年頃に診療所を備えた体育館をボストン・シアターの隣に開設するが、これによってボストンの「体育館競合」に参画することになった。ウィンドシップが体育館という新事業に本格的に乗りだすと、「ヘルス・リフト」を開発したポール（J. Fletcher Paul）や「リフティング療法」を考案したバトラー（David P. Butler）がその好敵手となった。例えば、ポールが筋力を「3 ヶ月で 2 倍にする」と言えば、ウィンドシップは「1 年で 3 倍にする」と言い、バトラーが運動器具の特許を申請すれば、ウィンドシップもそれに追随し、体育館でさまざまな器具を販売した（**Figure 13**）[76]。彼らのような「筋力探究者」の存在こそが、彼らを支持する「普通の人びと」の存在を証明することになるとすれば、いったいなぜこの時代に「力こそ健康なり」という信条が浸透したのだろうか。

すでに述べたように、都市化や工業化の進展する 19 世紀後半のアメリカにおいて、「スポーツ信条」や「筋骨たくましいキリスト教」が受容されはじめていた。筋骨隆々の身体とは、「男らしさ」の外面化であると同時にその内面化を証明するものであり、その状態こそが健康とみなさ

[72] Paul, pp.46-47.
[73] Paul, pp.46-47.
[74] “Autobiographical Sketches of a Strength-Seeker,” *The Atlantic Monthly* 9 (January, 1862), pp.102-115.
[75] Paul, p.49.
[76] Paul, pp.50-51.

れていたことは想像にかたくない。じっさい、ウィンドシップは明らかに女性を排除していた[77]。とはいえ、ルイスのようにウィンドシップに相対するかたちで健康のための身体運動を推奨した改革者もいた。また、ルイスとウィンドシップに共通することでもあるが、（その程度に差こそあれ）身体運動による健康改良とは彼らの改良運動の一部にすぎなかった。じっさい、ルイスがホメオパシーや禁酒運動に力を注いでいたように、ウィンドシップはアメリカ骨相学の権威であったファウラー兄弟から支持されていた[78]。

ところが、ウィンドシップ式の「たくましさの時代」は突如、終焉を迎えた。1876 年、ウィンドシップが 42 歳の若さで急死すると、筋骨隆々の身体を持つことと健康で長生きすることは必ずしも結びつかないことが立証されることになったのである。それればかりでなく、その翌年にはポールとバトラーの体育館が閉鎖され、「筋力探究」の道が断たれることになった。もちろん、あらゆる体育館が閉鎖されたわけではなかったが、少なくとも彼らの体操がかつてほどの高まりを見せることはなかった[79]。

2-3. 方式論争

この時代には、「どんな体操を教えるべきか」ということが盛んに議論された。それは、「方式論争[the battle of the systems]」とも呼ばれている[80]。これは、ドイツのヤーン（Friedrich Ludwig Jahn, 1778-1852）やスウェーデンのリング（Pehr Henrik Ling, 1766-1839）の弟子たちによって、さらに激化することになる。こうした「論争」の舞台となったのが、1885 年に結成されたアメリカ体育振興協会や 1889 年のボストン会議だった。アメリカ体育界の出現とは、19 世紀後半の「論争」の産物とみなすことができるだろう。

海を渡ったトゥルナー

アメリカにおける体育館の成立を考察するにあたり、まず注目したいのがドイツ体操、すなわちトゥルネン[Turnen]の系譜である。このドイツ体操の波は、二度にわたりニューイングランド地方に押し寄せたが、それこそがアメリカに体育館という思想を植えつけたといえる。それでは、

---

77 Paul, p.52.
78 ファウラー兄弟（Orson S. Fowler, 1809-1889; Lorenzo N. Fowler, 1811-1896）はともに「骨相学[phrenologist]」として知られていた。身体を限りある資源とみなした 19 世紀初期の「生気論者[vitalist]」に対して、身体運動による身体の肥大こそが生気のたくわえを増加させるとした。Todd, p.177. 彼らはまた、ハイドロパシー（水治療法）やグラハミズム（食餌療法）、メスメリズム（動物磁気療法）などにも、広く関心を持っていた。フラー、56 頁。
79 Paul, pp.56-57.
80 Weston, pp.24-47.

その思想はいつ実現したのだろうか。

結論的に述べるならば、アメリカにおける体育館の起源はいまだに特定されていない。ライスによれば、1826 年に設立された「アメリカ最初の大学体育館」は「ドイツ式体操場をそのままアメリカに移植した形であった」[81]。しかし、これはライスの『世界体育史』が邦訳された際に、“gymnasium”の用語を、安易に「体育館」としたことによる誤読であると思われる。大櫃が指摘するように、同時代の史料から「屋内体操場構想が顕著にみとめられた」ことには違いないが、ここでいう“gymnasium”は「広い運動場」すなわち屋外体操場の意味をも含んだ「体操場」と理解すべきである[82]。また、木下によれば、“gymnasium”とは、もともと屋外施設を指していたという。現在の体操競技につながる器械運動のみならず陸上運動や格闘技の練習の場でもあったが、19 世紀半ばから寒冷や雨天対策から屋内体操場すなわち「体育館」が必要とされるようになった[83]。われわれがイメージする体育館とは、この屋内体操場に球技施設を備えた“gymnasium”といえるだろう。

とはいえ、ドイツでは「体育館の設立はほぼ 1842 年以降と推定される」なか、「この時期すでに米国において体育館設立の構想が、はっきりと打ち出されていた」ことは、たいへん興味ぶかい事実である[84]。その意味において、体育館の起源を探究するうえでは欠かせない作業と考え、以下では“gymnasium”を必要に応じて「体操場」と訳しつつ、その成立過程を考察する。

1820 年にトゥルネンの創始者 F. L. ヤーンが逮捕されると、ドイツ本国では体操が禁止され、なかにはアメリカに亡命するトゥルナーも出てきた[85]。その一人が、ベック（Charles Beck, 1798-1866）だった。彼は 1825 年からラウンド・ヒル校（Round Hill School）でラテン語を教えるかたわら、ヤーン式の体操を週に 3 回（各 1 時間）指導した[86]。ある元生徒の回想によると、体操は「丘の真下の台地」で行われ、そこには「ドイツから導入されたばかりの体操器具が山のように存在していた」。まさに、ヤーンがハーゼンハイデに開設した体操場の「ミニチュア版」であったといえる[87]。ベックはまた、1828 年にヤーンによる『体操に関する論文』を英訳で出版

[81] ライス、167 頁。
[82] 大櫃、24 頁。
[83] 木下、17-18 頁。
[84] 大櫃、12 頁。屋内体操場の構想に関して、1825 年に John C. Warren がハーバード大学学長 Kirkland に宛てた手紙のなかに、「屋根付きスペース」や「個別の建物」という言葉を確認できる。大櫃、10-12 頁。
[85] 当時のドイツでは、トゥルナーは「革命陰謀の危険思想を持つ者」とみなされていた。小田切『アメリカスポーツの文化史』、113 頁。
[86] ラウンド・ヒル校は 1823 年に George Bancroft と Joseph G. Cogswell によって設立された。彼らはともにバーバード大学出身で、ドイツのゲッティンゲン大学で博士号を取得していた。
[87] Leonard, p.234.

することで、アメリカにおけるドイツ体操の普及に努めた[88]。

一方、ベックとともに亡命したフォレン（Charles Follen, 1796-1840）は、1825 年 12 月にハーバード大学のドイツ語教師となり、翌年にはヤーン式の体操を学生に指導し始めた。空いている「公会堂[commons hall]」にさまざまな体操器具をしつらえ、その他の固定器具は屋外の「デルタ[Delta]」に設けられた[89]。「デルタ」とは、ハーバード大学に存在していた円形競技場の通称である。そこでは、秋学期の第一月曜日に「血の月曜日[Bloody Monday]」と呼ばれる伝統的な「新入生いじめ」、すなわち新入生対二年生の「フットボール乱闘戦」がおこなわれていた[90]。体操は必修科目ではなかったものの、その「デルタ」において、毎週水曜日と金曜日の正午から 1 時間と放課後の時間が体操に当てられることになった[91]。アメリカに渡ったトゥルネンの種は、早くも 1820 年代にはニューイングランドの地に根ざそうとしていた。

こうしたトゥルナーたちの影響を受けて、ボストンでは公共体操場設置の動きが盛んになった。その中心にいたのが、ハーバード大学の解剖学及び生理学教授ウォーレン（John C. Warren, 1778-1856）だった。そして、1826 年 9 月にはボストン公共体操場[Boston Public Gymnasium]が誕生した。ここにフォレンが招聘され、「大人も子供もあらゆる年齢層の者がこの体操場に来て愉快に熱心に運動を練習し、新聞雑誌はこの体操場に就いて大いに書き立て、運動練習による体力の向上及び活力の回復に関する評判が喧伝された」[92]。しかし、「400 名もの紳士たちがオープニングの祝辞を述べに集まったとされる当初の盛況ぶり」は、ほどなく「珍奇性を強調させた風刺や漫画の対象なり、1830 年代までには下火になった」[93]。フォレンは 1827 年 6 月にこの体操場を退き、さらにその翌年にはハーバード体操場との関係を断った[94]。そして、1828 年にボストン公共体操場が閉鎖されると、その跡を追うようにハーバード大学も 1830 年に体操場を閉鎖し、ラウンド・ヒル校も 1834 年に財政問題から閉校を迫られた。1820 年代後半には、東部の都市においていくつかの私営の体操場も開設されており、男性を対象に数年で人気を集めたが、「10 年

---

[88] Charles Beck, *A Treatise on Gymnasticks, Taken Chiefly from the German of F. L. Jahn* (Northampton: Simeon Butler, 1828); 大櫃、33-36 頁。

[89] Leonard, p.236.

[90] スミス、179 頁。ヒギンソンは 1840 年代の「デルタ」におけるフットボールを次のように回想している。「私は今でも思い出す。あの『デルタ』に集まったときのわくわくした気分を。秋の夕暮れ、試合が行われている最中の喜びに満ちた叫び声、ボールの発する重く鈍い響き、踏みしだかれた草の素晴らしい匂い、……そしてあの見事な『突進（ラッシュ）』を。私にとってそれは偉大なる男たちのゲームであった……」。スミス、38 頁。

[91] ライス、167 頁。

[92] ライス、167 頁。引用にあたり、文中の「体育館」を「体操場」とした。ちなみに、当初はヤーン自身の招聘が計画されていたという。大櫃、9-16 頁。

[93] 小田切『アメリカスポーツの文化史』、113-114 頁。

[94] ボストン公共体操場では、フォレンの後任として同じく亡命者リーバー（Francis Lieber, 1800-1872）が指導にあたった。リーバーは、1827 年にアメリカ初とされる水泳学校を開設したことで知られる。

のうちに都市の体操場における規則的な体操運動の『流行』は廃れてしまった」[95]。皮肉なことに、ボストン公共体操場の開設直前にフォレンがベックに宛てた手紙には、次のような暗示的な比喩が含まれていた。

> 明後日、ボストンでの綱渡りが始まる。意味ありげな荘厳のなかで、まさに絞首台[gallows]が立っている。大柄な者[large]と小柄な者[small]、上品な者[genteel]と卑しい者[vulgar]など、絞首刑に処すべき悪人には事欠くことはない。[96]

再びドイツ体操のブームが起きたのは、1850 年代以降である。これは主に 3 月革命の鎮圧を受けて急増した「48 年世代[Forty-Eighters]」と呼ばれるドイツ系移民に、熱心なトゥルナーが含まれていたことによるものだった[97]。いわばトゥルネンの第二波は大きくうねりを打ち、早くも 1848 年には、ルイビルやシンシナティなどの中西部の都市を中心に体操クラブ[Turnvereine]が設立され、「老いも若きも家族そろって、体操、ゲーム、講演、討論、社交をするために体操クラブへ行った」[98]。こうしたクラブには、体育館はもちろん、ドイツ語文献を配架した図書室や読書室、講堂、教室、バー、レストランなどが含まれていた。1850 年に統括組織であるトゥルナー連盟[Turnerbund]」が結成され、1865 年には北米トゥルナー連盟[Nordamerikanische Turnerbund]へと改編された。1859 年に約 5000 名だった会員数は、1890 年までに約 40000 名まで増加した[99]。

1866 年には、ニューヨークに師範学校が設立された[100]。この学校では、トゥルネン以外にもカリセニクスや集団教練[mass drills]、水泳、フェンシング、合唱などの実技指導とともに、ドイツ語、英語、歴史学、文学、解剖学、生理学などの座学を、連盟に加盟するクラブの会員なら無料で受講することができた[101]。また、トゥルネンの影響はクラブ内にとどまらなかった。例えば、1866 年、シカゴのトゥルナーたちは教育委員会を説得して小学校に体操プログラムを導入させ、1889 年にはそれをハイスクールにまで拡大させた[102]。あるいは、ベッツ（Carl Betz, 1854-1898）のように師範学校を卒業したのちに、カンザスシティ内の公立学校の校長や教師を指導すること

---

[95] Paul. p.42.
[96] Leonard, p.237.
[97] トゥルナーすなわちトゥルネン・クラブ[Turnverein]の構成員は、基本的に学生や熟練工、知識人などの中産階級だった。「48 年世代」には多くのジャーナリストや医師、弁護士などが含まれていたことを考慮すれば、この二層は多分に重なっていたといえるだろう。Riess, *Sport in Industrial America*, pp.99-100.
[98] ヴァンダーレンら、344 頁。
[99] Riess, *Sport in Industrial America*, p.100.
[100] 1875 年、ミルウォーキーに移転。当時、教員養成を目的とした学校は、この他にルイスのものがあるのみだった。
[101] Pfister, p.1903.
[102] Riess, *Sport in Industrial America*, p.101.

で、あらゆる児童に体操を広めようとした者もいた[103]。こうして、トゥルネンはアメリカの地に少しずつ根ざしていくのだった。

スウェーデン体操の導入

アメリカに初めてスウェーデン体操（学校体操）が伝わったのは、1883 年であるとされる[104]。それは、スウェーデン副領事であったニッセン（Hartvig Nissen, 1857-1924）が、ワシントン D. C. にスウェーデン式健康研究所[Swedish Health Institute]を設立し、フランクリン・スクールでスウェーデン体操を指導したことに由来する。しかし、本格的な普及の立役者となったのは、ポッセ（Nils Posse, 1862-1895）と慈善家ヘメンウェイ（Mary T. Hemenway, 1820-1894、ハーバード大学ヘメンウェイ体育館の寄贈者の母）だった。ポッセはストックホルム王立中央体操学校の出身で、1885 年にボストンへ渡り、体操の指導を始めた。一方で、ヘメンウェイは学校児童に向けた身体訓練[physical training]の必要性を感じており、ポッセを支援することでボストンの公立学校にスウェーデン体操を導入しようとした。そこで目を向けたのが、公立学校の教師だった。1889 年には、ポッセを指導者に迎えたボストン体操師範学校[Boston Normal School of Gymnastics]が設立され、「100 名の公立学校教師」のために一年間の無料講習会が開かれた。結果的に、翌年度末までに 97 名の卒業生を輩出した。ポッセは 1890 年にボストン体操師範学校を退くと、ポッセ師範学校[Posse Normal School]を設立した[105]。

後述するように、1889 年にはボストン会議が開催された。そのとき、基調講演の大役を務めたのがハートウェル（Edward M. Hartwell, 1850-1922）だった。彼の特筆すべき点は、医学博士だけでなく生物学博士を取得していたことである。また、1869 年にアマーストカレッジに入学しており、ヒッチコック式の「アマースト・プラン」の洗礼を受けていた。その後、1881 年にジョンズ・ホプキンス大学で生物学の博士号を、1882 年にマイアミ医科大学[medical college]で医学博士を取得すると、その年の秋からジョンズ・ホプキンス大学の身体文化[Physical Culture]の指導者となった。体育館建設の計画を立てるなかで、彼はさまざまな体育館を視察し、ハーバード大学のヘメンウェイ体育館とサージェントに出会った。そして、1883 年 12 月 7 日、サージ

---

[103] Pfister, p.1902. ベッツは 1887 年に *A System of Physical Culture* を出版した。

[104] スウェーデン式の医療体操は、南北戦争前にはテイラー（George H. Taylor, 1821-1896）によって伝えられていた。ヴァンダーレンら、361 頁。テイラーは 1852 年にハーバード大学医学大学院を卒業すると、1858 年にはストックホルムへ渡り、リングの学校で学んだ。Todd, pp.166-167, note.47. 主な著書に、*An Exposition of the Swedish Movement-Sure, Embracing the History and Philosophy of this System of Medical Treatment, with Examples of Single Movements, and Directions for Their Use in Various Forms of Chronic Disease, Forming a Complete Manual of Exercises* (New York: Samuel R. Wells, 1860) がある。

[105] Lenard, pp322-325; ライス、244-245 頁。ポッセは 1887 年に *Medical Gymnastics*、1890 年に *Swedish System of Educational Gymnastics* を出版し、1892 年には月刊誌 *The Posse Gymnasium Journal* を刊行した。

ェント式の体操器具を備えた体育館が完成した[106]。そうした経験を生かして、1885 年にはアメリカ教育局局長のイートン（John Eaton）の要望で、大学体育の現状を取り上げた『アメリカの大学における身体訓練』をまとめた[107]。

ハートウェルがスウェーデン体操と出会ったのは 1884 年で、それはワシントンでイートンにニッセンを紹介されたことがきっかけとなった。そして、1887 年、ジョンズ・ホプキンス大学に招聘されたニッセンのもとで学生が初めてスウェーデン体操の指導を受けた。翌年、ハートウェルはヨーロッパに渡り、ストックホルムの王立中央体操学校にも足を運んだ。1890 年には、ジョンズ・ホプキンス大学を辞し、スウェーデン体操を指導するボストン体操師範学校で職を得た[108]。結果的に、ハートウェルはスウェーデン体操に没頭することとなったが、彼の経歴を一瞥するだけでも「方式論争」の一部を垣間見ることができるだろう。

アメリカ体育振興協会とボストン会議

1885 年 11 月 27 日、ブルックリンのアデルフィ・アカデミーに全米から 49 名の体育指導者たちが集結した。そこには、ルイス、ヒッチコック、リーランド、サージェント、ブレイキー、そしてロバーツ（後述）など YMCA 関係者も含まれていた。ここに「アメリカ最初の体育の職能集団」であるアメリカ体育振興協会[AAPE: Association for the Advancement of Physical Education]が設立され[109]、その発起人となったのがアンダーソン（William G. Anderson, 1860-1947）だった。

ミシガン州のセント・ジョゼフに生まれたアンダーソンは、ウィスコンシン大学で学び、1883 年にクリーブランド大学で医学博士を取得すると、1885 年の秋にはブルックリンのアデルフィ・アカデミーで身体訓練[Physical Training]の指導者となった。アンダーソンは若い頃から体操に卓越しており、バーナムのサーカスから声がかかったほどだった。そんな彼を協会設立に動かしたのは、体育館の指導者たちが各々「自分よがりの主張」をしていることへの危機感だった[110]。のちに彼自身が回顧しているように、ニューヨーク近郊の「あらゆる体育館」の指導者たちに「ど

---

106 Park, pp.110-113.
107 Edward M. Hartwell, *Physical Training in American Colleges and Universities, Circular of Information of the Bureau of Education. No.5, 1885* (Washington, D.C., U.S. Government Printing Office, 1885).
108 レナード、336 頁。
109 小田切「アメリカ体育振興協会期の体育専門職をめぐる議論」、2 頁。アメリカ体育振興協会は改編を繰り返しながら現在に至っている。1885- **AAPE** (Association for the Advancement of Physical Education)→1886- **AAAPE** (American Association for the Advancement of Physical Education)→1903- **APEA** (American Physical Education Association)→1937- **AAHPE** (American Association for Health and Physical Education)→1938- **AAHPER** (American Association for Health, Physical Education and Recreation)→1974- **AAHPER** (American Alliance for Health, Physical Education and Recreation)→1979- **AAHPERD** (American Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance)→2013- **SHAPE America** (Society of Health and Physical Educators).
110 小田切『アメリカスポーツの文化史』、246 頁。

んな体操体系を教えていますか？」と尋ねたところ、「自分自身の体系を教えています」と満足気に答え、「いわゆる『アメリカ人』としての同意や協調は見られなかった」[111]。そのため、アンダーソンは全米各地の指導者に手紙を送り、アデルフィ・アカデミーでの集会への参加を呼び掛けた。

1885年に開催された第一回大会では、アンダーソンに賛同した49名の指導者たちが集結した。この集会の場で、アメリカ体育振興協会が発足し、会長にヒッチコックが、副会長の一人にサージェントが、そして書記にアンダーソンが選出された。ヒッチコックやブレイキーが壇上を後にすると、リバービュー・アカデミーのブリストル（Charles L. Bristol）がイギリスで目の当たりにした学生のクリケット熱に触れ、「教育的にわれわれの先を行っている」と発言した。これに対して、サージェントは次のように反論した。「誰に教えるべきか。どこで教えるべきか。何を教えるべきか。大学はYMCAではない。地方の状況[local conditions]は修正されるべきだ」[112]。さらに、サージェントが「計測」の重要性を指摘し、「健康診断[medical examination]」の必要性を訴えると、ヒッチコックがこれに賛同し、サージェントとヒッチコック、アンダーソンからなる「統計および計測委員会[committee on Statistics and Measurements]」が結成された[113]。こうした動向は、49名のうち11名が医学博士を保有していた設立会員の問題関心に結び付けられるだろう[114]。

続く第二回大会では、アメリカ体育振興協会の目的が明示された。すなわち、「体育に関する知識を広めること、その方法論を改善すること、会員同士で緊密な関係を築くこと」だった[115]。この大会で、サージェントが「人体計測学に基づく計測」というテーマで基調講演を行ったが、それは「体育の科学的管理のために、データを蓄積し共有し、……共通な測定部位を確認することが必要であると強調する」ものだった[116]。また、第一回大会には不参加だったトゥルナーも招

---

[111] Anderson, p.4. ただし、「トゥルナーは例外」としている。また、アンダーソンのこの決断には、アマースト大学に体育館を寄贈したプラット（Charles M. Pratt）やアンダーソンのドイツ遠征を取り計らった外交官ホワイト（Andrew D. White）らの後押しがあった。

[112] *Proceedings of the Association for the Advancement of Physical Education at its Organization at Brooklyn, N. Y.* (November 27, 1885), p.5.

[113] ibid, p.7.

[114] 小田切「アメリカ体育振興協会に参集した体育家たち」、300頁。

[115] *Proceedings of the American Association for the Advancement of Physical Education at its Second Annual Meeting at Brooklyn, N. Y.* (November 26, 1886), p.2.

[116] 小田切「体育の専門科学としての人体計測学に関する論議」、229頁。サージェントによって提示された具体的な計測項目は以下の通り。体重、身長、膝高、座高、股高、臍高、頭囲、頚囲、胸囲、腰囲、骨盤囲、大腿囲、膝囲、下腿囲、足囲、上腕囲、肘囲、前腕囲、手首囲、頭幅、頚幅、肩幅、腰幅、骨盤幅、乳頭幅、胸深、腹深、上腕長、前腕長、足長、指極、水平長、肺容量、呼気力、背筋力、脚力、胸力、上腕三頭筋力、上腕二頭筋力、有毛、髪色、目色。*Proceedings of the American Association for the Advancement of Physical Education at its Second Annual Meeting at Brooklyn, N. Y.* (November 26, 1886), pp.6-10.

待され、ラスマン（C. G. Rathmann）によって北米トゥルナー協会の活動報告がなされた[117]。以降、アメリカ体育振興協会は会員を増やしながら、体育専門職の成立に大きな貢献を果たすことになった。

また、これらの大会とは別に、1889 年 11 月 29 日および 30 日にはマサチューセッツ工科大学のハンティントン・ホールでボストン会議が開催された。この会議は、約 2000 名の聴衆を集めた「体育史における画期的な出来事」とみなされる[118]。その開催は、ボストンの慈善家ヘメンウェイの後援によるもので、アメリカ教育局長ハリス（William T. Harris）が議長を務めた。会議の目的は、「教育者の前で異なる体操方式を議題としてかけ、その審議の時間を確保すること」だった[119]。壇上では、錚々たる指導者たちが代わるがわる演説をおこなった。ハートウェル、メツナー（H. Metzner、ニューヨーク・ドイツ体操クラブ）、エネブスケ（Claes J. Enebuske、ボストン体操師範学校）、ポッセ、ヒッチコック、サージェント……。そして、フランス政府の使者としてアメリカを訪れていたクーベルタン（Pierre de Coubertin, 1863-1937）もその列に加わった。

それぞれの演説の主旨は、ここまでにおおよそ人物を介して見てきたとおりなので省略する。ここでは、クーベルタンに目を向けておきたい。一連の演説を聞きながら、彼はうろたえていた。アメリカでは、フランスと異なり、体育の必要性という根本的な部分では合意が形成されていた。にもかかわらず、それをどのようにおこなうかという実践的な問題においては、方式間で対立が生じていた。クーベルタンがとくに懸念したのは、「体操派の主張に対抗してイギリスの競技スポーツの弁護に立ちあがる者は一人もいなかった」ことだった。唯一、イギリス式の競技スポーツに言及したサージェントさえも、大学側は競技スポーツに対して責任を負わないと主張し、その教育的価値には消極的な態度を示した[120]。

会議 2 日目も終盤に差し掛かったところで、いよいよクーベルタンが壇上に招かれた。そして、アメリカの「方式論争」が向かうべき新しい「方式」を提案した。

> 先日ある方が私に、アメリカの教育とは如何なるものだと思うか、とお訊ねになりました。私はこうお答えしました。それはいくつかの点で、英国の思想とドイツの思想とが戦闘を繰り広げる、いわば戦場のようなものではないでしょうか、と。肉体的な見地に立ちますれば、

[117] *Proceedings of the American Association for the Advancement of Physical Education at its Second Annual Meeting at Brooklyn, N. Y.* (November 26, 1886), pp.22-27. アンダーソンはかつてトゥルネンの活動に参加していたことから、第一回大会におけるトゥルナーの不在は「奇妙な脱落」とみなされる。Gerber, p.333.
[118] Gerber, p.309.
[119] Barrow, ed., i.
[120] マカルーン、245 頁。

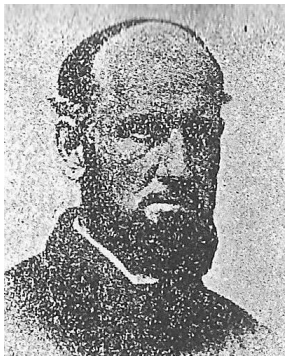
ドイツ方式に対し何ら批判の余地のないことは私も全面的に認めるにやぶさかではございません。しかしながらその反面、道徳的、社会的見地から見る限りにおきましては、およそ方式と名のつくものの中で、現代最高の教師ラグビー校のトマス・アーノルドが説くところの、英国競技スポーツ方式に勝るものは一つとてないことを私は確信するものであります。[121]

こうしたクーベルタンによる発言を、アメリカの体育界は理解できないわけではなかった。現にサージェントのように、大学における競技スポーツの発展を受け入れつつも、大学としてはそれに関与しないという姿勢を貫いている者もいた。とはいえ、「人気が上昇する一方の競技スポーツに対する反動が生じていた」のは確かだろう[122]。

どのような体操を教えるか、そしてそこには競技スポーツが含まれていなかったということ。これはまさに YMCA の問題でもあった。次章以降、YMCA が身体運動を受容していく過程に焦点を当てていく。

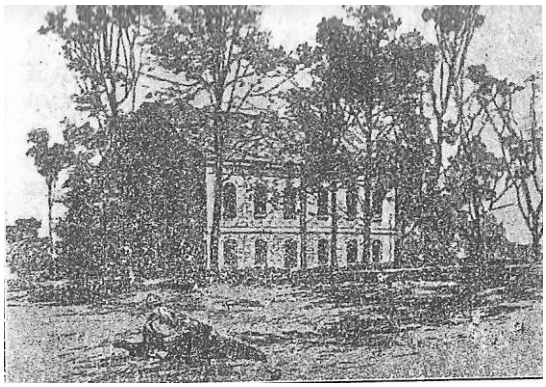
[121] マカルーン、247 頁; Barrow, ed., p.112.
[122] マカルーン、249 頁。こうしたアメリカ体育界の反応にもかかわらず、クーベルタンは 1890 年にまとめた『海の向こうの大学』で次のように報告した。「合衆国では現在、体操に対する反動が生じつつあり……。」マカルーン、259 頁。

Figure 5.　E・ヒッチコック



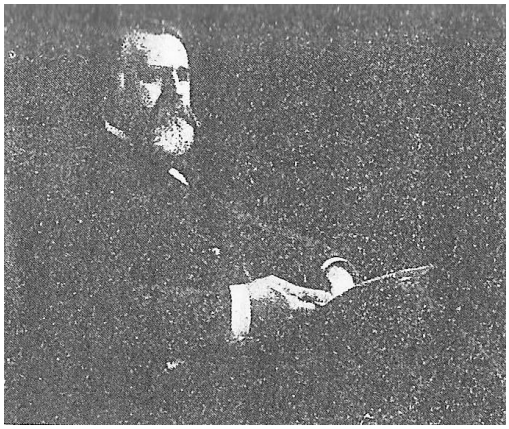
レナード、276 頁。

Figure 6.　アマースト大学バレット体育館



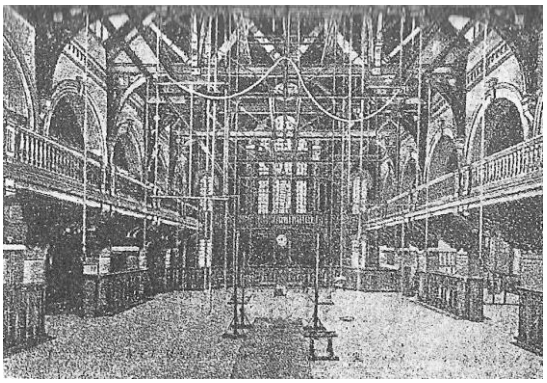
レナード、275 頁。

Figure 7.　D・A・サージェント



レナード、282 頁。

Figure 8.　ハーバード大学ヘメンウェイ体育館

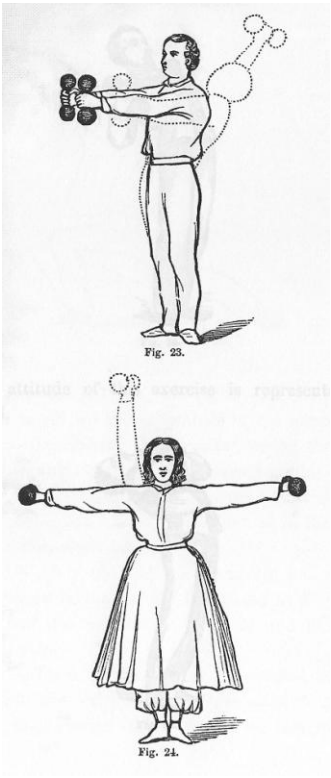


レナード、287 頁。

Figure 9.　ダイオ・ルイス

Todd, p.212.

Figure 10.　ルイスの「新体操」

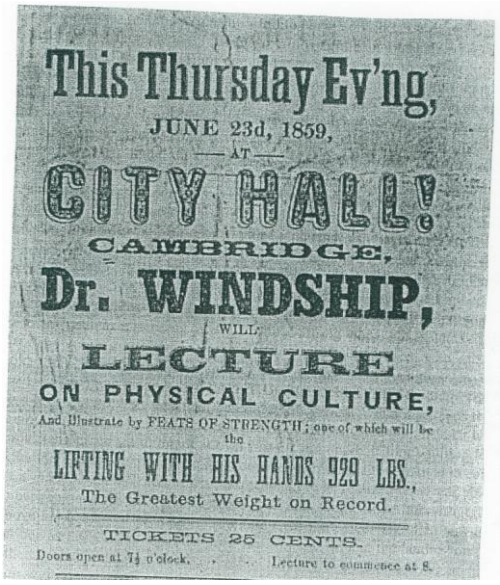


Lewis, p.101.

Figure 11.　G・B・ウィンドシップ

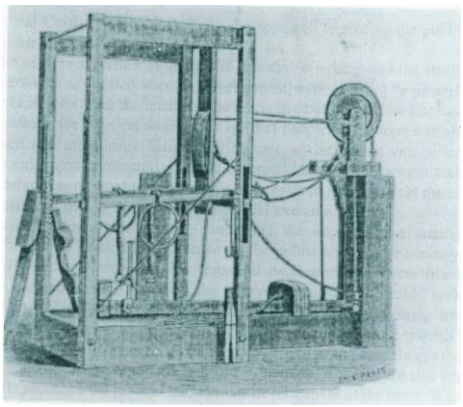
Todd, p.187.

Figure 12.　ウィンドシップの講演を知らせるチラシ



Paul, p,45,

Figure 13.　ウィンドシップのヘルス・リフト



Paul, p.53.

3. YMCA と体育館

この章では、YMCA が体育館を導入し、「身体事業」を展開する最初の過程を検討する。1869 年に初めて体育館が建設されて以降、YMCA は体育館を拠点に「身体事業」を推進することになった。しかし、この新事業は最初から軌道に乗ったわけではなかった。YMCA のプログラムとして展開されるためには、ある種の正当性を担保する必要があった。なぜ、YMCA が身体運動を推奨するのか。そのときに用いられた説明が、まさしく「健康」だった。

ところで、YMCA では、体育館における身体運動は“play”ではなく“work”とみなされていた。初期の指導者たちは、しばしば体育館での“physical work”に言及していたが、それは「遊び」というよりも「労働」に近いものだった。ベイカーによれば、現代における“workout”という一風かわった言い回しは、この「ヴィクトリア時代の組織的かつ計画的な運動」に由来するという[1]。そのため、本稿では“physical work”を「体育事業」と訳すのではなく、発足当時の YMCA が力を入れていた「信仰事業[religious work]」に合わせるかたちで「身体事業」と訳すことにする。

3-1. 体育館の導入とサーカスの時代

「身体事業」の萌芽

まず、YMCA における「身体事業」の萌芽を北米 YMCA 同盟の大会議事録のなかに求めてみたい。YMCA で初めて体育館が建設されたのは 1869 年だが、1856 年にモントリオールで開催された第 3 回大会では、早くも体育館に関する議論がなされていた。ワシントン YMCA のリーズ（William J. Rhees）が「体育館や浴室などによる会員の身体的発達と健康の推奨のために、YMCA がいかなる手段を提供し得るか」と発言。これに対して、ブルックリン YMCA のベル（George A. Bell）は「身体的健康は精神的かつ霊的活動とその発達に密接している」ため、それらの施設が「適切に運営される場合には有益である」と答えた[2]。

1860 年、ニューオーリンズにおける第 7 回大会では、チャールストン YMCA のチェーピン（Leonard Chapin）によって、次のような決議がなされた。

> とりわけ大都市の若者のために、合理的かつ無害な娯楽の役割の重要性と必要性を考慮し

[1] Baker, “Disputed Diamonds,” p.258.
[2] *Journal of Proceedings of the Third Annual Convention of Young Men's Christian Associations of the United States and British Provinces* (1856), pp.14-15, 67.

て、以下のように決議する。体育館の設立は望ましいし、役に立つものである。わが国の無数の若者の破滅を証明してきた、盛り場のような好ましからぬ誘惑に対する防衛手段として、この特質を採用することにした YMCA の独占的な管理下にある場合にかぎって。

そして、YMCA の部屋[room]をできるかぎり楽しく魅力的にすることが推奨された。そのために、その部屋に訪れた若者を導き、楽しませ、改善する傾向にあるような、科学的な器具を獲得することが奨励されるであろう。[3]

そこでは、体育館の設立が「望ましい」ものであるとして、「盛り場のような好ましからぬ誘惑に対する防衛手段」とみなされていた。そして、YMCA の活動をより「楽しく魅力的に」するために、体育館とそこで使用される運動器具の調達が推奨された。ただし、第 3 回大会でも懸念されたように、「適切に運営される場合には」、あるいは「独占的な管理下にある場合にかぎって」という留保がついていた。

1866 年にオールバニで開催された第 11 回大会では、ニューアーク YMCA のバーネット（H. M. Burnett）が、「道徳的かつ身体的改善のため」に若者が足を運ぶことのできる場であるとして、体育館の建設を主張した[4]。さらに同年には、ニューヨーク YMCA が「霊的かつ知的、社会的[social]、身体的[physical]状態を改善する」という新たな目的を掲げ、会員の「身体」をも事業の対象とすることを示唆した[5]。このニューヨーク YMCA の規則は、のちに「四面計画[four-fold program]」と呼ばれ、多くの YMCA に影響を及ぼすようになった。一方で、北米同盟の大会では、あくまで「社会的かつ知的、宗教的改善」がその目的であるとして、会員の「身体」に言及されることはなかった[6]。

しかし、1869 年に 3 つの YMCA で体育館が建設されると、YMCA はいよいよ「身体事業」に乗り出すことになった。これは、先述の会館建築ムーブメントに伴うものであった。YMCA がまだ独自の会館を持たず、教会や住居に間借りしながら活動していた頃、「身体事業」は地下室や応接間で営まれる「即興物」だった[7]。そうしたなかで、体育館の導入とは「身体事業」の場の獲得を意味していた。その後、「身体事業」は体育館の増加とともに全米の YMCA に広がっていった。とはいえ、この新事業は最初から軌道に乗ったわけではなかった。例えば、事実上 YMCA

[3] *Journal of Proceedings of the Seventh Annual Convention of the Confederation of Young Men's Christian Associations of North America* (1860), p.31.
[4] *Proceedings of the Eleventh Annual Convention of Young Men's Christian Associations of the United States and British Provinces* (1866), p.42.
[5] *Fifteenth Annual Report of the Young Men's Christian Association of the city of the New York* (1866), p.52.
[6] *Proceedings of the Eleventh Annual Convention*, p.20.
[7] Johnson, p.31.

初の体育館を持ったワシントン YMCA では、明らかに失敗が認められた。ニューヨーク YMCA に先立つこと 3 ヶ月、そこでは 1869 年 9 月に体育館を含めた会館が完成していた。しかし、翌年 8 月、新設の体育館は祈祷室に取って代わられることになった。1871 年 10 月には、倉庫で事業が再開されたものの、「身体文化[physical culture]への関心はその需要を創出するには十分ではなかったことは明らか」であり、1872 年 4 月に幕を引くこととなった[8]。

一方で、ニューヨーク YMCA の新館は、その後の「YMCA 会館建築のモデル」となった[9]。以下、ニューヨーク YMCA における体育館の導入について概観しておきたい。

ニューヨーク YMCA と「四面計画」

1869 年 12 月 2 日、ニューヨーク YMCA が 4 番街と 23 番通りの角地に新たな拠点となる会館を竣工した（**Figure 14**）。煌びやかな 5 階建ての新館を一目見ようと、何百ものニューヨーカーたちが開所式に集った。そのなかには、アメリカ副大統領に就任したばかりのコルファクス（Schuyler Colfax）やニューヨーク知事のホフマン（John T. Hoffman）も含まれていた[10]。ところで、この新館は YMCA のプログラムのみを目的に作られたわけではなかった。例えば、1 階にはテナントが入り、4、5 階の個室スタジオと 5 階のアートギャラリーは一般向けに貸し出しも行われていた。YMCA のプログラムが展開されたのは、主に 2 階（講堂、応接室、客間、読書室、遊戯室）と 3 階（教室、講演室、図書室）で、地下には体育館とボウリング場が備わっていた（**Figure 15**）。そして、塔屋[tower room]には主事のマックバーニー（Robert R. McBurney, 1837-1898）が住んでいた（**Figure 16**）。

スコットランド移民のマックバーニーは、企業家精神が盛んで、なおかつ信仰心にも篤かった。彼が YMCA と出会ったのは、1854 年、ニューヨークの地に降り立ったまさにその日であるともされるが、その運営に本格的に関与するようになったのは、週給 5 ドルの司書として雇われた 1862 年からだった[11]。マックバーニーは 1864 年から主事を務めるようになり、彼のもとでニューヨーク YMCA は若者に読書室を開放したり、無料講義を提供したりするなど、より広い社会奉仕をおこなうようになった[12]。しかし、こうした事業では多くの若者を引きつけることはでき

[8] Johnson, p.33; Thompson, p.308.
[9] Johnson, p.33. ニューヨーク YMCA に先立って、9 月にはワシントン YMCA で、11 月にはサンフランシスコ YMCA で体育館が誕生していたが、それらはニューヨーク YMCA の建設計画をもとに作られたものだった。Hopkins, p.150.
[10] Lupkin, “Manhood Factories,” p.40.
[11] Hopkins, p.49. 1862 年、『ニューヨーク YMCA 年報』にマックバーニーの名前が初めて掲載された。*Tenth Annual Report of the New-York Young Men's Christian Association* (1862), p.3.
[12] *Thirteenth Annual Report of the New-York Young Men's Christian Association* (1865), pp.3-4, 41. マックバーニ

ず、次なる「おとり商法[bait-and-switch]」として試みられたのが体育館の導入だった（**Figure 17**）[13]。

マックバーニーは、会館建築のための寄付金集めに奔走した。そして、まさにニューヨークYMCAが身体的改善をも含む「四面計画」を強調しようとしていた頃、ウッド（William E. Wood）と出会った。イギリス生まれのウッドは、すでにニューヨーク市内で商業体育館を経営しており、南北戦争前後には「彼の施設と彼自身を接収するようにマックバーニーに提案していた」[14]。また、この時期のウッドの活動は大学スポーツとの関係に見ることもできる。1864 年、彼は打倒ハーバード大学に燃えるエール大学漕艇部に「アメリカスポーツ史上初の運動部専属のコーチ」として雇われ、「当時の大学スポーツ界としては最も厳しい特訓や練習を行ったといわれている」[15]。一方で、1867 年に出版された『身体運動の手引き』のなかでは、当時流行していたウェイトリフティングや危険な曲芸を批判し、簡単で負荷の小さな体操を推奨していた。そして、1869 年にニューヨーク YMCA が新館を完成させると、マックバーニーはウッドを体育館長[gymnasium superintendent]として雇った[16]。

新館建築、すなわち体育館導入の翌年、『ニューヨーク YMCA 年報』は次のように報告した。

> その会館は都市に住む何千もの若者にとって、そして仕事を求めて都市へやってきた者――居心地悪い寄宿舎に押し込まれ、社会や教会との結びつきを失い、ひどく誘惑にさらされた者にとって、夕べのわが家[evening home]となるように企てられている。……YMCA の目的は、より高貴で真の男らしさ[manhood]の発達を手助けすることである。そして、若者の余暇時間[leisure time]を有益に占有することで彼らを誘惑の外へ連れ出すことである。さらに、若者の身体と知性、心[heart]を教育することである[17]。

ここでは、改めて YMCA の目的が明示されている。それは一言で、若者の救済だった。その目的を果たすために、ニューヨーク YMCA の新館は若者を都市の誘惑から連れ出し、有益な余暇を提供する居心地よいわが家としての役割を担った。そして、それはまた「より高貴で真の男らしさ」を発達させることでもあった。

ーは 1864 年に「記録主事[Recording Secretary]」を、1865 年から「通信主事[Corresponding Secretary]」を務めた。

[13] Lupkin, *Manhood Factories*, p.23.

[14] Hopkins, p.246. マックバーニーがいつ頃いかにしてウッドと出会ったのか、具体的な事実関係は不明。

[15] スミス、135-136 頁。

[16] William E. Wood, *Manual of Physical Exercises*, New York: Harper and Bros., 1867; Johnson, p.39.

[17] *Seventeenth Annual Report of the Young Men's Christian Association of the City of New York* (1870), pp.13, 15.

同じ年の『ニューヨーク YMCA 年報』には、体育館に関する以下のような記述もあった。

> 体育館とボウリング場――これらは若者にとって、予想以上に素晴らしい呼び物[attractions]となった。……そのクラス〔＝ウッドの体操クラス〕の参加者は多かったし、じっさいのところ収容しきれなかった。多くの会員がまた、クラスに関係なく、運動をしようと体育館に集まった。ルールを厳守するために、小委員会[sub-committee]を作ることが不可欠であると思われる。その仕事とは、体育館とボウリング場におけるルールを強化するように取り計らうだけでなく、こうした活動の有用性を推進するためにあらゆる行いをすることである。[18]

ここでいうルールとは、体育館の利用規則を指している。当時、体育館を利用するには、年間 5 ドルの「クラスチケット」が必要だった。この「クラスチケット」を持っていれば、ウッドによる毎夕の体操クラスだけでなく、ドイツ語、フランス語、簿記、筆記、グリークラブ、初級声楽など、他のクラスへも参加することができた[19]。ここでは、その体操クラスへの参加者が多く、しかも「クラスチケット」を持たない一般会員までもが体育館へ詰めかけていた様子が伝えられている。そして、その混乱を緩和するために、厳格なルールの必要性が主張されていた。

さらに、1871 年の『ニューヨーク YMCA 年報』では、体育館の運営の難しさと「身体事業」の必要性が改めて強調された。

> 体育館とボウリング場、浴室は、今までどおりウィリアム・ウッド氏の管理のもとにある。……これらは、あらゆる部門のなかで運営するのが最も難しく、YMCA の目的をかなえるように追求された他のいかなる手段よりも、今なおより思慮深い研究が必要とされている。それらが YMCA のなかで適当な割当を得るべきだということには、疑問の余地がない。若者が向上するための高潔な計画において、身体文化[physical culture]が不可欠だということは、誰も否定しないのである。[20]

このように、「より思慮深い研究」が必要とされた「身体事業」は、体育館導入の賛否をめぐって論争を引き起こすことになる。ウッドは 1889 年に辞任するまでの 20 年間、ニューヨーク YMCA の体育館の運営に従事したが、「身体事業」への影響力という意味では、ボストン YMCA

[18] *Seventeenth Annual Report of the Young Men's Christian Association of the City of New York* (1870), pp.25-26.
[19] *Eighteenth Annual Report of the Young Men's Christian Association of the City of New York* (1871), p.12.
[20] *Eighteenth Annual Report of the Young Men's Christian Association of the City of New York* (1871), p.25.

の活動を見逃すことはできない。以下、ボストン YMCA の体育館に焦点を当てることにする。

ボストン YMCA と「サーカスの時代」

ニューヨーク YMCA が新館を建築したのに対して、ボストン YMCA は既存の建物を買収することで会館建築ムーブメントを後押しした（**Figure 18**）。その建物の最上階である 4 階には、もともと商業体育館が入っていた。このトレモント体育館は、1859 年からドルト（John C. Doldt）によって運営されていたが、1872 年にはすべての器具とともに YMCA に買収されることになった[21]。会館の買収について、1901 年に出版された『ボストン YMCA 史』のなかには、次のような記録が残されている（出典不明）。

> 1872 年 9 月 1 日、われわれは我が家のように慕ってきた部屋を明け渡さねばならないことを通告された。新しい住居を見つけるのに 6 週間あったが、……いくつかの場所を回ったあと、委員会の一人が体育館[gymnasium building]として知られるところへの訪問を提案してくれた。そこは、トレモント通りとエリオット通りの交差点に位置しており、ベーコン（Charles H. Bacon）によって所有されていた。……まもなく、われわれは建物の所有を引き継ぐことになったが、……その立地はわれわれの予想以上のものであり、新しい活力があらゆる部門の活動につぎ込まれることになった。[22]

このように、ボストン YMCA が移転する際に候補として挙がったのが、「当時最大級の体育館」を持つ、「若者がよく行き交う理想的な区画に位置した」建物だった[23]。

「新しい住居」を建物ごと買収したものの、当時のボストン YMCA には、体育館を運営する機能が備わっていなかった。そこで、会館全体の管理を担っていた委員会[committee on library and rooms]がその任を受けることになったが、「適切な運営」には至らなかったようである。委員会は、1873 年の『ボストン YMCA 年報』のなかで次のように報告した。

> その体育館は YMCA にとって役立つ補助装置になったし、収入源にもなった。……悩みの種となったのは、その適切な運営である。……われわれは誰も体育館の経営[Gymnasium business]に携わったことがないと言いたいものだ。……当初、われわれは門番と部屋の整理

[21] Lovett, pp.107-108.
[22] Doggett, *History of the Boston Young Men's Christian Association*, p.48.
[23] Johnson, p.34.

整頓のためにのみ、人を雇っていた。しかし、最終的に体操指導者[instructor in Gymnastics]の勤めを引き受けた方が賢明であると考え、幸運にもまさに求めていた人物、ドゥ・クロウ（Du Crow）氏を見つけることができた。[24]

このように、委員会が「適切な運営」のために体操指導者を求めた結果、曲芸師のクロウを雇うことになった。この判断こそが、のちの論争の引き金となったのだが。

ところで、当時、YMCA の一般会費が年間 1 ドルだったことを考えると、年間 10 ドルという体育館利用費は決して安いものとはいえなかった[25]。しかし、ボストン YMCA による運営以前には、トレモント体育館の利用費は年間 20 ドルだったのに対して、買収後は半額で提供されるようになったことがわかる[26]。19 世紀半ばにおいて、中産階級と呼ばれる人びとの年収が 1000 ドルだったことを踏まえると、その 100 分の 1 を体育館利用費に割いていたことになる。参考までに、これを現代日本の平均年収（男性 514 万円）と照らし合わせると、月に 4283 円の出費となる[27]。いずれにせよ、YMCA によって、体育館が利用しやすくなったのは確かだろう。

こうして、YMCA のもとでトレモント体育館が運営されるようになったわけだが、1874 年になると、クロウに代わってオルコット（Nelson Alcott）が指導者に任命された。彼もまた綱渡りを得意とする曲芸師で、「肌色のタイツとスパンコール」を身にまとっていた[28]。さらに、この頃、トレモント体育館に設置されていた用具にも注目しておきたい。以下、1873 年の『ボストン YMCA 年報』に掲載された用具一覧である。

鉄棒、平行棒、垂直棒、ローイング・ウェイト、プリング・ウェイト、跳躍板、鞍馬、雲梯、ローマ式はしご、吊り輪、ダンベル、インディアン・クラブ、弾丸、デット・リフト器具、手動巻上機[hand windlass]、登山用のペグとロープ、跳躍器具、綱渡り用のロープ、空中ブランコ、肺活量計、計測計量器、球竿、木環、ストライキング・バック。[29]

そこには、まさにオルコットが専門とする綱渡り用のロープや、曲芸師が用いるような空中ブランコが設置されていた。さらに、トゥルネンやウィンドシップ式の重体操の影響も見て取ること

[24] *Twenty-Second Annual Record of the Young Men's Christian Association of Boston* (1873), pp.26-27.
[25] Doggett, *History of the Boston Young Men's Christian Association*, p.49.
[26] *Twenty-Third Annual Record of the Young Men's Christian Association of Boston* (1873), p.40.
[27] 国税庁長官官房企画課「平成 26 年分民間給与実態統計調査」（平成 27 年 9 月）www.nta.go.jp/kohyo/tokei/kokuzeicho/minkan2014/pdf/001.pdf、2015 年 12 月 31 日閲覧。
[28] Doggett, *History of the Boston Young Men's Christian Association*, p.50.
[29] *Twenty-Second Annual Record of the Young Men's Christian Association of Boston* (1873), p.26.

ができるだろう（**Figure 19**）。このように、1870 年代になっても、依然として体育館は 1860 年代および 1870 年代の私的かつ商業的な様相を呈していたのである。これが、1870 年代を「サーカスの時代」とみなす所以である[30]。

ここで、ボストン YMCA による買収以前のトレモント体育館について触れておきたい。のちに下院議員となったマケットリック（Michael J. McEttrick, 1848-1921）は、当時の様子をこう述懐した。

> 1868 年当時、エリオット通りのかつての体育館は、フィジカル・トレーニング・センターだった。そこは、健康や体力の増進を図ろうとするプロ選手[athletic professional]やセミプロなどのあらゆる人びとのための集会所であり、高度な健康と身体の調和を獲得するという共通の仲間意識のもと、商人や事務員が医師や弁護士、機械工などと気軽に混じり合う場所でもあった。……春季の開幕に向けて、サーカスの曲芸師や著名なボクサー、すぐれた漕ぎ手が、冬のあいだ練習を重ねた。練習詐称[training quackery]と粗雑で無能な身体指導[physical instruction]の時代だった。[31]

トレモント体育館は、もともとさまざまな階級の人びとが共に運動に励む「集会所」としての役割を果たしていた（**Figure 20**）。そして、かつてのハーバード大学のように、競技スポーツの練習の場として機能していたようである。例えば、1871 年 3 月に設立された全米プロ野球選手協会（ナショナル・アソシエーション、NAPBBP: National Association of Professional Base Ball Players）の初めてのシーズン前に、ハリー・ライト（William Henry “Harry” Wright, 1835-1895）率いるボストン・レッド・ストッキングズがそこで「せっせと練習した」という記録が残されている[32]。そこには、ハリー・ライトに引き抜かれてレッド・ストッキングズに加入したばかりのスポルディング（Albert G. Spalding, 1850-1915）が含まれていたとしても不思議ではない[33]。彼らがどのくらいの頻度で、いかにして体育館を利用していたかは明らかではないが、少なくともマケットリックによれば「練習詐称と粗雑で無能な身体指導の時代」だった。そこでは、YMCA が求めていたような「適切な運営」というものはまったく想定されておらず、そうした慣習が買収後も尾

[30] Johnson, p.36
[31] Brink, p.10.
[32] *Spirit of the Times* (March 18, 1871), p.70, quoted in Goldstein, p.140.
[33] スポルディングは選手としてのみならず、スポーツ用品を扱うビジネスマンとして名を馳せた。ちなみに、彼の年棒はレッド・ストッキングズ加入時に 1500 ドルで、1874 年には 2000 ドルに達した。レヴィーン、37, 42 頁。

を引いていたといえるだろう。

こうした状況は、YMCA のなかに、ある種の亀裂を生じさせた。1904 年に『YMCA における身体事業の歴史』をまとめたトンプソンは、この時代の対立を次のように考察している。

> この時代のアメリカにおける身体事業の状況は、決して見込みのあるものとはいえなかった。いくつかの体育館があったが、そのほとんどが主としてプロ選手やアスリート、プライズ・ファイターに後援されていた。したがって、体育館とボウリング場は、キリスト教徒からかなり否定的に見られていた。一方は、もし身体事業が良い影響のもとにあり、YMCA が実行するのに理にかなった活動のもとで行われるなら、それは若者にとって有益で魅力的なものであると感じていた。他方は、体操やボウリングは、酒場や他の悪影響と密接に関わりすぎているため、YMCA はそれらと関与すべきではないと信じていた。[34]

この対立は、次のように換言することもできるだろう。すなわち、「YMCA が体育館をキリスト教化するのか」、それとも「体育館が YMCA を世俗化する」のか[35]。とりわけ、「急速かつでたらめな成長を遂げた身体事業」においては、信仰に篤く、なおかつ運動能力に長けた「有能なリーダーシップの必要性」に駆られていた[36]。この状況を打破したのが、ボストン YMCA のロバーツ（Robert J. Roberts, 1849-1920）だった。

3-2. ロバーツと健康の殿堂

ロバーツとトレモント体育館

ロバーツがボストン YMCA の体育館長[gymnasium superintendent]に就任したのは、1875 年のことであった。彼こそが「YMCA 初のキリスト教徒の体育主事[physical director]」とみなされる[37]（**Figure 21**）。じっさいのところ、ロバーツとトレモント体育館との出会いは 1864 年までさかのぼる。つまり、彼は YMCA が買収する以前から、その体育館で汗を流していたことになる。体育館長としての仕事を得たのは、ボストン YMCA の日曜学校長ストレイ（Joseph H. Storey）の計らいによるものだった。敬虔なバプテストであったロバーツは、すでに数年間、ストレイの

[34] Thompson, p.304.
[35] Baker, *Playing with God*, p.54.
[36] Johnson, p.48.
[37] Johnson, p.39. ただし、ロバーツ就任当時には、“physical director”ではなく“gymnasium superintendent”という言葉が用いられていたことに注意されたい。

もとで無給の聖書インストラクターとして精を尽くしていた。のちにボストン YMCA の総主事[general secretary]となったデミング（M. R. Deming）が「幸運にもロバーツを体育館長として確保できるまで、身体文化[physical culture]部門はおぼつかない実験だった」と述べたように、ロバーツの就任は「実験」としての身体事業、すなわち「サーカスの時代」からの脱却を意味していた[38]。

しかし、そのロバーツですら、最初のうちはドイツ式の重体操を会員に手ほどきしていたとされる[39]。後年の回顧によれば、彼はトレモント体育館だけでなく、ルイスやウィンドシップの体育館にも足を運んでいた[40]。ほかにも、ヘルス・リフトで人気を博したバーンズや黒人ボクサーのスチュアートの体育館に通っていたようである[41]。買収以前の、そして買収以後もトレモント体育館がいまだ「体育館競合」に巻き込まれていたように、ロバーツ自身もその渦中にいたことがよくわかる。重体操が「サーカスの時代」を形成していたとするなら、新体育館長のロバーツは、この時点では明らかにそこから脱していなかった。

では、いったい何が彼を「改心」させたのだろうか。ドゲットによれば、それはとある「事故」に求められるという。すなわち、ロバーツは 1877 年に空中ブランコから転落して負傷し、その静養中に、運動とは「安全で、短時間でできる、簡単で、有益な、楽しい」ものであるべきだとする「身体事業の原則」を考案したというのである[42]。しかし今のところ、この「事故説」には裏付けが存在しないため、それを理由にロバーツの「改心」を説明することは難しいだろう。むしろ、1877 年といえば、その前年のウィンドシップの急死を受け、同種の体育館が閉鎖を迫られるなど、「筋力探究」の時代が終焉を迎える年でもあった。これによって、ロバーツも重体操から離脱せざるを得なくなり、軽体操への「改心」を余儀なくされたという方が、いくらか説得的ではないだろうか。

いましばらく、ロバーツの経歴に目を向けてみたい。1849 年 6 月 29 日にボストンで生まれたロバーツは 14 歳までフィリップス・グラマースクールに通い、その後、ウェスタンユニオン社の配達人としての仕事を得て、しだいに出世して事務員となった。しかし、結局のところ木材旋盤を学び直して、機械工としての道に進むことになった[43]。彼が最初に体操と出会ったのは、ド

[38] Doggett, *History of the Boston Young Men's Christian Association*, pp.50-51. デミングは 1873 年から 1888 年までボストン YMCA の総主事を務めた。
[39] Paul, p.55.
[40] Roberts, pp.10-11.
[41] Brink, pp.9-10.
[42] Doggett, *History of the Boston Young Men's Christian Association*, p.52.
[43] Roberts, pp.14-15. 1851 年に電報電信会社として設立されたウェスタンユニオン社は、1871 年から送金業務を開始し、1896 年から海外展開に着手した。1980 年に送金業務の利益が初めて電報業務を上回り、2001

ルトの運営するトレモント体育館だった。のちに彼は次のように振り返っている。

> 私はキリスト教徒としての生活を送るように努めたが、カード遊びや喫煙、暴言、猥談が、通りをぶらつく若者のあいだで当たり前のように行われているかぎり、そうするのは難しいことに気がついた。それで知ってのとおり、そんな連中とは手を切り、昔のエリオット通りの体育館に加わることにした。[44]

ロバーツにとって、体育館における体操は「通りをぶらつく若者」への対抗文化だった。一方で、ロバーツの指導歴は 1868 年に始まる。その年から 3 年間、ウィンドシップの体育館の向かいにあった YMCU（Young Men's Christian Union）の体育館で指導をした。そして、1875 年 8 月、ロバーツはついにボストン YMCA の体育館での指導を任されることになった[45]。

ところで、買収以前のトレモント体育館が「集会所」としての役割を果たしていたのは先述のとおりである。マケットリックはまた、そこでロバーツとも交流を持っていた。

> 若き日のロバーツは、そこで会員とみなされた多くの若者のうちの一人だった。黒い瞳をして、愛想のよい、ほほを赤らめた少年が、断乎とした不屈の精神によって私の目を引いた。彼はギシギシと音を立てる昔ながらのプーリー・ウェイトを使って、その小さな身体を動かしていた。少年らしく、鳩胸の小さな体型を、みごとに形づくられたすばらしい体格へ矯正して仕上げるために、日々の長時間にわたる練習によって決然たる努力を重ねていた。[46]

この回想には、若き日のロバーツが運動に励む姿が映し出されている。さらに、マケットリックが出会っていたのはロバーツだけではない。彼はそこで、のちにリンカーン大統領の暗殺者として知られることになる俳優ブース（John W. Booth, 1838-1865）とも知り合っていた。トレモント体育館が 1859 年から運営されていることを考えると、この記述が示す時期は 1860 年代前半であると思われる。リンカーン大統領が暗殺されたのは、1865 年。一世を風靡した舞台俳優が身体づくりのために体育館に通っていたとしても不思議ではないだろう。この点について、これ以上深く掘り下げることはできないが、たいへん興味ぶかいエピソードである。

年には世界の取扱店舗が 10 万店を超えた。会社情報 http://www.westernunion.co.jp/jp/about_us.php、2015 年 11 月 18 日閲覧。

[44] Roberts, pp.12-13.
[45] Roberts, p.15.
[46] Brink, pp.10-11.

さて、新体育館長としてのロバーツに話に戻すと、彼の給料は年収 750 ドルで、そのうち 150 ドルを体育館の清掃費に充てていた[47]。施設や器具の改良にも努め、1878 年の『ボストン YMCA 年報』には、体育館における「呼び物」の追加が報告された。

> 一流の体育館でたいてい見られる器具に加えて、次のような「呼び物[attraction]」が加えられた。調節式プーリー・ウェイト、ジャイアント・プーリー・ウェイト、高い雲梯（長さ約 12 メートル）、高い鉄棒、ゴム製の陸上トラック（1 周約 55 メートル）、マン[Mann]の抵抗ヘルス・リフト、水圧[hydraulic]式ローイング・マシーン 4 台（ハーバード大学の漕艇部員やフォークナーとリーガンのクルー[Faulkner-Regan crew]の練習に使われているのと同じもの）。ウィンドシップ発案のデット・ウェイト・ヨーク・リフト（原価 500 ドル）、ウィンドシップの圧力バネ[atmospheric and spring]式リフティング・マシーン、ロング[Long]教授の名高い運動ペダル。バスタブとスポンジ。各会員が自由に使える大きな衣服箱。体育館と同じ階にある浴室と更衣室。[48]

まず注目したいのが、1878 年になってもウィンドシップの器具が用いられていることである。ロバーツが 1877 年に「改心」したとするなら、なぜその翌年にこうした「筋力探究者」の器具が導入されたのだろうか。さらに、浴室や更衣室を完備するとともに、陸上競技や自転車の流行に乗じようとしている様子も垣間見られる。

いずれにせよ、ロバーツの「改心」を具体的な事例に特定することはできないが、遅くとも 1881 年までには彼の哲学は形成されていた。1880 年にボストン YMCA の幹部になると、1881 年にクリーブランドで開催された北米同盟の第 24 回大会で「ダンベル・ドリル」を実演した。それはロバーツ独自の体操体系で、「安全で、短時間でできる、簡単で、有益な、楽しい」運動を推奨し、「曲技的な体操[fancy gymnastics]」や「負荷の大きな運動[straining exercise]」を批判するものだった[49]。彼はまた、同じ大会の場で、身体をバランスよく鍛えることで「全体的な健康[general health]」を目指し、食事や換気、入浴などを含む「健康の法」に従順であることを説いた[50]。そして、1883 年にボストン YMCA が移転した際には、フェルト製のマットや「リング・

---

[47] Roberts, p.15.
[48] *Twenty-Sixth Annual Record of the Young Men's Christian Association of Boston* (1878), p.52. 「フォークナーとリーガンのクルー」と「ロング教授」について、本稿では特定することができなかった。
[49] Robert J. Roberts, "Association Gymnasiums," *The Watchman* 11-4 (February 15, 1885), p.45.
[50] *Proceedings of the Twenty-Forth International Convention of the Young Men's Christian Association* (1881), pp.85-86.

シャワーバス」、メディシン・ボールを導入した[51]。また、1885 年には、アンダーソンの尽力で生まれたアメリカ体育振興協会の発足メンバーの一人にもなった。アンダーソンは 1877 年から 2 年間、ロバーツのもとで指導を受けており、ロバーツがアンダーソンに少なからず影響を与えたことは明らかだろう[52]。

こうしたロバーツの精力的な活動のひとつに、「体操公演[gymnasium exhibition]」と呼ばれるものがあった。それは、彼自身の体操方式を「実践として観衆に示す」ためにおこなわれた[53]。1877 年には 55 名が演技し、すべての会員とその「女友達[lady friends]」は無料で入場することができた。のちに、「公演に魅了された」若者が体育館に参加するようになったというから、ロバーツの戦略はある程度成功を収めたといえるだろう。各紙面では、「身体文化の代表者」による「最も満足のいく見世物」と紹介されていたようである[54]。ロバーツは「屋台骨[bread and butter]の体操」を用いることで、「あらゆる年代の人びとを床板[floor]の上に集め」ようとしていた[55]。

健康の殿堂

ロバーツの最大の功績は、YMCA における「体育館のキリスト教化」にある[56]。それは、彼が「身体事業」の中心を重体操から軽体操へ移行させ、体育館を「健康の殿堂[Halls of Health]」と呼ぶことで身体運動を正当化したことに求められる。YMCA の通史をまとめたホプキンスも、「身体事業」に焦点を当てたジョンソンも、ロバーツが体育館を「健康の殿堂」と呼んだ根拠として、1883 年 11 月 15 日付の『ウォッチマン[Watchman]』を挙げている[57]。『ウォッチマン』とは、シカゴ YMCA によって隔週で発行され、YMCA における「国内公式機関紙」とみなされた雑誌である[58]。しかし、じっさいのところ、その記事はニューアーク YMCA の新体育館について取り上げたものであり、「健康の殿堂」や「ボディ・ビルディング」という言葉は使われているものの、直接ロバーツに言及がなされたわけではなかった[59]。

管見のかぎり、『ウォッチマン』で初めて「健康の殿堂」という言葉が用いられたのは、ホプキンスとジョンソンの指摘より少し前の、1883 年 10 月 1 日付の記事である。これは、ロバーツ

---

[51] ジョンソンは、このときに「YMCA 初の室内陸上トラック」が導入されたとしているが、すでに 1878 年には「ゴム製の陸上トラック」が存在していた。「バルコニー型の陸上トラック」という意味での「初」なのだろうか。Johnson, p.41.
[52] Johnson, p.41.
[53] *Thirty-First Annual Record of the Young Men's Christian Association of Boston* (1883), p.22.
[54] *Twenty-Sixth Annual Record of the Young Men's Christian Association of Boston* (1878), pp.13-15.
[55] Robert J. Roberts, "Association Gymnasiums," *The Watchman* 11-4 (February 15, 1885), p.45.
[56] Hopkins, p.249.
[57] Hopkins, pp.249-251; Johnson, pp.39-42.
[58] Hopkins, p.137.
[59] "Physical Culture," *The Watchman* 9-22 (November 15, 1883), p.258.

を「ボストン YMCA の体育館長」であると同時に「活発なキリスト教徒の若者」と紹介しながら、最新の『ボストン YMCA 年報』(1883 年) から体育館に関する報告を丸ごと引用したものだった。

> (熱心な体育館長である R・J・ロバーツ氏は、彼の部門について次のように話している。)……「わずかな予防[ounce of prevention]」が「よろずの治療[the pound of cure]」よりも安く済むことが理解され、多くの人びとが運動を愛し、それを定期的におこなうようになった。若者にとって、「健康の殿堂」はとびきり居心地よい場所[a place of great good]となった。人生と権力のことばかり考えている彼らには、日々の労働が使いそこなった身体の各部にあそび[play]を入れることのみを目的に体育館を利用する必要がある。……われわれの体操の目的とは、身体文化[physical culture]部門に参加することによって、人生という戦いにおいて男性をより良い労働に適応[fit]させることである。日々の労働が何であろうと、正しい「ボディ・ビルディング」運動をすることによって、誰もがたくましく健康になることができるのだ。[60]

ここでは、「健康の殿堂」という言葉がロバーツ本人の語りとして用いられていることがわかる。そして、彼は「人生と権力」の獲得のためには体育館において「身体の各部にあそびを入れる」ことが必要であり、そうすることで「人生という戦い」において成功できることを確信していた。「健康の殿堂」におけるロバーツ式の「ボディ・ビルディング」運動は、若者にとっての「とびきり居心地よい場所」を提供するとともに、若者の将来における成功を約束するものであった。ロバーツにとって、「ボディ・ビルディング」とは身体的にも社会的にも有益なものであり、それを「正しく」おこなうことが何よりも重要だったのである。

ところで、「健康の殿堂」という言葉自体は、すでに 1882 年の『ボストン YMCA 年報』のなかに見ることができる。これこそが、「健康の殿堂」の初出であるといえる。

> 最善の身体的健康を維持することのみを目的に体育館を利用する人の数が増えている。一方

[60] "Gymnasium," *The Watchman* 9-19 (October 1, 1883), p.220; *Thirty-First Annual Record of the Young Men's Christian Association of Boston* (1883), pp.22-23. 傍点は筆者による。引用冒頭の括弧内は『ボストン YMCA 年報』のみに記載。また、引用 3 行目の"a place of great good"を「とびきり居心地よい場所」と訳したのは、オルデンバーグの著作に影響を受けたからである。レイ・オルデンバーグ著、忠平美幸訳『サードプレイス:コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』、みすず書房、2013 年 (原著は 1991 年の *The Great Good Place*)。

で、力強くて大胆な離れ業で他にまさろうという狭い目的で利用するのは、きわめて少数派となってきた。意図的な目的で「健康の殿堂[Hall of Health]」を利用する人びとの誰もが、ひと月にわたる忠実な運動のあと、より短時間でより良い労働ができるようになり、より多くの人生の感触と耐久力を得たと話している。……体育館に参加して練習することは大まじめに推奨されている。なぜなら、それは若さを延長し、神経系を強化し、筋肉の成熟とたくましさを保つからである。したがって、体育館は身体的存在の喜びを増大させ、より良い知的かつ霊的活動を可能にするのである。[61]

ここでの「健康」の獲得とは、かつての「力とは健康なり」というある種の信条が示すところの「健康」とは一線を画していることがわかる。ここでは、明らかに「力強くて大胆な離れ業」が否定され、「身体的存在の喜び」や「より良い知的かつ霊的活動」のための運動が推奨された。さらに、運動による身体的健康の獲得が人生をより豊かにする可能性についても触れられている。とはいえ、これはあくまで「体育館の活動」というかたちで報告されたものであり、必ずしもロバーツが書いたものとはいえない。しかし、当時のロバーツがボストン YMCA の幹部となっていたことを考えると、この報告書は彼自身の哲学が反映されたものとみなしうる。

一方で、この頃のロバーツの思想が最もよく反映されたのが、1885 年 2 月 15 日付の『ウォッチマン』である。ここにおいて、ロバーツは初めて自身の論考を YMCA の「国内公認機関紙」に寄せることになった。それは「YMCA の体育館」と題された 3 段にわたる囲み記事で、体育館における「信仰復興」を推奨するものだった。

体育館は、目的のための手段としてのみ利用されるべきである。すなわち、より良い人により良い労働をさせるために。……われわれは YMCA として基本的なボディ・ビルディング運動だけを推し進め、初歩的な体育[physical education]を教え、食事や入浴習慣などに関する実践的な話をすべきである。……YMCA は若者を祝福しようと救済の手を差し伸べ、彼らが身体の健康とたくましさを維持できるような手段を提供している。あらゆる部門は互いに手を取り合い、体育館を目当てに YMCA に参加した若者をその霊的集団に引き込んできた。そして、精神や霊魂にのみ注意を払ってきた人が、祈祷や研究なくして霊的かつ知的成長を維持できないこと以上に、健康の殿堂を利用することなくして完全な健康をもはや維持できないことに気がつくようになった。そこで、私はこの記事を読んだ諸君に、体育館で信

[61] *Thirty Annual Record of the Young Men's Christian Association of Boston* (1882), pp.24-25.

仰復興[revival]を始めることを勧めたい。……商売や勉学などと同じくらい、体操に霊魂を注ぎなさい。……これが体操の道[the way to gymnasticate]である。あなたはきっと、身体的に救われるだろう。[62]

ここで重要なのは、ロバーツが体育館における身体運動を「目的」ではなく「手段」とみなしていることである。それはあくまで「目的のための手段」でなければならなかった。

さらに、1887 年 4 月 1 日には、次のような記事を『ウォッチマン』に投稿していた。

「健康の殿堂」は大衆の身体的救済のためにあり、格別に強くて、活発で、たくましい身体つきをした、恵まれた少数の人びとのためにあるわけではない。だから、われわれはサーカスの曲芸師や競技アスリートを育てようとするのではなく、たんに体育館を目的のための手段として利用している。すなわち、それは人生の労働をするために、会員をより良い状態におくことである。[63]

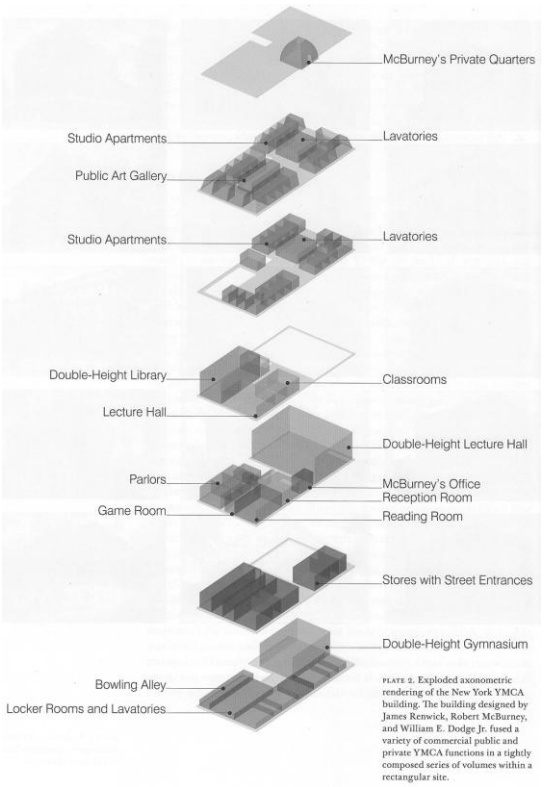
ロバーツはここで、「サーカスの曲芸師や競技アスリートを育て」ることが YMCA の「目的」ではないことを明言している。その「目的」とは、体育館における「信仰復興」を通じて、若者を救済することだった。祈るだけではなく遊ぶことで――ただし、「真面目」に遊ぶことで、彼らは初めて身体的に、そして霊的に救われることができた。そのためには、体操に霊魂を注がねばならない。ロバーツにとって、体操とは商売や勉学と同じくらい人生にとって不可欠なものであり、「健康の殿堂」とは、体操というある種の「信仰」を実践するための場所であった。体育館における神のための「労働」によって、若者は「純潔」に導かれようとしていた。

[62] Robert J. Roberts, "Association Gymnasium," *The Watchman* 11-4 (February 15, 1885), pp.45-46.
[63] R. J. Roberts, "Can an Association Gymnasium be Successfully Conducted without an Instructor ?," *The Watchman* 13-7 (April 1, 1887), p.95.

Figure 14.　ニューヨーク YMCA

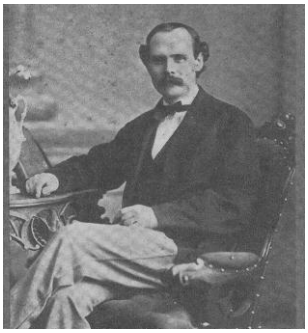
Lupkin, *Manhood Factories*, p.34.

Figure 15.　ニューヨーク YMCA のフロア図



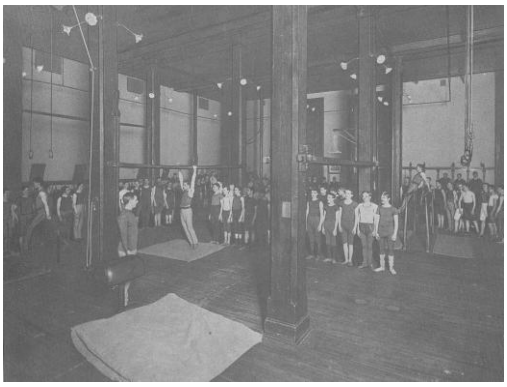
Lupkin, *Manhood Factories*, PLATE 2.

Figure 16.　R・R・マックバーニー



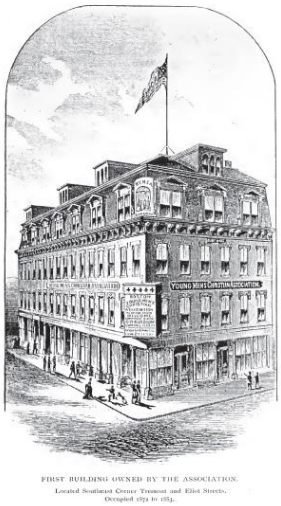
Hopkins, p.108.

Figure 17.　ニューヨーク YMCA の体育館



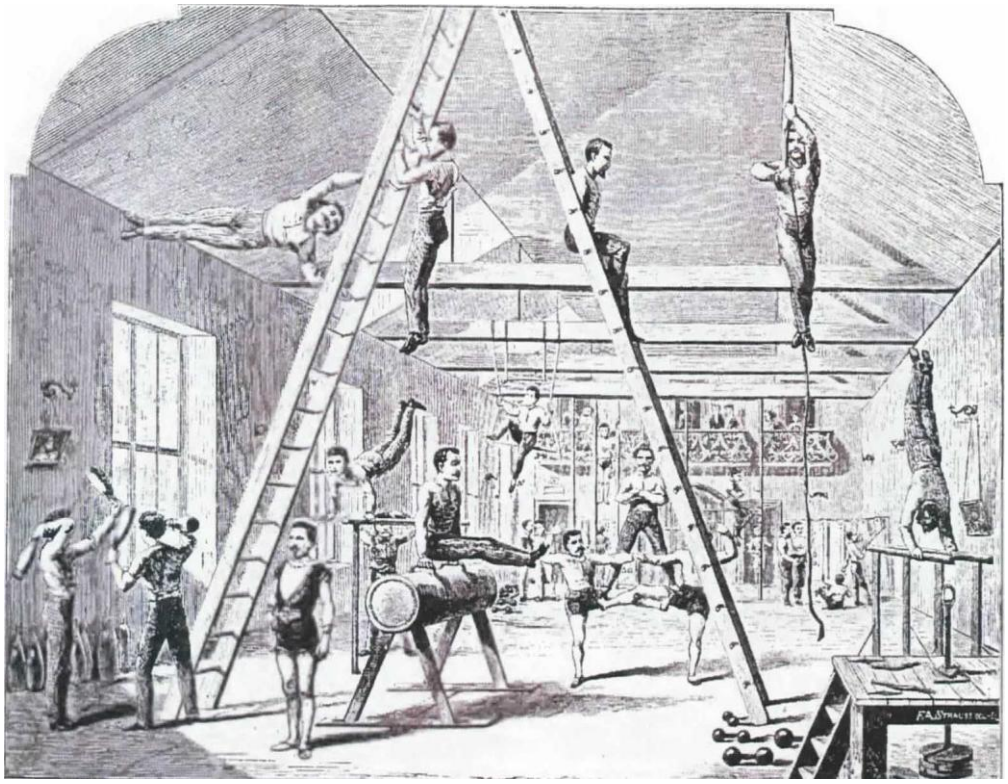
Lupkin, *Manhood Factories*, p.60.

Figure 18.　ボストン YMCA



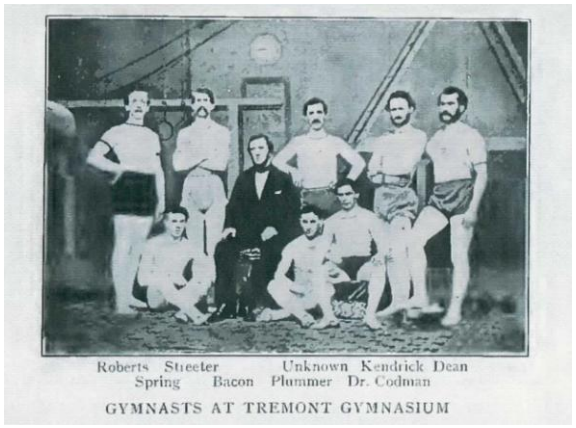
Doggett, *History of the Boston YMCA*, p.46.

Figure 19. 「サーカスの時代」のトレモント体育館



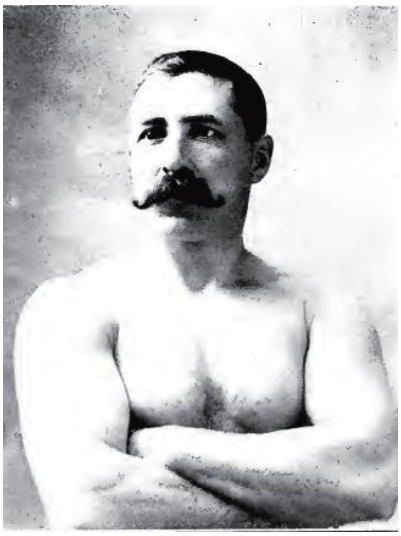
Doggett, *History of the Boston YMCA*, p.48.

Figure 20. トレモント体育館の体操家たち（買収以前）



Lovett, p.116.

Figure 21. R・J・ロバーツ



Brink, p.88.

4. 体操からスポーツへ

この章では、YMCA の「身体事業」の中心が体操からスポーツへ移行する過程を示す。その原動力となったのが、ギューリック（Luther H. Gulick, 1865-1918）だった（**Figure 22**）。彼は 1886 年 4 月にミシガン州ジャクソン YMCA の体育館で指導者の職を得てから、1900 年まで YMCA の「身体事業」に従事した。のちに見るように、ギューリックの影響力はロバーツを凌駕するものだった。

4-1. ギューリックの時代

ギューリックと科学的な体育

1865 年 12 月 4 日、ギューリックはホノルルで伝道師一家のもとに生まれた。幼い頃から、彼は家族とともに世界各国を「巡回」していた。1870 年にボストンに渡り、1872 年にスペイン、1873 年にイタリアを回り、パリやロンドンを経由して、1875 年にアメリカに戻った。その後、アメリカ聖書協会[American Bible Society]の任命によって日本に派遣された父を追って、1877 年には横浜に渡ったが、1880 年、オハイオ州のオバーリン大学の大学進学校[preparatory school]に入学した。しかし、そこではいくつかの災難が待ち受けていた。例えば、聖書用語の勉強が好きになれなかったこと、保護者代わりの親戚とウマが合わなかったことが挙げられるが、特に彼を苦しめたのは片頭痛によって修学すらままならなかったことだった。彼は両親から見限られつつあることを感じながら、一方でボクシングや野球、体操にのめり込み、その活躍によって一躍人気学生となっていた[1]。例えば、のちに YMCA トレーニング・スクールの学長となるドゲットは、自身が入学した 1882 年に、亜麻色の髪をしたギューリックがアンダーハンドの速球を投げているのを見たと回顧している[2]。そして、教室での活躍が運動場でのそれを上回ることはなかったものの、1885 年にオバーリン大学に入学することになった。

このことがギューリックの人生にとって転機となった。その要因は、いくつかの出会いに求めることができる。まず、ハンナ（Delphine Hanna, 1854-1941）の存在である。彼女はサージェントの学校を卒業してオバーリン大学に着任したばかりで、体操の指導とは科学的であるべきで、そうした科学に基づく体育こそが健康にとって不可欠であると考えていた。彼女の影響のもとで、

[1] 小田切「ギューリック」、438-439 頁; Putney, “Luther Gulick,” pp.150-153.
[2] Doggett, *Man and a School*, p.45.

ギューリックは友人のウッド（Thomas Wood, 1865-1951）とともに、体育という分野の大いなる可能性を確信するようになった。ちょうどこのとき、ブレイキーの著書を読んだことも、彼らをその道へと突き動かすきっかけとなったとされる。ウッドはオバーリン大学の体育館で指導を担い、ギューリックはサージェントに手紙をしたため、1885 年 11 月にサージェントの学校に入学した。翌年 4 月、半年間の課程を修了した彼は、サージェントの紹介でジャクソン YMCA の体育館での職を得ることになった。これが、ギューリックの YMCA との出会いだった[3]。

ギューリックはアスリートであるとともにキリスト教徒であり、まさに YMCA が求めていた人物だった。また、口の達者な彼は 1886 年の夏にはいくつかの YMCA に招待され、「おそらくスポーツと信仰の関係について話をしていた」[4]。しかし、その年の秋になるとニューヨーク大学医学大学院に入学し、1889 年 3 月に学位を取得するまで医学訓練を重ねた。とはいえ、そのあいだ YMCA との関係が断ち切られたわけではなく、むしろこの時期にいっそう深まることになった。修学のかたわら、彼はニューヨーク YMCA の医学検査官[medical examiner]を務め、ハーレムの女学校で体操の指導をした[5]。そしてなにより重要なのが、後述するとおり、1887 年に新設された YMCA トレーニング・スクールの講師として招聘されたことである。当時、若干 21 歳のギューリックは、スプリングフィールドの地でベテランのロバーツと職をともにすることになった。この大抜擢には、同盟委員会の総主事モーズ（Richard C. Morse, 1841-1926）がニューヨークで医学を学び始めたばかりのギューリックと出会い、1886 年に彼を委員会初の「身体事業主事[physical work secretary]」に任命したことが関わっている[6]。これによって、彼は YMCA 内で発言力を持つようになり、1900 年まで続く「ギューリックの時代」が幕を開けることになった[7]。

ギューリックの時代

それでは、ギューリックの主張とはいったいどのようなものだったのだろうか。まずは、北米同盟大会における発言に注目してみたい。彼が大会の議事録に初めて登場するのは、1889 年のことである。「新しい体操」と題したスピーチは、次のように始まる。

---

[3] 小田切「ギューリック」、439 頁; Putney, “Luther Gulick,” pp.153-155; Dorgan, pp.4-6.
[4] Putney, “Luther Gulick,” p.156. ただし、1886 年時点でのギューリックの講演録にあたる史料を見つけることはできなかった。管見によれば、ギューリックが初めて『ウォッチマン』に論考を寄せたのは、1887 年 4 月 15 日である。Luther Gulick, “Our Gymnasium,” *The Watchman* 13-8 (April 15, 1887), p.106.
[5] Putney, “Luther Gulick,” pp.156-157. Dorgan, pp.6-7.
[6] Hopkins, p.268; Morse, p.265. モーズとギューリックの出会いがまったくの偶然によるものなのか、それともどちらかのアプローチによって実現したものなのかは明らかではない。
[7] Hopkins, p.251.

近年、体育[physical education]は大変革を遂げている。ほんの数年前には、知的な体育[intelligent physical education]などということは、ほとんどいわれていなかった。たくさんの体育館があり、体操に優れている人が多くいたが、体格の教育[the education of the physique]に関して何でも知っている人、あるいは知ろうとしている人は比較的少なかった。[8]

さらに、彼はこう続ける。

これまで、われわれは体育の真の目的を理解しそこねていたために、その活動を狭めてしまっていた。体格の教育と無関係に、人びとの身体の健康のみを目的に運動すればよいというのは誤信である。どんな種類の体操を教えたらよいかという問題のすべてが、この目的に向けられていた。われわれが果たすべき目的をはっきりと心に留めておいたなら、こうした主題に対する過去の議論はまったく不必要なものだった。……健康とは、他のあらゆるおこない[performance]のための手段である。しかし、それ自体は目的ではない；その獲得は副次的なものである。もし、われわれの目的が第一に健康だったなら、この成果を挙げるであろう体操方式を選ぶのは、非常に簡単なことである。しかし、もしその目的が根本的に、知的かつ霊的なはたらきと関連した、人生で為すべきあらゆる素晴らしい仕事をおこなうための体格の教育と修練[training]だったなら、われわれに課せられた仕事ははるかに難しいものとなる。というのも、いまやそれは、生理学はなおのこと、心理学の問題と密接に結びついているからである。[9]

ギューリックにとって、体育とは「知的かつ霊的なはたらきと関連した、人生で為すべきあらゆる素晴らしい仕事をおこなうための体格の教育と修練」のためのものであり、「体格の教育と無関係に、身体の健康のみを目的に運動」させることではなかった。つまり、体育とは「知的かつ霊的発達とも関連した、人間の体力[physical power]の教育」だった[10]。また、「どんな体操を教えたらよいか」という問題設定そのものに疑問を抱いており、それは同時に当時のアメリカ体育界に対する批判であったともいえる。

---

[8] *Proceedings of the Twenty-Eighth International Convention of Young Men's Christian Association* (May 11, 1889), p.98.
[9] *Proceedings of the Twenty-Eighth International Convention of Young Men's Christian Association* (May 11, 1889), p.101.
[10] *Proceedings of the Twenty-Eighth International Convention of Young Men's Christian Association* (May 11, 1889), p.103.

ギューリックによるこうした提言は、アメリカ体育振興協会の大会の場でも繰り広げられた。1890 年の第 5 回大会において、彼は「新しい専門職」と題する話題提供をおこなった。

> われわれが従事している仕事の性質について、知的な人びとのあいだですら、非常に一般的な誤解があるように思われる。多くの人びとによって、それはたんに医学におけるひとつの分野とか、競技スポーツの一部門であるとみなされ、あるいはもっとひどいものだと、われわれを筋組織の増大に時間と精力を費やす男たちとみなす人びともいる。[11]

体育分野における「誤解」に言及したのちに、彼はその仕事を「新しい専門職」として成立させる必要性を訴えた。

> この専門職は、心理学や解剖学、生理学、歴史学、哲学を通じた人間についての深い知識を含んだ、知的活動のための大きく多様な領域を学生たちに提供する。……
>
> ……体育の発展は、他のいかなる要因よりも、この仕事に専門職として従事する人にかかっている。もし、教育や能力のない人に大部分を取り組まれたなら、その仕事は大変な価値のあるものとはならないし、一般大衆に好意的に知られることもないだろう。しかし、それと反対に、もし、大学教育を受け、哲学的な知性を備え、多様な目的とまじめな心を持った人がこの領域に入るように促されたなら、その専門職は本質的に多様で、科学的で、哲学的な領域であることが示され、国民を築き上げる基本となる教育の一部門と認められるものとなるだろう。[12]

ここでも、ギューリックの体育に関する思想が反映されている。彼にとって、体育とは「知的活動のための大きく多様な領域を学生たちに提供する」ことだった。それは、体育を通じた人間形成といいかえることもできるだろう。そして、そのためには、「新しい専門職」に従事する人は徹底的にすぐれた人間性を備えている必要があった。

それでは、ギューリックにとって理想の人間性とはどのようなものだったのだろうか。それがもっともよく反映されたのが、彼が 1889 年に考案した逆三角形のシンボルだった（**Figure 23**）。

---

[11] *Proceedings of the American Association for the Advancement of Physical Education at its Fifth Annual Meeting* (April 4 and 5, 1890), p.59.
[12] *Proceedings of the American Association for the Advancement of Physical Education at its Fifth Annual Meeting* (April 4 and 5, 1890), pp.65-66.

これは知[mind]・体[body]・霊[spirit]の調和を示すもので、のちに YMCA のシンボルマークとなった。当初、この新しいシンボルは北米同盟では承認されなかったが、ギューリックはオリジナルの襟章を作って 10 セントで売ったり、『三角形[Triangle]』という機関紙を発行したりすることで周囲にはたらきかけた[13]。その結果、1891 年 3 月にトレーニング・スクールのロゴに選ばれ、1895 年にはその三角形を含んだエンブレムが北米同盟によって承認された。それでは、ギューリックの意向がいち早く反映されたトレーニング・スクールとはどのような場所だったのだろうか。

4-2. トレーニング・スクール

1885 年 9 月 8 日、リード（D. A. Reed）のもとで、マサチューセッツ州スプリングフィールドにキリスト教奉仕者学校[the School for Christian Workers]が設立された。この学校は 2 年制で、もともと YMCA や日曜学校の主事養成を目的としていた。ところが、1887 年に主事部門[Secretarial Department]に加えて体育館部門[Gymnasium Department]が新設されると、新部門の指導者としてロバーツとギューリックが招聘された（**Figure 24**）。その目的とは、「キリスト教徒の体育館長を現場に置くこと」だった。そのために、「第一にキリスト教徒、第二に知的な教師[intelligent teacher]」として、「キリストに仕える」ことのできる指導者の育成を担ったのである[14]。

これは、YMCA の体育館における指導者の量的かつ質的不足の問題への対応であった。例えば、1887 年の時点で 168 の YMCA が体育館を持っていたが、指導者の数はその約 3 分の 1 の 53 人にすぎなかった（**Table 1**）[15]。また、たとえ指導者がいたとしても、たいていは YMCA の理念に共感しないサーカスの曲芸師などによってまかなわれていた。こうした時代に、指導者養成学校、すなわちトレーニング・スクールが求められたのは必然的であったといえるだろう。

トレーニング・スクール構想

トレーニング・スクールの設立は、ロバーツとギューリックが以前から訴えていたことでもあった。例えば、ロバーツは 1885 年の時点で『ウォッチマン』のなかで次のような主張をしていた。

望まれるのは、この仕事に適任の若いキリスト教徒が、最善の方式のもとで YMCA の要求

[13] Putney, “Luther Gulick,” p.159. Hopkins, pp.256-257.
[14] *Second Catalogue of the School for Christian Workers* (1887), p.20.
[15] Johnson, p.48.

を満たすように訓練される学校である。……私がキリスト教徒として思うのは、すべての指導者はキリスト教徒でなければならないということである。[16]

しかし、現状は「YMCA の要求を満たす」にはほど遠かったようである。このあとでロバーツは「われわれの YMCA から 2 名の若者を体育館の管理に派遣した」とも述べている。つまり、ロバーツは彼なりの「最善の方式」で「最初のトレーニング・スクール」の指導者としての役割を果たしていたといえる[17]。さらに、1887 年にも「指導」に関する問題を取り上げていた。

深刻な事故のほとんどは、正しい指導がおこなわれていない体育館で起きており、会員たちはほぼ好きなように運動することが許されている。……人びとは心の正しい規律に関する指導と同じように、身体の正しい管理に関する指導を必要としている。体育館はいまや、知の学校[mental school]が知性のためにしていることを、身体のために成し遂げている。もし、われわれが最善の男性を成長させようと思うなら、体育[physical education]は知能や精神の教育と手を取り合っていかなければならない。[18]

ロバーツは体育館における「深刻な事故」を防ぐために「正しい指導」の重要性を説き、「体育」が他の教育と手を取り合って推進されることを望んでいた。ここで注意しておきたいのが、ロバーツのいう「体育」とは、「身体の正しい管理」を指導する「指導者への教育」を意味するのであって、「身体の正しい管理」そのものではないということである。先に見たような「ボディ・ビルディング」や「身体文化」という言葉を用いなかったのは、ここでは「指導者への教育」を強調したかったからだと思われる。

ロバーツ同様、ギューリックの頭にも「指導者養成学校」という考えがあった。彼がまず注目したのは、体育館という場所の特殊性だった。

YMCA の目的は、若者をキリストのもとに連れてくることである。現在、われわれがキリスト教徒ではない若者を多く確保している唯一の場所が体育館である。そして、ここはわれ

[16] Robert J. Roberts, “Association Gymnasium,” *The Watchman* 11-4 (February 15, 1885), p.45. 傍点部は本文中では斜体。
[17] トンプソンは、ロバーツが 1885 年から 3 年間で 28 名の指導者を輩出したことに触れ、ボストン YMCA の体育館を「最初のトレーニング・スクール」とみなした。Thompson, p.386.
[18] R. J. Roberts, “Can an Association Gymnasium be Successfully Conducted without an Instructor ?,” *The Watchman* 13-7 (April 1, 1887), p.95.

われにとって最も重要な領域である。……多くの体育館指導者[gymnasium instructor]が非キリスト教徒である。……この問題の重要性に目が向けられ、その解決のための知恵が与えられますように。[19]

ギューリックによれば、体育館に非キリスト教徒が集まるのは、「指導者が非キリスト教徒である」からだという。この状況を改善するため、彼は次に「クリスチャン・ジムナスト」を求め、その資質を以下のように定義した。

現在、体育館事業の性質について、2 つの見方がある。1 つは、より広く認められているように、たんに身体的に有益であること。もう 1 つは、霊的に有益であるように男性に接触し、副次的に身体を鍛え上げること。……①精霊で満たされなければならない。……体育館はわれわれが彼ら〔体育館を目当てに YMCA に参加する人びと〕に持った唯一の影響力[hold]であるので、何とかして体育館を通じて彼らを神のところへ連れて行かねばならない。たいてい彼らは総主事には共感しないので、彼らの心が動かされることはない。したがって、多くの準会員を抱えたこの最も難しい仕事は体育館長の身にふりかかる。YMCA において、特別に神の精霊を必要とするのは、まさしく彼である。②聖書の基礎をよく身につけ、キリスト教的奉仕の方法論に精通していなければならない。……③統率者であり、組織者でなければならない。……④体操に関するすぐれた実践知識を備えてなければならない。……⑤身体に関するすぐれた知識を備えてなければならない。……⑥動物的な生活[animal life]やたくましさ、魅力[magnetic]で満ちていなければならない。つまり、賢明で、活動的で、博識で、たくましく、魅力的で、科学的で、思いやりのある、クリスチャン・ジムナストでなければならない。[20]

ギューリックは、体育館とはそれを目当てに YMCA に参加する準会員への「唯一の影響力」であると考え、彼らを相手にする体育館長はとりわけ「聖霊を必要とする」存在であるべきと主張した。そして、指導者たる者はリーダーシップを持ったキリスト教徒であり、体操（＝実践）のみならず身体に関する知識（＝医学知識）にも通じた、科学的な「クリスチャン・ジムナスト」である必要性を強調した。こうしたギューリックの理想は、どの程度そのプログラムに反映され

[19] Luther Gulick, “Our Gymnasium,” *The Watchman* 13-8 (April 15, 1887), p.106.
[20] Luther Gulick, “The Qualifications of Gymnasium Superintendents,” *The Watchman* 13-13 (July 1, 1887), p.185.
傍点部は本文中では斜体。

ていたのだろうか。

トレーニング・スクールのプログラム

毎年春に発行されたスクールの『要覧』のなかで、初めて体育館部門について言及がなされたのは、1887 年度の事業計画を記した第 2 号（1886-1887 年）だった。「体育館指導者のための特別トレーニング」という見出しのもとで、「キリスト教徒の体育館長を現場に置く」という目的が明示されたうえに、1887 年 9 月に開講する新部門に先立って、7 月 6 日から 8 月 31 日にかけてサマー・スクールを開催することが告知された[21]。この第 1 回サマー・スクールにおける実際のプログラムを知る唯一の手立ては、次に示すわずか 1 頁の粗末な案内書にある（**Figure 25**）。

> 以下のような研究の根幹は、協議中および記載中であることを考慮されたい : 初等解剖学（とくに生体に関して）; 生理学、衛生学、理学的診断、症候学、運動時における身体と知性の関係；さまざまな体内組織の理論；理学統計（その価値、用法、誤用。いかに収集し、保存するか)。
>
> アウトドア・スポーツの理論と実践の両方において、毎日の運動が提供される。
>
> クラス・ワークとスペシャル・ワークの両方からなる、R・J・ロバーツによる完璧なフロア・ワーク方式が提供される。クラス・ワークは、徒手体操やダンベル、球竿、平行棒運動、ドイツ式鞍馬、跳馬、跳躍棒、プッシュ・ボール、行進などを含む。個人のためのスペシャル・ワークは、身体の弱い部分を発達させる方法や運動処方の基礎、競技スポーツ[athletic work]のためのトレーニング法などに関する研究を含む。[22]

そこでは、ロバーツによる「フロア・ワーク」（＝体操）が紹介されつつも、あっさりと、しかし、はっきりと「アウトドア・スポーツ」という言葉が含まれていた。これはおそらく、トレーニング・スクールにおいて、初めて「アウトドア・スポーツ」に言及したものである。

このサマー・スクールの詳細を知るべく、『要覧』第 4 号（1889 年）に 8 頁にわたって掲載された、第 3 回のものに目を向けてみたい[23]。そのプログラムは、大きく 6 つに分かれていた。

---

[21] *Second Catalogue of the School for Christian Workers* (1886-1887), p.20.

[22] “Department for the Training of Gymnasium Instructors, Summer School—1887”; Springfield College Archives and Special Collections, School for Christian Workers Publications, 1885-1890, copy 2. この史料は、まず水谷氏にコピーを譲り受け、その後、アーキビストのジェフ氏に原典を確認してもらうことで引用が可能になった。

[23] 第 3 号（1888 年）以降の『要覧』では、「サマー・スクール」は「サマー・セッション」と呼ばれるようになったが、ここでは「サマー・スクール」に統一して表記する。1891 年まで毎年開催された（全 5 回）。

聖書研究（C・S・ビアズリー）

……

YMCA 事業（ルーザー・ギューリック）

……

身体診断（J・ガードナー・スミス）

……

生理学および衛生学（T・M・ブル）

……

体操（R・J・ロバーツ）

鞍馬、跳馬、平行棒、マット、ダンベル、キャリセニクスなどに関する基本的な体操。

クラスを先導する技術や「あらゆる運動は、安全で、短時間でできる、簡単で、有益で、楽しいものであるべき」という基盤のもと、体操体系の構築へ特別な関心が払われる。

アウトドア・スポーツ（ルーザー・ギューリック）

トレーニングの一般的な原理に関する指導。

毎日の、短距離走および長距離走のトレーニング。

高跳および幅跳、助走ありとなしの両方。

競泳、溺れている人の救助の指導を含む。

漕艇、ローンテニスなど。

これらのスポーツは、特に心臓や肺、腹部の器官への効用に関連して学ばれる。[24]

ここでは、明らかに「ロバーツ＝体操（インドア）」および「ギューリック＝スポーツ（アウトドア）」の構造が成立しており、その両方が「体育館指導者」向けに指導されていたことがわかる。さらに、『要覧』第 4 号には、校舎から徒歩 5 分圏内に「陸上競技トラックやテニスコート、野球場などを備えた運動場」があったことが記されている[25]。こうした屋外スポーツ施設を、いつ頃いかにしてトレーニング・スクールが持つようになったのかは不明だが、遅くとも 1889 年までには、スポーツを推進する準備が整っていた。

1887 年 9 月に開講された体育館部門のプログラムについては、『要覧』第 3 号（1888 年）に詳

[24] *Forth Catalogue of the School for Christian Workers* (April 1, 1889), pp.31-33.
[25] *Forth Catalogue of the School for Christian Workers* (April 1, 1889), p.35.

しく紹介されている。そのなかにある 1887 年度の名簿を見ると、主事部門の学生が 37 名（2 年生 5 名、1 年生 32 名）いたのに対して、体育館部門は 5 名（2 年生 1 名、1 年生 4 名）で発足したことがわかる[26]。また、体育館部門のプログラムは以下の通りである。

Ⅰ.―体操の歴史

A. 古代：⑴ギリシャ；⑵ローマ；⑶その他

B. 中世

C. 近代： ⑴ドイツ；⑵フランス；⑶スウェーデン；⑷イギリス；⑸アメリカ

D. 体操が国民生活へ与える影響 ⑷ギリシャ；⑹ローマ；⑹ドイツ

Ⅱ.―YMCA の体育館事業

A. 領域：⑴国内；⑵海外

B. 現在の機会[Present Opportunity]：⑴信仰；⑵科学；⑶実践

C. 男性の確保と訓練：⑴必要な資質；⑵確保；⑶訓練

D. さまざまな男性や身体と体育館指導者との関係：⑴総主事と；⑵管理委員会と；⑶体育振興協会と；⑷教会やその他の信仰団体と

Ⅲ.―体育館

A. 場所

B. 大きさと形

C. 換気

D. 器具；品質、配置、手入れなど

Ⅳ.―事業とその方法

A. 信仰：⑴トレーニング・クラス ⑷確保、⑹指導、⑹活用；⑵聖書研究 ⑷指導法、⑹助言；⑶個人活動；⑷体育館のための委員会 ⑷男性の確保、⑹男性の訓練、⑹委員会活動

B. 科学：⑴人体測定学的統計 ⑷確保、⑹活用、⑹保存、⑷将来の活動との関係；⑵理学診断と運動処方 ⑷動力計[Dynamometer]や脈波計[Sphygmograph]などの器具の活用、⑹スペシャル・クラスのための処方、⑹特例について；⑶解剖学 ⑷一般的な解剖学 ①発達 ②組織など、⑹骨学[Osteology]（頭蓋骨を除く）、⑹関節 ①形態 ②構

[26] 初年度にもかかわらず、アレン（Lewis W. Allen）という人物が体育館部門の 2 年生となっている。*Third Catalogue of the School for Christian Workers* (April 1, 1888), pp.7-8.

造 ③運動、⑷筋肉（顔面を除く）、⑸動脈、静脈、神経、リンパ（簡単に）；⑷生理学 ⑻マーティンの『人体』（特殊感覚を除く）、⑹特別講演 ①成長と発達 ②知性と身体の健康、たくましさ、耐久性に関わる運動 ③健康・疾病における運動の法則 ④個人特有の体格、⑸衛生学 ウィルソンの『衛生学の教科書』、⑹基礎物理学、⑺体操に関する文献総覧

C. 実践：⑴体操 ⑻クラス運動の委任、⑹運動の分析、⑹運動の考案、⑷クラスワーク成功の要素（すなわち、安全で、短時間でできる、簡単で、有益で、楽しくあるべき）⑸器具の使用；⑵競技スポーツ ⑻一般的なルールなどの正しい活用、⑹ローンテニス、漕艇、競泳、競走、跳躍など。[27]

ここで注目しておきたいのが、第一に、実践的指導のみならず理論的指導が重視されていることである。それは、人体測定学、身体診断と運動処方、解剖学、生理学、衛生学、基礎物理学にまで及んでいた。これはまさに、ギューリックが「クリスチャン・ジムナスト」の資質として 5 つ目に挙げた、「身体に関するすぐれた知識」を養うための指導そのものだった。第二に、実践的指導のなかに、体操のみならずスポーツが含まれていることである。「体育館部門」の目的は、あくまで「体育館指導者という特別な仕事のために訓練すること」であったが、すでにこのとき屋外スポーツへの関心が『要覧』のなかにも顕著に現れていた。

結局、トレーニング・スクールはギューリックの哲学のもとで発展することになった。1889 年にロバーツが辞任すると、体育館部門は体育部門[physical department]へ再編され、ギューリックは教え子のネイスミス（James Naismith）やスタッグ（Amos A. Stagg）らを講師として採用し、スポーツを推進する体制を整えていった（**Figure 26**）。そして、実践と理論を兼ね備えたこの段階において、YMCA において初めて「体育」が指導されるようになったのである。

このスクールから、1895 年までに 57 名の学生が卒業した。そのうち 48 名が YMCA へ、6 名が大学へ指導者として輩出された[28]。例えば、1889 年のニューヨーク YMCA では、ベテラン指導者ウッドの辞任に伴い、スクールの卒業生であるバートレット（F. H. Bartlett）とスミス（Horace F. Smith）がその後継者として採用された[29]。最終的に、ギューリックがトレーニング・スクールを退く 1900 年までに 84 名の卒業生を輩出し、全 5 回のサマー・スクールには計 188 名が参加し

[27] *Third Catalogue of the School for Christian Workers* (April 1, 1888), pp.15-16.
[28] Doggett, *Man and a School*, p.61.
[29] *36th Annual Report of the Young Men's Christian Association of the City of New York* (1889), p.70.

た（**Table 2**）[30]。

4-3. 競技スポーツ主義

ロバーツの辞任

ロバーツの辞任は、転換期のスクールにとって象徴的な出来事でもあった。『理事会議事録』には、1889 年 6 月 9 日付で次のような記録が残されている。

> それから、体育部門[physical department]の指導者であるロバーツの辞任が言い渡され、受理され、以下のことが満場一致で承認された；「決議――ロバーツ氏の辞任を受理し、彼がスクールと関わったこの二年間で尽くした格段の功労に心からの敬意を払う；YMCA を派手な体操[fancy gymnastics]の悪弊から救い、体育館事業は大多数の男性の役に立ちうるし、役に立ってきたという原則に一般人の関心を向けたことは、他の誰でもなくロバーツの功績であると確信している。」
>
> ロバーツが辞任したのは、スクール側が師範学校で教えられるべきだと信じた体操を指導する気になれなかったからである。彼は正当に主張した。自分はすべての YMCA で必要とされるフロア・ワークを教える権限を特別に与えられている；そして、それ以外のものを教えることが正当化されるとは思えない、と。[31]

ここでは、ロバーツが辞任した理由がはっきりと示されている。彼は、スクールの教育方針に真っ向から反対していた。それは、すでに見てきたスクールのプログラムからわかるように、競技スポーツに対するものであったと考えられる[32]。

ロバーツが「健康の殿堂」のなかで推奨していたのは、あくまで非競争的な体操だった。1876 年にボストン YMCA が郊外に借りた運動場をわずか 1 シーズンで手放したのも、ロバーツが競技スポーツに「哲学的に」反対していたからであるとされる[33]。1888 年には、『ウォッチマン』のなかで、はっきりと競技スポーツを批判していた。

---

[30] Doggett, *Man and a School*, p.62. 二人ともスクールの体育館部門を卒業したわけではなく、1888 年に開催された第 3 回サマー・スクールの修了生だった。*Forth Catalogue of the School for Christian Workers* (April 1, 1889), pp.29-30.

[31] *Trustee Minutes* (June 9, 1889), pp.85-87; Springfield College Archives and Special Collections.

[32] ただし、1889 年の 6 月から 7 月にかけて開催されたサマー・スクールの集合写真には、辞任したはずのロバーツの姿を確認できる（**Figure 27**）。辞任後もトレーニング・スクールに関わっていた可能性がある。

[33] Johnson, p.51.

競争運動[competitive exercise]を発展させるのは賢明ではない。というのも、それはきっと健康を損ない、身体を歪めるからである。さらに、意思決定の過程で意見の相違が生じる場合、友人のなかに敵を作るからである。指導者は競争運動に直接責任を負うべきではないし、それと関係を持つべきでもない。なぜなら、これこれの種目がお気に入りであるというような、その指導者の好みが示されていると言いがかりをつける参加者もいるからである。このように、ある不満感が人びとのあいだに生じ、その感情の要因に気がつかない指導者にとって、それは悩みの種となるだろう。[34]

ロバーツが「競争運動」に反対したのは、指導者にとって責任や負担となるものを取り除くためであり、また指導内容を統一するためであった。競争に頼らない画一的で単純な体操こそが、YMCA の理想の体現であるとロバーツは考えていたのかもしれない。じっさい、ロバーツは競技スポーツを「YMCA の理想への不法侵入[illegitimate intrusions]」とみなしてさえいた[35]。

しかし、そうした考え方は YMCA のなかで主流とならなかったようである。時代は体操ではなく、「新しいゲーム」を求めていた。ネイスミスは晩年、次のように述懐している。

1891 年の夏、国際 YMCA トレーニング・スクールに全米各州の YMCA の主事を集めて、夏期講習（Summer School）がおこなわれた。このとき、受講に来ていた各地の YMCA の主事たちは異口同音に、つぎのような実情を報告した。

「冬季の、とくに体育館でおこなうプログラムの会員たちは、かつてサーカスの曲芸師であったという R・J・ロバーツが提唱したような体操中心の体育プログラムには、もはや、まったく興味を示さなくなっている。」

そして、従来の体操にとってかわる〝新しい種目〟の必要性を訴えた。……

ロバーツが創始した〝ボディ・ビルディング・ワーク〟は、ドイツ体操を基本においたさまざまな手具体操であった。でも、ベテランの体操家でなければできないような〝技〟を省くだけの考慮はしてあった。ところが、ロバーツの指導をうけて体育部主事養成課程〔引用者注: 体育館部門あるいはサマー・スクール〕を終え、各地の YMCA に赴任していった主事たちは、≪このような体育プログラムでは、会員たちを魅きつけるのは困難だ≫と、痛感

[34] Robert J. Roberts, “For What Purpose are Our Young Men’s Christian Association Gymnasium?,” *The Watchman* 14-15 (August 1, 1888), p.229.
[35] Baker, “Disputed Diamonds,” p.258.

していた。

このようなわけで、夏期講習に参加した主事たちが、ロバーツの方針による体育プログラムを批判するにいたったのだ。そして、なにか〝新しいゲーム〟が必要であることを、口ぐちに表明したわけである。[36]

ただし、ここで注意しておきたいことが一点ある。それは、ロバーツがかつて「サーカスの曲芸師であった」ことを裏づける史料は、管見のかぎり存在しないことである。この点について、YMCA 史家ホプキンスはネイスミスの記述を「誤り」としており、当のロバーツも「P・T・バーナムの曲芸師」であることを否定していた[37]。ネイスミスによるこの「誤り」が、ロバーツとギューリックの断絶を強調する後世の評価に与えた影響は小さくないだろう。

ところで、トレーニング・スクールを辞任したロバーツは、1890 年に古巣のボストン YMCA に復帰し、1920 年に亡くなるまで 30 年間、その仕事に従事した。1894 年には、自身の体操体系をまとめた『ホーム・ダンベル・ドリル』を出版した（**Figure 28**）。彼にとって、キリスト教徒は「最も健康な人間」でなければならなかった[38]。それは、ある種の強迫観念にまで達していた。

このドリルを知ったからには、運動しないことに対して言い訳はできない。……食事する時間があるなら、運動する時間もあるはずだ。[39]

競技スポーツ主義

一方で、トレーニング・スクールは「競技スポーツ主義[athletic activism]のモデル」となった。野球やフットボールのチームが編成され、スクールが対外試合を後援することもあった[40]。そこで求められていたのは、ロバーツ式の体操ではなく、ギューリックが推奨した競技スポーツだった。ここでまた、ネイスミスの自伝的著作から引用してみたい。

ところで、1870 年代の終りごろのアメリカでは、大学の学生たちが、とくに陸上競技とアメリカン・フットボールの対抗試合に関心をもち始めていた。……

---

[36] ネイスミス、37-38 頁; Naismith, pp.29.
[37] Hopkins, p.761; Robert J. Roberts, “For What Purpose are Our Young Men’s Christian Association Gymnasium?,” *The Watchman* 14-15 (August 1, 1888), p.229.
[38] Roberts, p.34.
[39] Roberts, p.20.
[40] Rader, p.108.

このように、大学時代にスポーツを経験した者が、卒業後、就職して都市に住むようになったとき、余暇にスポーツをしようと考えるのはもっともなことだ。彼らは、スポーツができる〝クラブ〟をさがした。当時は、町のアスレティック・クラブ、サイクリング・クラブ、あるいはYMCAといったところしか、スポーツができるところはなかった。ところがこれらの〝クラブ〟は冬季にはいると、競技スポーツのような体育プログラムは、もち合わせておらず、もっぱら体育館での体操ばかりだった。……

「ベテランの体操家であれば、思い切った〝技〟を完璧にやり遂げることに喜びを感ずるのだろう。しかし、われわれは、アメリカン・フットボールの対抗試合の勝利こそ喜びなのであって、冬中、体操プログラムだけでは、満足できない。」

つまり、このような考え方をもった新しい世代の若者たちは、旧来の体操を中心とした体育による身体の鍛練そのものよりは、むしろスポーツする喜びや楽しさを求めたのだ。[41]

このように、「新しい世代の若者たち」はYMCAをスポーツクラブとさえみなしていた。大学で競技スポーツを経験した若者の目には、旧来の体操プログラムは退屈なものと映ったのだろう。

こうした傾向は、体育部門ではなく、とりわけ主事部門の若者に顕著だった。ネイスミスは、さらに次のように続けている。

秋のシーズンのスポーツが終わって、私たちは、以前から懸念していた〝状況〟が起こるのではないかと気が気ではなかった。当時、トレーニング・スクールは、ふたつのクラスに分けてあった。ひとつは、体育部担当主事養成クラス[Physical Department]であり、もうひとつは、それ以外の一般事業担当主事養成クラス[Secretarial Department]である。

秋のアメリカン・フットボールのシーズンが終わるまで、このふたつのクラスの体育の授業は、合併しておこなわれた。……やがて冬にはいると、クラスは体育館で別々に、体操を中心とした体育の授業をうけた。

このような体育館での授業にたいして、体育部担当主事養成クラスの者たちは、体育分野の専門性を必要とすることもあって、授業内容に関心をもって、一生懸命に取り組んでいた。……ところが、体育部に直接関係しない一般事業担当主事養成クラスの者たち（かつて、大学時代に、スポーツを経験していたものが多い）は、体育館での授業に異なった態度をみせた。つまり、彼らにとっては、いまさら体格、体力の向上をめざす気持もなく、体育館での

[41] ネイスミス、38-39頁; Naismith, p.30.

授業にはそっぽを向いたのである。それにもかかわらず、彼らは、ほとんどの者がいやいやながらも、毎日 45 分ずつ受講せざるをえなかった。[42]

ネイスミスが指摘しているように、当時のトレーニング・スクールには主事部門と体育部門の二つの課程があったが、1891 年度の『要覧』を見ると、たしかに主事部門にも「体操と競技スポーツ」が課されていたことがわかる[43]。それならば、主事部門が体操にほとんど興味を示さなかった可能性も十分に考えられる。主事部門の若者、すなわち「身体事業」には YMCA の一般会員と同様の関心を示すであろう若者の主張はきわめて明快で、YMCA の「身体事業」の重点を体操からスポーツへ移行させるほどのインパクトを持っていたともいえる。

さらに、この「競技スポーツ主義」はギューリックによる記述にも見ることができる。彼は、旧来の体操を「画一的かつ限定的な一連の装甲運動[iron-clad set of exercises]」と非難しさえしていた[44]。ギューリックは、体操との比較において競技スポーツの優位性を主張した。例えば、1891 年の『トライアングル』に次のような論考を寄せていた。

①競技スポーツによって、我々は夏でも冬でも会員を保つことができる。……②競技スポーツは、体操よりもはるかに衛生的な価値がある。……③競技スポーツは、体操よりもはるかに教育的価値がある。……④競技スポーツは、体操よりもはるかに気晴らしとしての価値がある。……⑤競技スポーツは、歴史的に体操よりもはるかに人びとに関心を持たせてきた。……⑥競技スポーツは、体操よりもはるかに安価におこなうことができる。……過去の活動は観衆へ向けて公演することと多分に関わっていた。結果的に多くの観客がもたらされたが、運動する人[workers]が増えることはほとんどなかった。未来におけるわれわれの活動は、できるかぎり多くの人に彼ら自身が運動できるように注がれなければならない。[45]

これは、たんに競技スポーツを推進しているだけではない。あらゆる点において、競技スポーツが体操にまさることを強調しつつ、そしてまた（ロバーツの体操公演のような）「観客」をもたらすだけの体操を批判し、「運動する人」を増やすための競技スポーツを推奨したのである。

---

[42] ネイスミス、43-44 頁; Naismith, pp.34-35.
[43] *Sixth Catalogue of the International Young Men's Christian Association Training School* (May, 1891), pp.14-15. ただし、じっさいにどれくらいの頻度でおこなわれていたのかは不明である。
[44] Luther Gulick, "Our New Gymnastics," *Proceedings of the Twenty-Eighth International Convention of Young Men's Christian Associations* (May5, 1889), p.103.
[45] Luther Gulick, "The Future of Athletics in the Y.M.C.A," *The Triangle* 1-5 (June 15, 1891), pp.69-71.

ところが、トレーニング・スクールの「競技スポーツ主義」は思わぬ帰結を迎えた。1885 年までに、YMCA のあいだで対抗試合の気運が高まっており、すでにいくつかの YMCA はアマチュア競技連盟（AAU: Amateur Athletic Union）のもとで対外試合をおこなっていた[46]。1891 年にバスケットボールが導入されたことによって「競技スポーツ主義」はさらに高まりを見せ、スポーツのみを目的に YMCA に集まる若者が急増した。本格的なアスレティック・クラブと化してしまうことを恐れたギューリックは 1895 年に「アスレティック・リーグ」を立ち上げ、アマチュア競技連盟と連携しながら会報の発行やルールの制定にあたった。しかし、それはむしろ大学やクラブとの対外試合を正式に認めることを意味しており、会費免除や遠征手当などによって選手を確保する YMCA が現れはじめたのである。結果的に、アスレティック・リーグは YMCA の「純潔」を失うことになった[47]。

[46] Johnson, pp.77-78.
[47] Rader, p.109.

Table 1.　YMCA における体育館と指導者の数

	体育館	指導者
1880	51	
1881	63	
1882		9
1883		13
1884		16
1885		18
1886		35
1887	168	53
1888		83
1889		98
1890		116
1891	356	151
1892		174
1893		189
1894		182
1895		202
1896		227
1897		240
1898		238
1899		249
1900	455	247

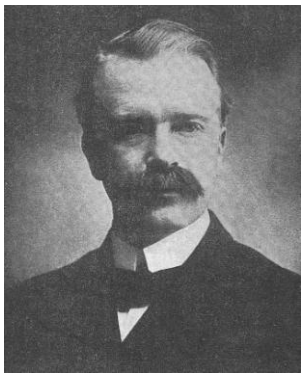
体育館の数は Johnson, Putney による。指導者の数は *Year Book of the Young Men's Christian Associations* より筆者作成。1882 年以降、体育館長[Gymnasium Superintendent]（1890 年から体育主事[Physical Director]）の数が報告されるようになった。ここでは、助手[Asst.]をその数に含めた。

Table 2.　トレーニング・スクールの生徒数

	Summer	Regular	備考
1887	[27]	5	
1888	50[51]	8	
1889	[56]	12	1年制コース3名
1890	46	20	1年制コース4名（ネイスミス、スタッグを含む）
1891	?	15	他に通信制コース12名
1892	−	32	他に通信制コース12名
1893	−	32	
1894	−	25	
1895	−	23	
1896	−	16	3年制導入、1年生はクラス選択なし
1897	−	24	以降、1年生もクラス選択あり
1898	−	24	
1899	−	?	
1900	−	24	
計	[188]	−	

『要覧』より筆者作成。[ ]内の数字は Doggett による。ちなみに、スプリングフィールド大学のアーカイブに残されたサマー・スクールの集合写真には、1887 年に 27 名、1888 年に 47 名、1889 年に 58 名、1890 年に 38 名、1891 年に 41 名が収まっている（ロバーツとギューリックを除く）。

Figure 22.　L・H・ギューリック



Hopkins, p.252.

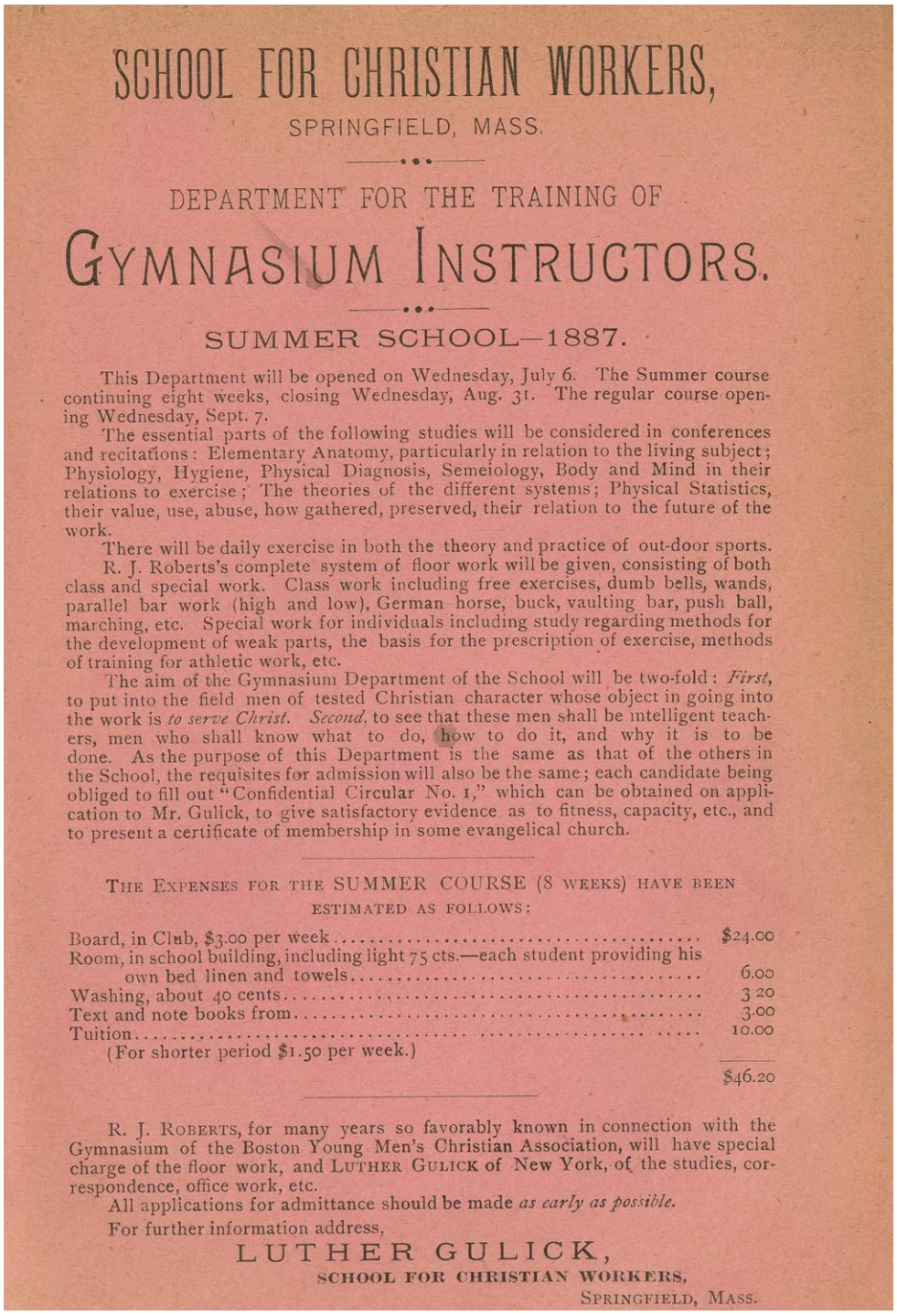
Figure 23.　トレーニング・スクールのシンボル

Doggett, *Man and a School*, front page.

Figure 24.　第 1 回（1887 年）サマー・スクール（中央左がギューリック、その右がロバーツ）

Summer Session for Gymnasium Instructors, 1887, Springfield College Digital Collections.

Figure 25.　第 1 回（1887 年）サマー・スクールの案内書



SCHOOL FOR CHRISTIAN WORKERS,

SPRINGFIELD, MASS.

DEPARTMENT FOR THE TRAINING OF

GYMNASIUM INSTRUCTORS.

SUMMER SCHOOL—1887.

This Department will be opened on Wednesday, July 6. The Summer course continuing eight weeks, closing Wednesday, Aug. 31. The regular course opening Wednesday, Sept. 7.

The essential parts of the following studies will be considered in conferences and recitations: Elementary Anatomy, particularly in relation to the living subject; Physiology, Hygiene, Physical Diagnosis, Semeiology, Body and Mind in their relations to exercise; The theories of the different systems; Physical Statistics, their value, use, abuse, how gathered, preserved, their relation to the future of the work.

There will be daily exercise in both the theory and practice of out-door sports.

R. J. Roberts's complete system of floor work will be given, consisting of both class and special work. Class work including free exercises, dumb bells, wands, parallel bar work (high and low), German horse, buck, vaulting bar, push ball, marching, etc. Special work for individuals including study regarding methods for the development of weak parts, the basis for the prescription of exercise, methods of training for athletic work, etc.

The aim of the Gymnasium Department of the School will be two-fold: *First*, to put into the field men of tested Christian character whose object in going into the work is *to serve Christ*. *Second*, to see that these men shall be intelligent teachers, men who shall know what to do, how to do it, and why it is to be done. As the purpose of this Department is the same as that of the others in the School, the requisites for admission will also be the same; each candidate being obliged to fill out "Confidential Circular No. 1," which can be obtained on application to Mr. Gulick, to give satisfactory evidence as to fitness, capacity, etc., and to present a certificate of membership in some evangelical church.

THE EXPENSES FOR THE SUMMER COURSE (8 WEEKS) HAVE BEEN ESTIMATED AS FOLLOWS:

Board, in Club, $3.00 per week	$24.00
Room, in school building, including light 75 cts.—each student providing his own bed linen and towels	6.00
Washing, about 40 cents	3 20
Text and note books from	3.00
Tuition	10.00
(For shorter period $1.50 per week.)	
	$46.20

R. J. ROBERTS, for many years so favorably known in connection with the Gymnasium of the Boston Young Men's Christian Association, will have special charge of the floor work, and LUTHER GULICK of New York, of the studies, correspondence, office work, etc.

All applications for admittance should be made *as early as possible.*

For further information address,

LUTHER GULICK,
SCHOOL FOR CHRISTIAN WORKERS,
SPRINGFIELD, MASS.

"Department for the Training Gymnasium Instructors, Summer School—1887," Springfield College Archives and Special Collections, School for Christian Workers Publications, 1885-1890, copy2.

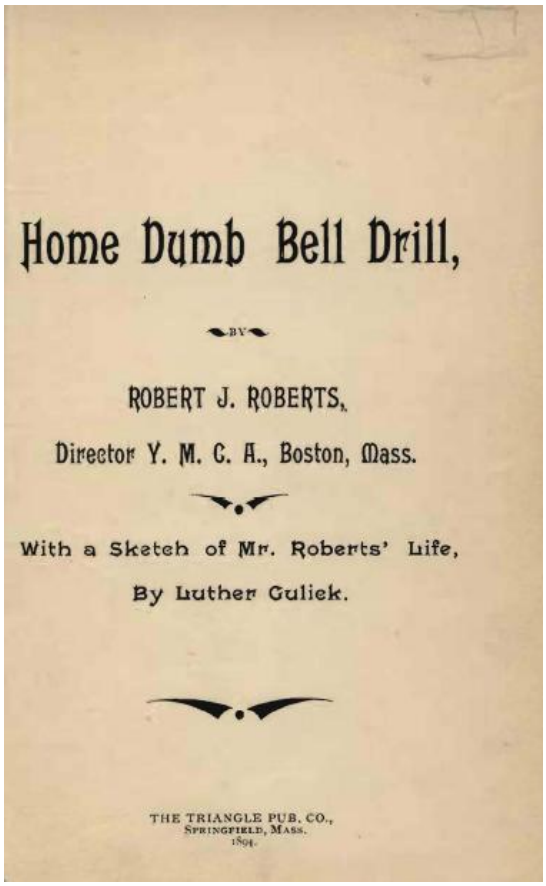
Figure 26.　1890 年の体育部門（中央がギューリック）

Luther Halsey Gulick with Physical Department Students 1890, Springfield College Digital Collections.

Figure 27.　第 3 回（1889 年）サマー・スクール（後ろから 4 列目の左から 4 人目がロバーツ）

Summer Session for Gymnasium Instructors, ca. 1889, Springfield College Digital Collections.

Figure 28.　ロバーツの『ホーム・ダンベル・ドリル』



Home Dumb Bell Drill,

BY

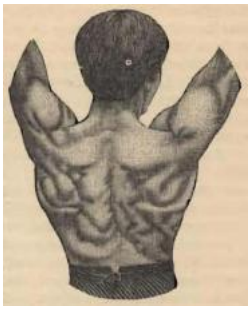
ROBERT J. ROBERTS,

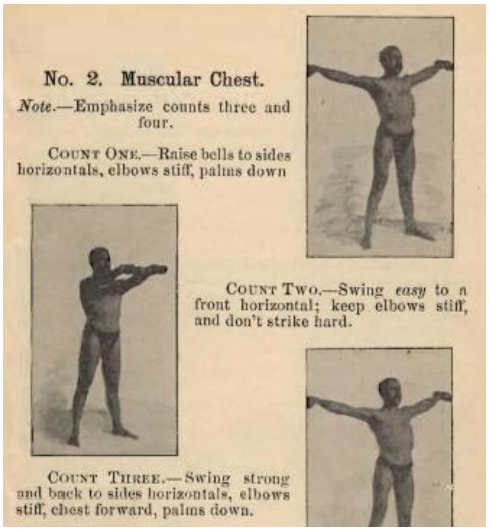
Director Y. M. C. A., Boston, Mass.

With a Sketch of Mr. Roberts' Life,

By Luther Gulick.

THE TRIANGLE PUB. CO.,
SPRINGFIELD, MASS.
1894.





No. 2. Muscular Chest.

Note.—Emphasize counts three and four.

COUNT ONE.—Raise bells to sides horizontals, elbows stiff, palms down

COUNT TWO.—Swing *easy* to a front horizontal; keep elbows stiff, and don't strike hard.

COUNT THREE.—Swing strong and back to sides horizontals, elbows stiff, chest forward, palms down.

5. 終章

これまで、19 世紀後半のアメリカにおいて、中産階級の人びとが身体運動を受容していく過程を見てきた。前半では社会全体の体育館ムーブメントに、後半では YMCA の「身体事業」に焦点を当てて論じた。最後に、これらの関連を示すことで論を閉じることにしたい。

本論文の主題は、YMCA と「筋骨たくましいキリスト教」がいつ頃いかにして結びついたかということであった。たしかに、YMCA は「筋骨たくましいキリスト教」を受容し、アメリカにおけるスポーツムーブメントを推進した。しかし、YMCA は突然「筋骨たくましいキリスト教」を受容したわけでも、何もないところからスポーツを採用したわけでもない。また、「筋骨たくましいキリスト教」とは、指導者がいかに敬虔であったかという個人の特性のみで語ることのできる問題ではないし、一口に「スポーツ」と括ってしまうと、それ以前の体操ムーブメントの存在を見落としかねない。よって、人びとが「健康」という目的のもとに進んで身体を動かしていた、その行為の歴史をたどることが、YMCA における「筋骨たくましいキリスト教」を理解する鍵となるのである。その意味で、本論文では YMCA における「健康の殿堂」を同時代の体育館ムーブメントとの連続性で捉えようと試みた。

19 世紀後半の体育館ムーブメントを支えていたのは、まさしく「健康」という概念だった。大学体育館においても、商業体育館においても、「健康」は重要な役割を演じてきた。例えば、ヒッチコックやサージェントは大学生に軽体操を指導し、定期的に「健康診断（人体計測）」をおこなった。ヒッチコックは大学にいち早く体育を導入し、誰にでも取り組めるような軽体操を推奨した。サージェントは各自で負荷を調整できる体操器具を発明し、身体をバランスよく鍛えることを忠告した。彼らは体育館での体操を推奨したのであり、屋外でスポーツをすることには意欲的でなかった。また、ルイスやウィンドシップは「健康」の必要性を説く巡業講演家であり、それぞれ独自の体操を指導する体育館を立ち上げた。ルイスは女性や子供でも取り組めるような「新体操」を考案し、その体操を普及させる指導者育成学校を設立した。ウィンドシップはウェイトを用いた重体操を指導し、筋力こそが「健康」の証であることを強調した。彼らもまた、体育館での体操を推奨し、屋外でのスポーツには目を向けていなかった。

このように、体育館で体操を推奨する指導者たちにとって、スポーツとは思いも及ばない存在だった。「健康」のために体操を推奨した彼らが、なぜ同じようにスポーツを推奨しなかったのだろうか。彼らの共通項は、医学を修めていたことである。大学体育館の二人は学生たちの「人

体計測」に熱心だったし、商業体育館の二人は体育館に診療所を併設していた。ここで、当時の医学はスポーツと関わりをもつことがなかったといいたいわけではない。ただ、体操がスポーツよりも医学（とくに人体計測学）的効用があるとみなされていた可能性は否定できない。身体のどの部位を、どのように動かせば、どれだけ発達するか。それが「健康」とみなされていたとするなら、不確定要素の多いスポーツよりも、手具や器具を用いることで一定の動作を生む体操の方が効果を期待できるといえるだろう。じっさいに、ヒッチコックとサージェントは徹底的に身体各部（肺活量などの一部の身体能力を含む）を計測していたし、ルイスとウィンドシップは治療という面目で体操を指導していた。

さらに、アメリカの体育界全体がそうした傾向にあったともいえそうである。すでにアメリカ体育振興協会についての議論のなかでも指摘したように、協会発足メンバーの多くが医学博士を所有しており、彼らのもとで「人体測定学」のより一層の発展が約束された。また、大学の現場では、体育は学生たちの自治による運動部（競技スポーツ）と基本的に距離がおき、場合によっては過剰に干渉することすらあった。こうした主潮のもとでは、（スポーツを含めた）より良い体育のあり方ではなく、「どんな体操を教えたら、（医学的な見地からして）身体的に有用か」という体操の「方式論争」に落ち着いてしまったのは無理もないだろう。さらに、ここにドイツやスウェーデンの体操が加わることで、「論争」はより複雑性を帯びたのである。アーノルドの子、クーベルタンがうろたえたのは、まさにこの点だった。

さて、ここまで体育館における体操に焦点を当ててきたが、次に、それではなぜ「健康」のために身体を動かすのかということに注目してみたい。じつのところ、この点についてはリースの「スポーツ信条」が非常に的を射ているように思える。彼は、19 世紀半ばに中産階級のあいだで、スポーツが社会的に実用性のある活動とみなされるようになった要因として、健康増進と道徳改善、性格形成の 3 つを挙げていた。それぞれ、「身体的な健康」、「健全」、「男らしさ」と換言することもできる。これら 3 つの要素が、「健康」という名のもとに統合されていたと考えられるのではないだろうか。

まず、「身体的な健康」とは、すでに述べたように、体操指導者が得意とするところだった。病気の治療や予防のための体操は、それをするのに十分な動機となったといえるだろう。そのためには、老若男女、元気な者から病気の者まで、誰にでも取り組むことのできる体操が必要だった。ヒッチコックやサージェント、ルイスは、軽体操あるいは各自のレベルに合った体操を推奨した。一方で、ウィンドシップをはじめとした「筋力探究者」たちは、病気をはねのけるような

重体操を追求した。むろん、後者には第三の要素「男らしさ」が十分に関わっている。この事例だけみても、「健康」に内在する多義性を認めることができるだろう。

第二の要素「健全」は、ひょっとするとYMCAが身体運動を受容した背景に最も関わるかもしれない。このことは同時に、その要因を「筋骨たくましいキリスト教」に帰する見解に最も欠けていた視点といえるだろう。それは、YMCAが「身体事業」に着手する際に、何を仮想敵と捉えていたかを考えてみれば理解することができる。YMCAはその名のとおり、若者を対象にした組織である。組織を保つためには、若者がその活動に参加する必要があった。しかし、その若者を巧みに「誘惑」する一団がいた。それが、「独身男性サブカルチャー」である。YMCAは、酒場やミュージックホールに代わる新たな「居場所」を提供しようとした。これは、「夕べのわが家[evening home]」や「とびきり居心地よい場所[a place for great good]」というYMCA自身の言葉にも表れている。そうした場を、より安価（ときには無料）で、より「健全」に提供する必要があった。なぜなら、YMCAは中産階級プロテスタントの組織であったからである。

こうして、YMCAは「健全な余暇」あるいは「合理的娯楽」を提供するようになった。当面の目標は、「若者の余暇時間を有益に占有する」ことだった。そうすることで、彼らは「誘惑」から救われ、勤勉かつ禁欲的で誠実な男性であることができた。YMCAの活動は、こうした「ヴィクトリアニズム」的な「男らしさ」を再生産する役割を果たしていたといえる。その美徳を信奉していた人びとは、美徳そのものを侵食しない程度に、それまで積極的かつ好意的には関与してこなかった娯楽に手を出し、それこそが古き良き「男らしさ」を継承すると説明した。ラプキンが指摘したように、「男らしさの工場」としてのYMCAは、たしかに実業界からの恩恵をこうむるものであり、その期待に応えるものでもあった。とはいえ、この「男らしさの工場」は、彼らの期待以上に生産力をもつこととなった。

「健全」という要素がYMCAの「身体運動」を離陸させたとするなら、第三の要素「男らしさ」はその持続の原動力となった。実業界が期待し、それを受けたYMCAが推進しようとしていた「男らしさ」とは、必ずしも身体的な卓越を含むものではなかった。いわば、生産品の変更（「成り上がりの男らしさ」から「熱情的な男らしさ」へ）は、「身体事業」という生産ラインの置かれる体育館でおこなわれた。しかし、最初のうちは、この新しいラインを設計図もないまま稼働させたため、不良品が生産されることになった。なぜなら、そこには現場監督がいなかったり、仮にいたとしても職人あがりの放任主義者だったりしたからである。つまり、事実はこうである。活動を多様化させたYMCAは体育館を導入し、「身体事業」に着手。体育館で体操を指導するにあたり、外部から指導者を雇った。しかし、すべての体育館に指導者を配置できたわけで

はなかったし、指導者自身がサーカスなどの経験で得た「荒っぽい男らしさ」を披露することもあった。それは、YMCA にとって「健全」な状態とはいえなかった。

こうした状況を救ったのが、ボストン YMCA のロバーツだった。彼は、体育館を「健康の殿堂」と呼称し、「健康」の名のもとに軽体操を推奨した。換言すれば、軽体操を推奨することで「(身体的な) 健康」を、体育館を「健康の殿堂」と呼称することで「健全」を謳っていたのである。加えて、どちらとも取れるかたちで、揺れ動く二つの「男らしさ」にも言及していた。「われわれの体操の目的とは、……人生という戦いにおいて男性をより良い労働に適応させることである」。「人生と権力のことばかり考えている彼らには、日々の労働が使いそこなった身体の各部にあそびを入れることのみを目的に体育館を利用する必要がある」。「体育館は身体的存在の喜びを増大させ、より良い知的かつ霊的活動を可能にする」。「商売や勉学と同じくらい、体操に霊魂を注ぎなさい。……これが体操の道である。あなたはきっと、身体的に救われるだろう」。

以上が「スポーツ信条」の 3 つの要素に基づく、本論文のまとめである。「健康」とは、「(身体的に) 健康」で、「(社会的に) 健全」で、「男らしい」状態を指していた。アメリカの YMCA における「筋骨たくましいキリスト教」とは、このような意味での「健康」状態を身体運動によって獲得することであったといえるのではないだろうか。1880 年代半ばまでに、それは「健康」の名のもとに YMCA の「身体事業」と結びつけられていた。また、こうした「健康」の多義性は、われわれが現在、「健康」のために身体を動かす際にも内包されているように思える。

最後に、なぜ YMCA は、最終的に体操ではなくスポーツを推奨するようになったのかという問題に触れておきたい。そのためには、なぜ YMCA において体操が受け入れられなくなったのかを考える必要がある。

たしかにロバーツは、YMCA の体育館から「不健全」を取り除き、より「健全」な「居場所」となるよう、トレーニング・スクールで指導者育成に尽力した。それは、のちに彼がスクールを辞任した際の決議においても、「ロバーツの功績」として認められているところである。それでもやはり、ロバーツの辞任はスクールの転換期であっただけでなく、アメリカ体育界全体の縮図であったとも考えられる。ロバーツは体育館ムーブメントをけん引した体操指導者たちと同様に、「方式」に拘泥していたし、彼らよりも露骨に競技スポーツを批判していた。スクールを辞任したのも、その「競技スポーツ主義」に我慢ならなかったからであった。

しかし、それだけではない。ロバーツが同時代の体操指導者たちと決定的に異なっていた点がある。医学への関心である。ロバーツは体操の医学的効用を謳ったものの、必ずしもそれは医学

知識に基づくものではなかった。じっさいに彼は医学訓練を受けておらず、その意味では曲芸師と同じで「職人あがり」だった。一方で、トレーニング・スクールでは、彼の得意とする実技のみならず、人体測定学や解剖学、生理学、衛生学、心理学などの理論が重視された。このことは、「身体文化[physical culture]」あるいは「身体訓練[physical training]」的な体育から、「科学的[scientific]」あるいは「身体教育[physical education]」的な体育への転換とみなすことができるだろう。まさに、身体事業から体育事業への、体育館部門から体育部門への、体育館長から体育主事への移行である。したがって、ロバーツが反対していたのは、競技スポーツのみならず、こうした新しい体育のあり方であったといえそうである。

対するギューリックは医学を修めており、トレーニング・スクールでも実技と理論の両方を担当していた。ただし、はたして彼が最初から積極的に競技スポーツを推進しようとしていたのか、そしてそれはどの程度世相を反映したものであったのかについては、本論文では実証することができなかった。現に彼は、サージェントのもとで体操の指導を受け、体操指導者として YMCA と関わりをもったのである。この疑問を解明するためには、体操とスポーツの連続性を考慮したうえで、大学やハイスクールでの学生スポーツ、アスレティック・クラブ、プロスポーツなどの多様なスポーツムーブメントに YMCA のそれを位置づける必要があるだろう。あるいは、YMCA の「競技スポーツ主義」は、肉体的なたくましさを過剰なまでに強調する 1890 年代のサンドウ的な「身体文化」への抵抗（逆説的に「身体文化」の復興）であり、また子供の性格形成にスポーツや遊戯を利用する 1920 年代の「新体育」ムーブメントの源流とみなすことができるかもしれない。こうした仮説の検証については他日を期すことにしたい。

参考文献一覧

一次史料

・*Annual Report of the Young Men's Christian Association of Boston*.

・*Annual Report of the Young Men's Christian Association of the City of New York*.

・*Catalogue of the International Young Men's Christian Association Training School*.

・*Catalogue of the School for Christian Workers*.

・"Department for the Training of Gymnasium Instructors, Summer School—1887," Springfield College Archives and Special Collections, School for Christian Workers Publications, 1885-1890, copy2.

・*Journal of Proceedings of the Convention of Young Men's Christian Associations of the United States and British Provinces*.

・*Proceedings of the Association for the Advancement of Physical Education*; *Proceedings of the American Association for the Advancement of Physical Education*.

・*Proceedings of the International Convention of the Young Men's Christian Associations*.

・*Lewis' New Gymnastics for Ladies, Gentlemen and Children and Boston Journal of Physical Culture*.

・*The Triangle*.

・*The Watchman*.

・*Trustee Minutes* (June9, 1889), pp.85-87, Springfield College Archives and Special Collections.

・*Year Book of the Young Men's Christian Associations.*

・Barrows, Isabel C., ed. *Physical Training: A Full Report of the Papers and Discussions of the Conference Held in Boston in November, 1889*. Boston: George H. Ellis, 1890.

・Higginson, Thomas H. "Saints, and Their Bodies," *The Atlantic Monthly* 1-5 (1858), pp.582-595.

・Lewis, Dio. *The New Gymnastics for Men, Women and Children*. Boston: Ticknor and Fields, 1862.

・Roberts, Robert J. *Home Dumb Bell Drill*. Springfield: Triangle Publishing Co., 1894.

・Sargent, D. A. "The Inomotor: A Fundamental Mechanism for A New System of Motor Vehicles, Testing Apparatus and Developing Appliances," *American Physical Education Review* 5-4 (December, 1900), pp.312-323.

・Windship, George B. "Autobiographical Sketches of a Strength-Seeker," *The Atlantic Monthly* 9 (January, 1862), pp.102-115

二次史料

・阿部生雄『近代スポーツマンシップの誕生と成長』、筑波大学出版会、2009 年。

・今村嘉雄『西洋体育史』下、大空社、1948 年。

・――『学校体育の父―リーランド博士』、不昧堂書店、1968 年。

・大櫃敬史『日米体育交流に関する実証的研究―アマースト方式の導入と日本近代体育の成立』、学文社、2015 年。

・岡本勝『禁酒法：「酒のない社会」の実験』、講談社現代新書、1996 年。

・小田切毅一「アメリカにおける先駆的スポーツ教育―ギューリック」、岸野雄三・山本徳郎・稲垣正浩編『体育・スポーツ人物思想史』、不昧堂出版、1979 年、421-468 頁。

・――『アメリカスポーツの文化史』、不昧堂出版、1982 年。

・――「体育の専門科学としての人体計測学に関する論議―アメリカ体育振興協会期（1885～1903 年）の学説的論議への着目―」、成田十次郎先生退官記念会編『体育・スポーツ史研究の展望―国際的成果と課題―』、不昧堂出版、1996 年、226-242 頁。

・――「アメリカ体育振興協会期（1885-1903 年）の体育専門職をめぐる議論―医学博士取得会員と体操教師会員との抗争とかかわって」、『体育学研究』第 41 巻、1996 年、1-10 頁。

・――「アメリカ体育振興協会に参集した体育家たち―体育専門職成立の歴史的幕開けを振り返る」、『体育学研究』55 巻、2010 年、299-311 頁。

・川島浩平「アメリカにおけるスポーツとキリスト教」、中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則編『21 世紀スポーツ大事典』、大修館書店、2015 年、447-451 頁。

・木下秀明『体操の近代日本史』、不昧堂出版、2015 年。

・木本茂三郎『YMCA 史ノート』、日本 YMCA 同盟出版部、1983 年。

・鈴木栄吉『基督教青年会発達史』、開拓社、1921 年。

・高尾将幸『「健康」語りと日本社会―リスクと責任のポリティクス』、新評論、2014 年。

・常松洋『ヴィクトリアン・アメリカの社会と政治』、昭和堂、2006 年。

・奈良常五郎「YMCA とは何か」、『開拓者』第 46 巻第 11 号、1950 年 11 月、2-8 頁。

・奈良伝『若き日のジョージ・ウイリアムズ』、日本 YMCA 同盟出版部、1974 年改訂増補版。

・野村達朗『アメリカ労働民衆の歴史―働く人びとの物語』、ミネルヴァ書房、2013 年。

・村岡健次『近代イギリスの社会と文化』、ミネルヴァ書房、2002 年。

・森本あんり『アメリカ・キリスト教史』、新教出版社、2006 年。

・――『アメリカ的理念の身体』、創文社、2012 年。

・山中良正『アメリカスポーツ史』、逍遥書院、1960 年。

・D. B. ヴァンダーレン・E. D. ミッチェル・B. L. ベネット共著、加藤橘夫訳『体育の世界史：文化的・哲学的・比較研究的』、ベースボール・マガジン社、1958 年。（*A World History of Physical Education*, 1953.）

・R・A・スミス著、白石義郎・岩田弘三監訳『カレッジスポーツの誕生』、ベースボール・マガジン社、2001 年。（*Sports and Freedom: The Rise of Big-Time College Athletics*, 1988.）

・J・ネイスミス著、水谷豊訳『バスケットボール:その起源と発展』、日本 YMCA 同盟出版部、1980 年。（*Basketball: Its Origin and Development*, 1943.）

・ロバート・C・フラー著、池上良正・池上冨美子共訳『オルタナティブ・メディスン―アメリカの非正統医療と宗教』新宿書房、1992[1989]年。

・ジョン・J・マカルーン著、柴田元幸・菅原克也訳『オリンピックと近代―評伝クーベルタン』、平凡社、1988 年。（*The Great Symbol: Pierre de Coubertin and the Origins of Modern Olympic Games*, 1981.）

・C・ライト・ミルズ著、杉政孝訳『ホワイト・カラー』、東京創元社、1957 年。（*White Collar: The American Middle Classes*, 1951）

・エミット・A・ライス著、ジョン・L・ハッチンスン改訂、今村嘉雄・石井トミ共訳『世界体育史』、不昧堂書店、1954 年。（*A Brief History of Physical Education*, 1952.）

・ピーター・レヴィーン著、菅原克也訳『野球をビジネスにした男：スポルディングと大リーグ』、平凡社、1987 年。（*A. G. Spalding and the Rise of Baseball: The Promise of American Sport*, 1985.）

・サラ・A・レヴィット著、岩野雅子、永田喬、エィミー・D・ウィルソン訳『アメリカの家庭と住宅の文化史―家事アドバイザーの誕生』、彩流社、2014 年。（*From Catharine Beecher to Martha Stewart: A Cultural History of Domestic Advice*, 2002.）

・エフ・イー・レナード, アール・タイト・マッケンジー著、岡部平太・安川伊三共訳『欧米体育史』、有明書房、1988[1928]年。（*A Guide to the History of Physical Education*, 1923.）

・Anderson, William G. “The History of the American Association for Health, Physical Education, and Recreation then called The Association for the Advancement of Physical Education,” *Journal of Health and Physical Education* 12-1(January, 1941), pp.3-4, 61-62.

・Baker, William J. *Playing with God: Religion and Modern Sport*. Cambridge: Harvard University Press, 2007.

・――. “Disputed Diamonds: The YMCA Debate Over Baseball in the Late 19th Century.” *Journal of Sports History* 19-3 (Winter, 1992), pp.257-262.

・Bederman, Gail. *Manliness & Civilization: A Cultural History of Gender and Race in the United States, 1880-1917*. Chicago: The University of Chicago Press, 1995.

・Blumin, Stuart M. *The Emergence of the Middle Class: Social Experience in the American City, 1760-1900*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989.

・Brink, B. Deane. *The Body Builder: Robert J. Roberts*. New York: Association Press, 1916.

・Boyer, Paul. *Urban Masses and Moral Order in America, 1820-1920*. Cambridge: Harvard University Press, 1978.

・Chudacoff, Howard P. *The Age of the Bachelor: Creating and American Subculture*. Princeton: Princeton University Press, 1999.

・Doggett, Laurence L. *History of the Boston Young Men's Christian Association*. Boston: Young Men's Christian Association, 1901.

・――. *A History of the Young Men's Christian Association*. New York: Association Press, 1922.

・――. *Man and a School: Pioneering in Higher Education at Springfield College*. New York: Association Press, 1943.

・Dorgan, Ethel J. *Luther Halsey Gulick: 1865-1918.* New York: AMS Press, 1934.

・Gerber, Ellen W. *Innovators and Institutions in Physical Education*. Philadelphia: Lea & Febiger, 1971.

・Goldstein, Warren. *Playing for Keeps: A History of Early Baseball*. Ithaca: Cornell University Press, 1989.

・Green, Harvey. *Fit for America: Health, Fitness, Sports and American Society.* New York: Pantheon Books, 1986.

・Hopkins, C. Howard. *History of the Y.M.C.A in North America*. New York: Association Press, 1951.

・Johnson, Elmer L. *The History of YMCA Physical Education*. Chicago: Association Press, 1978.

・Ladd, Tony and Mathisen, James A. *Muscular Christianity: Evangelical Protestant and the Development of American Sport.* Grand Rapids, MI: Baker Books, 1999.

・Leonard, Fred E. *A Guide to the History of Physical Education*. Philadelphia: Lea & Febiger, 1923.

・Lovett, James D. *Old Boston Boys and the Games They Played*. Boston: Little Brown & Company, 1908.

・Lucas, John A. and Smith, Ronald A. *Saga of American Sport*. Philadelphia: Lea & Febiger, 1978.

・Lupkin, Paula. "Manhood Factories: Architecture, Business, and the Evolving Urban Role of the YMCA, 1865-1925." Mjagkij, Nina and Spratt, Margaret, ed. *Men and Woman Adrift: The YMCA and the YWCA in the City*. New York: New York University Press, 1997.

・――. *Manhood Factories: YMCA Architecture and the Making of Modern Urban Culture*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2010.

・Mjagkij, Nina and Spratt, Margaret, ed. *Men and Woman Adrift: The YMCA and the YWCA in the City*. New York:

New York University Press, 1997.

・Moore, Louis. “Fine Specimens of Manhood: The Black Boxer’s Body and the Avenue to Equality, Racial Advancement, and Manhood in the Nineteenth Century.” *Melus* 35-4 (Winter, 2010), pp.59-84.

・Park, Roberta J. “Edward M. Hartwell and Physical Training at The John Hopkins University, 1879-1890,” *Journal of Sport History* 14-1 (Spring, 1987), pp.108-119.

・Paul, Joan. “The Health Reformers: George Barker Windship and Boston’s Strength Seekers.” *Journal of Sport History* 10 (Winter, 1983), pp.41-57.

・Pena, Carolyn de la. “Dudley Allen Sargent: Health Machines and the Energize Male Body.” *Iron Game History* 8-2 (October, 2003), pp.3-19.

・Pfister, Gertrud. “The Role of German Turners in American Physical Education,” *The International Journal of the History of Sport* 26-13 (October, 2009), pp.1893-1925.

・Putney, Clifford. *Muscular Christianity: Manhood and Sports in Protestant America, 1880-1920.* Cambridge: Harvard University Press, 2001.

・——. “Luther Gulick: His Contributions to Springfield College, the YMCA, and ‘Muscular Christianity’.” *Historical Journal of Massachusetts* 39-1&39-2 (2011), pp.144-169.

・Rader, Benjamin G. *American Sports: From the Age of Folk Games to the Age of Televised Sports 5th ed*. Upper Saddle River, NJ: Prentice-Hall, 2004[1983].

・Riess, Steven A. *Sport in Industrial America, 1850-1920 2nd ed*. West Sussex: Wiley-Blackwell, 2013[1995].

・——. “Sport and the Redefinition of Middle-Class Masculinity in Victorian America.” Pope, Steven W., ed. *The New American Sport History: Recent Approaches and Perspective*. Chicago: University of Illinois Press, 1996, pp.173-197.

・Rotundo, E. Anthony. *American Manhood: Transformations in Masculinity from the Revolution to the Modern Era*. New York: Basic Books, 1993.

・Sargent, Ledyard W., ed. *Dudley Allen Sargent: An Autobiography*. Philadelphia: Lea & Febiger, 1927.

・Somers, Dale A. “The Leisure Revolution: Recreation in the American City, 1820–1920.” *The Journal of Popular Culture* 5-1 (Summer, 1971), pp.125-147.

・Swanson, Richard A. and Spears, Betty. *History of Sport and Physical Education in the United States* 4th ed. Boston: MCB/McGraw-Hill, 1995[1978].

・Thompson, G. F. “History of Physical Work in the Young Men’s Christian Association.” *Association Seminar* 12-9&12-10&13-1&13-2&13-3&13-4 (1904-1905), pp.301-315, 380-389, 13-39, 47-67, 95-104, 127-156.

・Todd, Jan. *Physical Culture and Body Beautiful: Purposive Exercise In the Lives of American Woman 1800-1870.* Macon: Mercer University Press, 1998.

・Weston, Arthur. *The Making of American Physical Education*. New York: Appleton Century Crofts, 1962.

・Whorton, James C. *Crusaders for Fitness: The History of American Health Reformers*. New Jersey: Princeton University Press, 1982.

・Zald, Mayer N. *Organization Change: The Political Economy of the YMCA*. Chicago&London, The University of Chicago Press, 1970

謝辞

修士論文を執筆するにあたり、多くの人たちから力添えを得た。とくに、指導教員の石井昌幸先生には学部生の頃から足掛け5年お世話になった。大学院に進学することを決めた3年前から、院生生活はスタートした。ゼミでおこなう英語文献の輪読では、地道に辞書を引き、緻密に翻訳することが求められた。そして、そうした「練習」だけでなく、学会や研究会などの「試合」に積極的に参加するように指導された。思えば、かつてランニングシューズを履きつぶしたように、辞書を片手に走り続けた3年間だった。今なら「研究もスポーツと同じ」という先生の言葉を理解できるような気がする。ここ東伏見で生きる糧のようなものを得ることができたのも、ひとえにこの研究室のおかげである。ありがとうございました。

東伏見の研究室では、中村哲也先生と鈴木楓太先生にもお世話になった。兄のようなお二人による的確かつ丁寧な指導を通じて、研究者としてのみならず社会人としての振る舞いを教わったように思う。また、共に机を並べ、同じ釜（鍋）の飯を食った佐々木陸摩先輩と星野映君、いつも愉快な寒川研究室、京都大学の川島研究室、一橋大学の貴堂研究室と坂上研究室の皆さんあってこその充実した院生生活だった。とくに、貴堂嘉之先生には、外部からのゼミ参加をお許しいただいたことに改めて感謝を示しておきたい。ありがとうございました。

また、長年バスケットボールの研究をされてきた水谷豊氏には、史料の収集やその解釈に多大なる支援を受けた。氏なしでは、アメリカでの調査はもちろん、この研究自体が成立しなかっただろう。そして、スプリングフィールド大学アーキビストのジェフ氏には、現地で強力なバックアップを得た。記録的な豪雪と膨大なアーカイブに囲まれて史料を読み込んだあの時間を、この人生で経験できて良かった。両氏にひときわ感謝を述べたい。本当にありがとうございました。

そして何よりも、愚息のわがままを聞いてくれた両親はじめ家族にありったけの感謝と敬意を表したい。いつもありがとう。

読んでくれたすべての人たちに感謝する。共に生きましょう。

2016年2月18日　東伏見の研究室にて

松下 大樹